



マンガ大賞2024決定!
選考員コメント掲載!

マンガ大賞
Cartoon grand prize
2024 マンガ読みが選ぶ2023年の一推!!

「君と宇宙を歩くために」 泥ノ田犬彦

選考員コメント・1次選考

- とにかく一話の完成度がすごい。世界中の人に読んでもらいたい深く丁寧に作られた一話。まだ一巻なので、これから肅々と彼らの行く末を見届けたい。

bar 図書室 / 岡部愛

- 1話目を読んだ時とても衝撃を受けました。日々をほんの少し優しく照らしてくれるような、周りの人にもう少しだけ優しくなれそうな物語だと思いました。

会社員 / 津田 圭

- 電車を読むのはヤバイ作品。「宇宙」を歩くための勇気。自分の弱さに向き合う勇気。そして勇気が、心が折れそうなときに、言ってもらいたかった言葉をかけてくれる友の存在。社会は厳しい、辛いものだ。この世を歩いて行くのは「宇宙」を歩くようなものかもしれない。でも君となら歩いて行ける。勇気を持てる。素晴らしい作品をありがとうございました。

COMIC ZIN 商業誌担当 / 塚本浩司

- 勉強がよくわからない、バイトでミスが続いてしまう、人との距離感がつかみづらい。など、誰にだって起き得るものよりほんの少しだけソフトウェアの内側にあるところに起因する難しさに対して、優しく補助線を引いてくれるようなお話です。感じ方や振る舞い方が独特で、「ふつう」に生きていくのに色々工夫をしなければいけない宇野くんと、勉強やバイトを「ふつう」にするのに苦労しながら、それを認めたくなくてグレ気味だった小林くん。正反対に見える生き方をしていたふたりが関わり合っていくことで、少しずつふたりの世界が重なっていく様子が読む人の記憶や考え方に重なったとき、優しく手を引いてもらっているときのような、あたたかな感情を与えてくれます。

株式会社ムービック / 岡部 真矢

- 2人の高校生が出会い、時に悩み、成長していくお話です。事前情報はそれだけで良いので、読んだ後にたくさん考えて欲しいです。あとがきに書かれていたように、時代設定を平成にしているからテーマの一部を言語化せず進めているというのが、一つの大きな特徴だと思います。敢えて解像度を低くすることで、見え方が違ってくる。他の同テーマの作品とは一線を画すものになっていると思います。2人の成長と周りの人たちと歩む道を、描かれているまま素直に受け止めたいです。

会社員 / 堀尾素子

- 登場人物たちの悩みや前向きな姿勢が感動的で、泣ける場面も多く、本当に心温まる友情物語です。「特性」という内容はとてもセンシティブで、当人もその周りの人も様々なことに慎重にならざるを得ない昨今ですが、そんな現代で生きづらい人々に対する理解を深めつつ、前向きな気持ちになれる一作でした。涙なしには語れません。

会社員 / 三浦佑樹

- 宇野くんや小林くんや美川部長のように、苦手なこと、困ってしまうこと、悲しくなることが、私にも（きっと誰にでも）ある。彼らと年代別の読者は「大丈夫だよ」と励まされた気持ちになっている（といいな）と思う。が、私は大人として、彼らと一緒に泣いているだけじゃなくて（実際泣いている）、若い人がなるべく苦しまないように何が出来るだろう、と真剣に考えながら読んでしまうし、そう思わせてくれてとてもありがたいです。そして！「大声で怒鳴り合う人を前にしたときに宇野くんがどうなるか」の見開きの絵の力に圧倒されました。

ライター / 門倉紫麻

- 描かれる登場人物の解像度が高い。日常生活における細かいリアクションを丹念に描くことで、人物を浮き彫りにしている。特別視せずに等身大で表現しているのが、どのキャラクターの行動倫理も理解でき、愛着がもてる。

丸善ジュンク堂書店 営業本部 / 小磯洋

- SNS で流れてきた一話を読み、「普通の人とちょっと違う」ことについて、なんてわかりやすくアプローチしてくれる漫画だろうと思いました。そして、普通ってなに？ 自分が普通だと言いきれる？ という気持ちにもなり。皆ができることをすごく頑張らないとできない二人が主人公ではありますが、部活の先輩やバイト先の先輩など、一見普通でもそれぞれに生きづらさを抱えていて、どんな人でも悩みながら生きている。宇宙のように生きづらい世の中を、小林さんと宇野くんがどうやって楽しくしていくのか。井ノ上先生のように、そっと見守るように読んでいきたいです。

主婦 / 堀江千秋

- 人よりもできないことを認めるのって、難しい。恥ずかしいを認めるのって、何歳になっても難しいです。そんな過程をじっくり、ひとつひとつ、丁寧に教えてくれる優しい漫画。他人になにかを教えるとき、がんばって伝えたいつもりでもどうしても伝わらないときがあるのですが、そういう場合は諦めずにまずその人を知ろうとするといいんだよなあ。いや、思っていたんですけど、ここまで丁寧に描かれたことにより、作品への感動と共に、この主人公たちや周りの子の感情を覚えていたいな、と思ったのです。まだ1巻なので迷いましたが、無視できなかった…。続刊も楽しみにしています！

WEB 制作・ディレクター / デザイナー / 河本 智芳

- 下手すると「コミュ障」で片付けられちゃうような宇野と見た目ヤンキーの小林。ぜんぜんかわりあわなさそうな二人だけど、不思議と一緒にいる。そして、少しずつ世界が広がっていく。天文部にだって入る。天文部顧問の井ノ上先生が2人の入部届を見ながら「あらあら、青春のど真ん中ですねえ」とつぶやくシーンが一番のお気に入り。

鳥取県立図書館 / 野間勤

- この漫画の登場人物の宇野くんや小林くんよりも私は普通で、普通に歩いているつもりだったけど、目を逸らしていたり、雑だったり、つもりなだけで、2人の方がしっかりと宇宙を歩こうとしていました。すごく尊敬しました。この世は歩きづらいついていたらぜひ読んでほしい。勇気がもらえて少しだけ怖くなくなって、一歩踏み出せる漫画だと思います。

声優 / 富岡美沙子

- 人と違うことがこんなに優しく描かれたマンガがあるだろうか。一歩間違えれば息苦しくなる男子高校生の学校生活のなかで、生きづらさがあることが全面に出ることもなく、人と違うことについて断定的な名称が出てくることもなく、毎日を過ごすために工夫が必要なだけなんだと、それなりに大変なことでもある種あっけらかんと当たり前で高校生活が進んでいく。この一見大変に見える当たり前をお互いが自然に受容しあっている様子に、読んでいるほうもおおらかになり癒やされます。みんないいヤツや…。彼らの幸せを願いたくなります。タイトルもいいですね。共に歩くために、何が必要なのか？ きっとこれから優しく気づかせてくれるのではないかなと思います。

公務員 / 宇田川結衣子

- 主人公ふたりの問題をうまく対比させて描き、それを普遍的なものとして読者に伝える第1話がとにかくすばらしかった。

ときどきライター / 縣丈弘

選考員コメント・2次選考

- ADHD少年の「生きにくさ」、学ぶことからドロップアウトしたヤンキー少年の「生きにくさ」を重ね合わせて描くところから始まる物語。多かれ少なかれ、人はこういうふうな生きにくさを抱えて生きていくもので、それだからこそ、そこにひたむきに向かい合う少年たちの姿に心が沁みる。

マンガ読み / サイトウマサトク

- 泣きました。悲しいとかではなく、涙と一緒に悪いものも流れ出ていきました。是非。

マネージャー / マネージャー樋口健

- この間、ペットのマルチーズを抱いて信号待ちをしているお爺ちゃんを見て何故かグッときて泣きそうになりました。何故、冒頭にマルチーズを抱いたお爺ちゃんの一文を入れてしまったのか分かりませんが、せっかく書いたので消さずによいと思います。ですがこの作品にはグッとるシーンがたくさんあるのです。たまりません。主人公のヤンキーの男の子が、今までの漫画に出てくるタイプとはちょっと違う感じで凄く良いです。優しいし、行き詰まった時の思考回路も凄く良いし新鮮でした。もう1人の主人公の男の子も素敵だし、本当に素晴らしい作品です。これは受け流せません。

吉本興業・芸人 / ムーディ勝山

- 今はニコニコ、なるべくゴキゲンでいたい僕ですが、子供の頃はそりゃあつまらないことで自身の不遇らしきものを呪ったものです。でも大人になり、みんな大なり小なりコンプレックスを抱えてたんだなと思えるようになった今、本作を読むと、当時は言語化できなかった気持ちがたくさん描かれている気がしました。ヤバいやつと思われた宇野くんも、ヤンキーな小林くんも、お互いを命綱に、うまく生きにくい現実を歩こうとします。これから物語がどうなっていくのかまだまだわかりませんが、なにかにつまづきながら、それでも上手にまっすぐ歩こうとして悩んだ、あの頃の気持ちをわかってくれる唯一無二かもしれないマンガです。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- “普通”って何だろう!? 調べると「いつ、どこにでもあるような、ありふれたものであること。他と特に異なる性質を持ってはいないさま。」なるほどやはりそういう事ですね。意味は分かっているものの、自分と考え方や振る舞いが違う人に出会ったとき“普通”じゃないな~と思ってしまう自分がいましたが、自分と異なる部分を認められるようになりたいと感じました。

株式会社エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部 大介

- この作品に出てくるキャラクターがもつ生きづらさを言葉で表現しようと思えばいくらでも簡潔に言い切れてしまうと思うのですが、あえて言葉にしないことで読む側が分断されずに物語に向き合うことができます。レットルがないので、このなかに出てくる困難が他人事にならない。自分にもそういうところあるよね? という気づきになって、ひょっとして自分のストーリーではないのか?なんて思えてくる。そう思うとキャラクターの素直さが眩しく見えてきて、自分はこんなふうに真剣に思い悩み、向き合い、でも絶望せずに生きているだろうか?と考えてしまいます。楽ではないけど、みんな楽しくいきたいよね。まだ既刊1巻ではありますが、読む人を引っ張り込むストーリー、キャラクターの表現、一見派手ではないのですがマンガとしての底力を感じます。マンガじゃないと描けないんじゃないかな。この先がどうなるのか気になります。

公務員 / 宇田川結衣子

- 二人の気持ちが分かりすぎて泣いた。昔「自分はどうしてこんなに駄目なんだろう」と自分を責め続けていた時期がありました。“普通”にその場に立つことを許されていないような感覚。お前は普通に振る舞えるほど普通の人間ではないのだからもっと申し訳なさそうにしている、と言われていたような感覚。尊厳が奪われているような。そんな心許無い、不安な気持ちを思い出しました。あと美川くんの「また上手く話せなかった……」も自分かと思いました。全員自分じゃん。全員自分なのに全員優しくていい子でこの先希望しかないです。

金海堂イオン準人国分店コミック担当 / 園田美智子

- 感じ方や表現のしかたが多くの人と少し違ったり、周りの人ができることが自分だけできないと感じていたり、そんなやりづらさを抱えながら生きている人たちの心を優しい視点で描いた作品です。生きることに難しさを感じていても、孤独ではない・孤独にはいけないという温かい意志を感じる、お勧めの一本です。

株式会社ムービック / 岡部 真矢

- まだまだ一巻なので推してよいか悩みましたが…1話が良いすぎて発表されて以来たくさんの人におすすめしてきたので、素直な気持ちで投票することにしました。世界中に薦めて回りたい尊さがあります。

bar 図書室 / 岡部愛

- 2023年の年末近くに強烈な印象を与えてくれた作品。人よりもできないこと、劣っていること、恥ずかしい気持ち、悔しい気持ち、どうにもならない、できないことを受け入れる過程を丁寧に我慢強く描いていて、登場人物の感情に激しく揺さぶられました。きっと現実にはもっとどうにもならない世界もあると思うのですが、そんなことではなく1人の人間達の物語として喜怒哀楽を共にさせてくれる魅力があります。

WEB制作・ディレクター / デザイナー / 河本智芳

- ヤンキーみたいな小林さんと普通の事が苦手な宇野くん。2人が交流する事でコンプレックスが少しずつ解消される様が良く描けていると思います。とても感動しました。まだ一巻しか発売されていないので、これからどう物語が進んでいくのか分からないけれど、2人の友情がより深まって共に前進していけると良いなあと心から思いました。

主婦 / 岸本しのぶ

- 一見ただの青春ものかなと思って読んでみたら、昨今見かける「生きづらさ」にフォーカスしていて、だからと言ってそれを読者に押し付ける感じでもないところがとても好みます。

デザイナー / 玉澤綾子

- とても心に迫る漫画だった。まだ1巻だが、これは出し惜しみなく多くの人に読んでもらいたいと“願う”作品。“普通”が出来ないというテーマではあるが、重い雰囲気はなく、でも明るすぎることもなく、青春という言葉でまとめるにはもったいない関係性。ふたりの存在が愛おしい。こういうのが親友だよね。そして補うウィンウィンな関係だと思う。友達は悪くも良くも影響を与えるもの。この二人の関係がぶつかりながらもずっと続く事を願いながらおすすめ致します。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西 良昌

- 人は出会いで変わっていきけるし、世界を広げることができる。素直にそう感じて優しい気持ちになりました。「人の視野が広がって瞬間はいつだって素晴らしい」成長していくひとは眩しいです。

主婦 / 紺野 泉

- 作者が描くテーマは軽くないのですが、説教臭くなく、絵のタッチやストーリーのテンポも良くて、感動的な作品です！「特性」を持っている身内がいるので個人的にも感情移入してしまいました。嬉しさや涙が止まらなかったです。登場人物たちに本当の意味での悪人がいないのも良い。今後の主人公たちの成長を追い続けたいです。

会社員 / 三浦佑樹

- 勉強ができない、まわりと合わせられない、仕事をなかなか覚えられない、家族や友人と人間関係がうまくいかない。人生にはいろんなトラブルがありますが、その見方を変えてみませんか？という作品です。「テーマの一部を言語化せずに」と作者が述べるように、その生きづらさは言葉でなくストーリーで体感し共感するものと思えてきます。気づきがあれば、少しだけ生きるのがラクになるかもしれません。

弁護士 / 三葛敦志

- 本当に青春のど真ん中。おじさんは2話の友だちのくだりでじ〜ときて泣いてしまいました。

往来堂書店 / 三木雄太

- 時節柄、生き辛さを抱えた人が、生きていくための命綱に当たるものが何かを考えながら読んでしまいました。

教師 / 持丸宏司

- 「人と同じように生活するのにさ、工夫が必要な人もいるんだよね」刺さるセルフでした。誰しものが生きづらさを感じると思う。何も無い宇宙を漂う感覚。そんな中をもがきながらも一歩ずつ前に進んでいく彼らを応援せずにはられない。

元 SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

- 読み終わった後の心の充実感とあたたかさが心地よかった。今ではこの作品の「君と宇宙を歩くために」というタイトルを見るだけで感動が押し寄せてくる。苦手や生きづらさに真正面から向き合うことの格好良さを、宇宙と絡めてとても素敵に描かれていた。子どもから大人までみんなに読んでもらいたい作品。

スターダストプロモーション・アイドル / 秋本帆華

- 多様性の時代というが、実際はいくつかのタイプにきっちりと分類して仕分けされ、むしろグラディエーションの幅はなくなっているような気がします。「あの子はADHDだから」「あの子は発達障害だから」で一括りにされてしまう。実際は人によって全く違うというのに。それぞれの生き辛さがあり、それを過度に感傷的にならず描き切っている見事な作品です。

丸善ジュンク堂書店 営業本部 / 小磯洋

- 人にはそれぞれ大なり小なり得手不得手があるはずだ。しかし不得手なことがある、その事実を認めることは難しいことだったりする。物語を通じて自らを認め成長していく小林と、自らの得手不得手を理解して日常に立ち向かう宇野の姿はとても素敵だ。凸凹しながら青春している彼らの姿に私自身も勇気をもらえた。この作品こそが日常におけるテザーになる方もいらっしやるはず。是非読んでみてほしい。

会社員 / 杉佳尚

- きっとこの物語が必要な人がいる気がする。というのが最初の感想。自分が子どもの頃は、こういうマンガはなかった。「変わったやつ」は「変わったやつ」として面白おかしい対象。それが受け入れられることもあったり、逆にいじめられたりすることもあったりする。これはその人間関係や「変わったやつ」に対して深掘りをしていく。最近、同じように「変わったやつ」認識をされている人に会ったことがある。彼は悩んでいて、それなりに自分に向き合っていて、改善すべきなのか、なぜ自分は人と違うのかを正面からとらえていた。理解できない人が周りにいるとき、彼の個性は死んでいて、「めんどくさい変な奴」だった。でも、彼を理解まではしなくても、ただ好きな人というもののそばに居るとき、彼は「愛すべき面白い奴」だった。つまり環境や理解で大いに変わる存在は「現実」にいるのだ。多様性の時代と言われているけど、そんな大したものに行く前に、クラスの「変わったやつ」を愛すること、愛せること、それはとても幸せなことだし、可能性を秘めていると思う。そんなことまで思わせてくれる。

クラスター広報 / 西尾美里

- このような分析は無粋と思いつつ、ヤンキー小林の振る舞いを見て、宮口幸治さんの「ケーキの切れない非行少年たち」という本を思い出したことは言っておきたい。小林と宇野とは抱えている問題が違うし、感じている生きにくさも別々だと思うが、それを「(フワフワした、無重力の)宇宙」というイメージでつなげてみせたのが見事。一人じゃなくて二人なら、互いに命綱をつけて、宇宙を歩くことができるかもしれない——。もうこれだけで涙腺が緩んできます。オーソドックスに見えて、実は極めて現代的な問題意識を持つ、友情物語の傑作だと思います。

読売新聞文化部 / 石田 汗太

- 誰しもが、今まで生きてきて、どうして人と同じようにちゃんとできないのか、そんな生きづらさを感じたことがあるのではないのでしょうか。人と同じことが普通にできない、そんな難しさを感じたことが私自身も何度もあります。「発達障害」という少しナイーブなテーマを根底にしながらそれを本文中の言葉として出すことなく、宇野ちゃんと小林くんという二人の友情を、とても丁寧に優しく描いている作品です。ページを捲るたびに、彼らの歩み寄りとする友情やそれを取り巻く人たちの暖かさに胸をグッと掴まれ、胸が熱くなります。1巻読むために、何度涙を流したとか、とにかく老若男女たくさんの人に絶対読んでもらいたい。そしてこの作品を通して、少しでも感じて貰えたら嬉しい。身近に、周りにいる少しでも生きづらそうにしている人たちに目を向けて、互いに寄り添うことができたなら。そんなきっかけになったらいい。そうしたら、人はもっとお互いに生きやすく、衝突のない「バリアフリー」の社会になるのではないかな…。

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

- 不器用な人たちが不器用に日常という宇宙の中を歩いていくお話。大切に読みたくなるお話であり、本当にたくさんの人に読まれてほしいお話です。この作品に救われる人も、この作品で少しだけ前よりやさしくなれる人もいるのではないのでしょうか。

会社員 / 津田 圭

- カッコ悪い自分を見つめる勇氣。出来ないことを嘆くのではなく、どうしたら出来るか、一步前に歩く、それがどれだけ勇氣のあることか。躊躇う自分を支えてくれる友の存在。言ってほしい言葉に読んでいて心、そして涙腺が震えました。

COMIC ZIN 商業誌担当 / 塚本浩司

- 努力をすれば、誰とでも分かり合えるなんて幻想に過ぎない。そう言って切り捨てれば、余計なことを考えなくてすむし、むしろ気もラク。年を重ねるごとに、そもそもいちいち迷わなくなる。……でも、それってホントにそう？ そう思い込みたいだけなんじゃない。人なんてそう簡単に分かり合えたりしない。でも、きっとまじわらなかったであろう点と点が思いがけずまじわることもある。いかにも徒勞に終わりそうな努力が実を結ぶこともあれば、やればできるはずのことをしなかっただけと気づかされることもある。知らず知らずのうちに、凝り固まっていた「人間関係」への思い込みをほぐし、思ってもいなかった場所に連れて行ってくれる一冊。苦手だなと思っていた人に話しかけたくなるし、違う工夫も試してみたいくなる。誰とどう歩くのか。私たちにはまだまだたくさんの選択肢があると思わせてくれる希望の一冊でもある。

介護ジャーナリスト / 島影真奈美

- 小林も宇野も、彼らの特性に何かしらの名前をつけることが出来るのだろうけれど、今のところ物語の中ではそれは重要ではなくて、それぞれ全く違う個と個がたまたま出会って、不器用ながらも成長していく様子に胸アツ。どんな人間にとってももがいて進むことをやめなければ、可能性は宇宙級に無限だなぁと感じる作品。

元書店員 / 内野智未

- 青春だぁ？。と大人の目線で見て胸が熱くなりましたが、ふと、自分の高校時代を思い出しました。高校でできた初めての友達、小林くんにとっての宇野くんみたいな存在で、偶然の出会いで繋がり、視野が広がり、一步踏み出すきっかけをくれた人でした。声優養成所の入学オーディションで作文を書いて朗読するという課題があったのですが、彼女のことを書きました。そんな彼女は科学部を自ら作り、宇野くん達と同じで天体観望もしていたので、別の部活に入っていた私はその時だけ遊びに行かせてもらっていました。星にも興味はありましたが、それよりも普段は立ち入り禁止の屋上に入れるというのに惹かれて(笑)初めて望遠鏡で観た星は眩しいくらいに輝いていて「ダイヤモンドみたい！」と宝石なんて見たことないくせに言ったのを覚えています(笑)ロマンチックな例えではなくマジでそのくらい光っててびっくりしたんです。宇野くん達が河川敷に行くと言っていたんですが、私も山の方にも行きました。先生と友達と学校の外へ出かけるのはとてもわくわくしました。1巻は天体観望に行くぞ！というところで終わったので、小林くんが星を見てどんな反応をするのか楽しみです。新しいものを見て気づいて学んで経験して成長していく彼らに触れて私もまた新しい景色を見ることができています。そして、大変なこと辛いこともあるかもしれないけれど、楽しい高校生活をおくっておくれ？というOBみたいな気持ちで見守っています。

声優 / 冨岡美沙子

- 1話読んで「あ、これに投票しよう」と思えた作品。うあーあーあー刺さる…刺さる。「個性を大切に」という素敵な世の中にはなったけど、それが誰でも等しく受け入れられているとは限らなくて、生きづらさを感じる人もいて…胸が苦しくなるね。最近になって「発達障害」という名称がつくようになったけど、調べるほどにぜんぜんっ他人事じゃない。たとえば人の顔が覚えられないのには「相貌失認」という名称があって、私は少なくとも該当する。もはや複合的に軽度な発達障害なのでは？とか思ってくる。(※文部科学省から平成19年に軽度発達障害という言葉原則使わないようにという通達があったらしいです。えっ平成19年って最近じゃあないんですか???)みんな誰もが何かの特長を持っていて、それが社会の枠組みでマイナスの影響を放つかどうかみたいなきっかけか。。逃げずに折れずに向き合うことがどんなに難しいことか…。小林も宇野も、工夫して前に進んでるのが震えるほど感動するし、自分もそうあらねばならないって思う。タイトルからは想像もつかないテーマで面食らったけど、新しい環境にいる時はマジで宇宙にいるみたいに感じる。周りの人が当たり前のように理解してできていることが出来ない苦しみは一生付きまとうし、それが無い人生ほど退屈なものはないとも思う。だから変化して進化し続けなきゃいけないね。

会社員 / 布施直人

- この作品には、社会での生きづらさを乗り越える希望が描かれていて、読み終えた後には雨上がりの清々に包まれた気持ちになりました。生きていて、時に胸が締め付けられるような苦しみ、残酷な現実を目の当たりにしますが、この物語を読むたびに世界を愛おしくも感じます。心に希望の火をともし、大変素敵な作品でした。どうかこれからも、2人の友情の日々が素晴らしいものでありますように。

デザイナー／シンガーソングライター／平松新

- 以外と普通にできるようになるっていうのは難しい。そのために、自分と向き合い直になれるっていうのは、もっと難しい。当たり前前のが、当たり前前にできるようになるための努力することが素敵であるということ思い出させてくれた作品でした。

広告会社・プランナー／平沼 良章

- タイプの違った生きづらい二人の出会いと、そこに関わってくる人々がよいですね。二人に関係してくる人間がみんな良い人ばかりでいいなと思いつつ、今後悪い話もでてくるのかなとか考えさせられます。

デザイナー／平沼寛史

- それぞれ異なる“生きづらさ”を抱える2人が、互いに交わり、影響し合いながら社会という得体の知れない宇宙を必死に前を向いて歩こうとする友情物語。現代であれば2人の“生きづらさ”はそれぞれ何かに分類できるのかもしれないが、分類することでかえって見えなくなるものもある。作者あとがきで語られているとおり、本作品ではテーマの一部を意図的に言語化せずにストーリーが展開されるが、2話と3話で脇を固める定年間際の先生と先輩を通じてしっかりと読者に語りかけ、何が大切なのかを考えさせてくれる。この二人がこの後どのように変わっていくのか、しっかりと見届けたい。次巻が大変楽しみである。

弁護士／弁護士 田邊幸太郎

- 一巻だけで投票するのはなんと申し訳ない気持ちですが、、ほんとに読みながら涙がとまりませんでした。主人公2人がお互い欠けたところを補い合っていく様が心うち、このマンガを読んだ後余韻でお酒をたらふく飲みました。どうか彼らが健やかに生きていてくれますように。そう願うばかりです。

ヘアメイク／北原由梨

- こういうことを書くと老害と思われるかもしれないが、歳を取ると自分が思っている以上にバカだったんだと気づく。なんであの時あしなかったのか？とかのレベルではなく、根本的に人間駅に自分はダメなのだ、と感じてしまう。でももし自分がこんなバカだと早くに知っていたら、いろんな人に相談できたと、そしてもっと変わったんじゃないかと思う。この作品の持つ本質はヤンキーがどうこうとか、内向的なのがどうこうとか、そういうものではなく、できないならできないなりにどう向かい合って生きていくかということだ。差別的な意味ではなく能力の違いは誰だってある。それを自分で認識できるのかどうかで人生はまるで変わる。ああ、泣きたくなる。

October Beast 代表・デザイナー／北山友之

- 「できなかったことができた」それはとてもシンプルで、すごいことだと思う。私たちは「できるようになるための方法」をずっと探して生きていて、それには正解も間違いもないし、人とは違うからすぐに見つからないかもしれない。途中で足が動かなくなることもあるかもしれない。それでも、みんなそれぞれ何かを「テザー」にして進んできたのだということを思い出しました。いくつかのテーマが盛り込まれているのかなと感じる中で、おそらく先生が「言語化せずに」と仰っていた部分に関して、思いを巡らせました。小林さんと宇野くんをはじめとして、漫画の中で起こる出会いはとても大きなものだけれど、出会いそのものよりも、お互いが目を反らさなかったことに意味があるのかもしれないと思いました。人と向き合うためには、まず自分と向き合わないといけないから、多くの人目が反らしてしまう。何十人何百人の人と出会っていても、向き合う気がなければ何にも気が付けない。自分と向き合い、人と向き合い、お互いを理解するにはどうしたら良いか。私も宇宙を歩いていきたいので、この漫画を読みながら考えたいと思います。

会社員／堀尾素子

- 言葉は不要で、ただ傑作、書いていただきありがとうございますというのみです。マンガにおける非定型発達者の描写が、かつての奇人変人からついにここまでできたのかと、その長年の歩みに想いを馳せたりもするのですが、まあそういうことよりも、宇野と小林の眼差し、ただそれに尽きるともいえます。日々ぼこぼこに現実から殴られて、絶望して、やさぐれて、「ひとりに慣れる」、それが人生であって、でもそのぎりぎりのところで、なんか偶然たまたまみたい、ふと前を見ていること、そこにとんでもない魔法がある。

会社員 / 末永龍介

- 高校に勤めた経験からすると、このマンガに出てくるようなケースも見えてきたし、それ以外のさまざまな困難も身近に見聞してきた。同質を強要する共生ではなく、異質が互いに支え合う共生に向かいますように。

鳥取県立図書館 / 野間勤

- 多くの人が違う個性のある人間、それぞれが助け合い、足りない所を足す、当たり前のように世界に存在している事象を確かめるいい作品だと思いました。

tetote 代表 / カ丸 真

- 生きづらさに対して真摯に明るく向き合っている作品。読んでいて力が湧いてくる。

会社員 / 齋藤隼

- 不器用な少年たちが必死に歩もうとする様に、心がぐっと苦しくなります。でも読み終わるとじんわり暖かくなる。素敵な作品です。作者の方の後書きに書いてある、時代設定が平成なのもとても納得がいてそこまで計算されていることも素晴らしい作品だと思います。彼らのこれからも見守りたいです。

女優 / 齋藤明里

- 第一話のインパクトは凄いものがあった。そこからの物語展開にも期待したい。

ときどきライター / 縣丈弘

マンガ大賞2024 ノミネート作品

月刊少年ガンガン / スクウェア・エニックス

「黄泉のツガイ」 荒川弘

選考員コメント・1次選考

- これぞ荒川弘！という作品です。読み始めたらやめられない。今回がギリだと思うので強く推したいです。

ブックエース上荒川店コミック担当 / 倉本かおり

- 驚いた。『鋼の錬金術師』級のを荒川弘さんは再び生み出すことができるのか。正直ツガイの能力の数々は『ジョジョの奇妙な冒険』シリーズのスタンドに近いものも多数あるが、両親を追うストーリー、「開」「封」という大きな仕掛けがいつ発動するのか、そもそも双子が今後どうなっていくのが楽しみでならない。また勢力分布が2つのみでなく多岐に渡っていることから長期的に連載が読めるんだ！ということに期待が膨む。『鋼の錬金術師』級のラストになったらもう言うことなし！はよ続巻！

October Beast 代表・デザイナー / 北山友之

- バトルシーンは流石の表現力で魅せてくれます。シリアスな場面ではシリアスなはずなのに笑いを誘ってきたりしますが、それがまた面白い！

販売員 / 八重田幸子

- もともと荒川弘先生の作品は好きなのですが、相変わらずポップさもあみながら、深いところまで連れて行ってくれる作品でした。特に“ツガイ”の設定は読み手をワクワクさせてくれ、要所要所の伏線の貼り方も、非常にワクワクさせてくれる作品です。

広告会社 プランナー / 平沼 良章

- 設定・ストーリー・ギャグなどなど、荒川ワールド全開で、安定と安心の王道作品。

ロングランプランニング / 小森和博

- 現代日本におけるファンタジー要素として、オカルト的な秘境の村と妖怪を組み合わせることで、新しい少年バトル漫画を開拓している先進的な漫画だと思います。敵味方の立場も目まぐるしく変わり、考察要素も満載。もちろん荒川先生のシリアスとギャグのバランスは絶妙の一言につきます。

会社員 / 佐藤優

- 流石の漫画力！次から次へと登場するツガイ、キャラが魅力的で引き込まれました。

会社員 / 津田 圭

- ツガイがいい！まずはそれに尽きます。なんて強くてかっこよくてかわいいのでしょうか。主に従い、守り、戦う姿に惚れ惚れします。ツガイって何？と思ったら、まずは読んでみてください。様々なモチーフから描かれるツガイを見るのが、一つの楽しみになっています。魅力的なキャラクターが多いのは、さすが荒川先生。どのキャラも回を増すごとにどんどん好きになってしまいます。個人的には、ここまで随所で株を？っ攫う立ち振る舞いをしているデラさんの人気、どんどん上がっていくことを祈っています。

会社員 / 堀尾素子

- SNS の広告で作品の存在自体は知っていたものの、てっきり時代物ファンタジーかと思って蓋を開けてみたら・・・1話にてハリボテを壊し廻るような目まぐるしいスピード感、さらに世界観やキャラデザも秀逸で即アニメ化してもおかしくない作品だと思います。これは本作の評価としてあまり適切ではないかもしれませんが、『大の大人が子どもに対して責任を持つことが当たり前だ』という倫理観がしっかりとした漫画が読めるという事自体に救われた気です。不条理な世界観の中で子供がグチャグチャに理不尽な目に遭う漫画が世に溢れかえってる昨今（そもそも昔からそういう設定がスタンダードとしてあって本作でもそういう描写がない訳ではないのだけ）、登場人物の大人が折目正しくしっかりと大人然としていると、変なストレスを感じずにこの手の漫画を楽しめるのだなと、そういう漫画を読むのに疲れた私は痛感しました。これは荒川先生の作品全てに共通していることだと思う。そんな観点からしてもまさに安心して人にお勧めできる一作になっているなと感じました。

フリーランス / 金輪英恵

- 穏やかそうな村に隠された謎や現代社会とのギャップ、解と封の力とは一体??！新刊が出る度に続きが気になって仕方がない作品です！

会社員 / 竹本 慧

- これぞ荒川先生！と言わしめる異能バトル漫画。面白くないはずがない！

あゆみ BOOKS 仙台一番町店 店長 / 土屋修一

- 何が正しい事実なのか、誰が本当のことを知っているのか、最初から複雑な構図で話が進んでおりまだ一部分しか見えてきておらず、だからこそ先がとても気になる作品です。

会社員 / 林礼春

- 設定も展開もめっちゃめっちゃぶっ飛んでて表現し難いけど面白いことは間違いない。

PENICILLIN / HAKUEI

- 時代物だと思って読んでたら、そんなことなかった！さすが荒川弘作品、一筋縄ではいかないキャラクターたちとストーリー展開。巻が進むごとにいい意味で裏切られてる展開で。結構しんどいシーンもあるのだけど、異形たちも個性的で先が楽しみです。

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

選考員コメント・2次選考

- 何かすごい。いろいろ凝ってる。とても面白い。

PENICILLIN / HAKUEI

- 過去の日本が舞台の伝奇ファンタジーかと思わせていきなり最先端の現代をぶち込み敵かと思わせて味方だったりやっぱり信用ならない相手だったりする複雑な状況の中を圧倒的な戦闘力と野獣のような直感力で走り回るユルの強さにとっても惹かれる。血みどろの戦闘があつて人死にもあつて裏切りもある陰惨な展開をコミカルな展開を挟むことによって中和しつつ先へ先へと進めていく漫画作りの手腕にも感嘆。そんな物語が行き着く先でユルとアサが持つ能力が誰かのために使われることがあつたりするのか、それを画策しているのはいったい誰なのかといったより大きな謀略への関心も誘われる。ユルは封印の力に目覚めることがあるのか。その時に何が起こるのか。想像しつつこれからの展開を見ていきたい。

書評家／ライター／タニグチリウイチ

- 『鋼の錬金術師』でコミックス全 27 巻におよぶ長い物語を、見事な大団円に導いた構成力！そこでも垣間見えていたソリッドな自然観、生命観がいつでも育まれたのかを描いてくれた『百姓貴族』！満を持してそれらが注ぎ込まれたのが本作。当然ながらとんでもない。物語の底はまったく見えないし、そもそもどこに連れていかれるのかわからない！さらに「ツガイ」の概念が秀逸！『ポケットモンスター スカーレット・バイオレット』で『碧の仮面』まで余裕のプレイをしていたら、『藍の円盤』のダブルバトルでいきなり苦戦させられるような複雑さを本作のバトルパートにもたらしめています！この匠の技を楽しめる幸せよ…

会社員 / やのこうじ

- 笑いを抜かりなく散りばめつつも、ハードな展開はしっかりグロく、メリハリの効いたストーリー展開が秀逸。気持ちよく想像を裏切られる 1 話目を皮切りに、一気に 5 冊の頁を捲り続けてしまいました。登場する「ツガイ」と「ツガイ使い」たちそれぞれの個性や、その関係性が敵味方問わず魅力的で、彼らの会話や対決の端々にワクワクやドキドキが詰まっています。読み始めるなら「まさに今！」という作品ではないでしょうか。しかし、まさか目玉だらけの上顎と下顎をこんなに可愛く思うことになろうとは思わなかった……荒川マジック恐るべし。

会社員 / 伊東敬祐

- 荒川弘先生の作品全てに共通することですが、この世に生あるものが生きることについて一本筋が通っていて、その筋がまた極太なんですよ。どうせ間違いなくおもしろい、おもしろさなんて知れ渡ってるだろうと勝手に思い、一次での投票を避けたのですがやはり推したい。おもしろいと思っていましたが、想像を超えていました。推さずにはいられない！これまでの作品より一層「生きる」ことに肉薄している気がします。敵味方それぞれに理があり、そこにブレがないので、ストーリーやキャラクターの存在に説得力があります。これまでもそうだったと思いますが、さらにパワーアップしている気がします。生きることを突き詰めていくと、ひとはひとりでは生きられないことに気づいていく。命について、生きていくことについて、ちゃんと少年マンガの形を取りながらまっすぐ表現してくれる荒川先生、大好きです。

公務員 / 宇田川結衣子

- 「鋼の錬金術師」や「銀の匙」などで人気の荒川さんの作品なので、放っておいても勝手に売れるはず……とはわかっているのですが、なぜか推してしまいたくなります。日本の「八百万の神」の思想をうまく設定に落とし込んでいますが、これってセンスなんですかね？そしてシリアスとコミカルのバランスも絶妙で、さすがの「荒川ワールド」なのかなと。マンガを普段読まない層でも、世代に関係なく、楽しく読めますよ。

サブカルライター / 河村鳴紘

- 伝奇モノ。妖怪モノ。アクションモノ。好きなものてんこ盛り。テンポ良い会話も心地よい。さすが荒川先生、読みたかったマンガです！

医師 / 岸本 倫太郎

- 荒川弘作品！期待しかないと思ってる期待をこえて更に面白さを増しています。作りこまれた設定ストーリーはもちろん、バトルも読者が置いてけぼりになりません。もっと面白くなっていくのが楽しみ。

図案家 / 橋本寛子

- 書きたびごとに傑作という作家のひとりである荒川弘先生の新作もやっぱり傑作でした。おもしろい作品しか書けない呪いなのか。いまのところわりと狭い範囲で物語が展開していますが、すでに主人公たちは深いところまで潜って帰ってきたところ。これからさらにどこまで深まっていくのか、どれだけ広がっていくのか。

教員 / 戸田穉

- 謎がいっぱいのツガイバトル。解らないことばかりだけど、テンポがよくてグイグイ引き込まれてしまいます！さすがです、荒川先生！一見怖そうなツガイたちがかわいくて良いです。

主婦 / 紺野 泉

- この世界観と構成を荒川先生流にどう表現されのかなと期待MAXの状態を読んでいるのに、毎巻その期待の遙か上空を飛び越えていきます。流石すぎます。異世界ファンタジーかと思いきや怒涛の展開もりもり。ツガイのアイデア、画力、キャラクターの魅力、どれも凄まじいです。主人公ユルの戦闘スキルに惚れ惚れ。というかもはや語彙力がなくて「面白い!!!」しか言えない。「勘のいいガキは」ネタはずるい(笑)

営業 / 佐々木つむぎ

- 冒頭からこんなに複雑な設定と大量の登場人物で、読者を(主人公と同じように)謎のど真ん中に置いておきながら、しっかりページを費やして話の展開の中で徐々に見せていくのが本当にうすぎて、「わからないからどんどん読んじゃう」で、気がついたら最新刊まで到達してしまった。

大日本印刷 / 佐々木愛

- 作者様が作者様じゃない? ぜったい面白いに決まってるじゃんと思ったら、想像を超える面白さだった。色んな信念と想いを敵役も持っていて、かっこよく美しくも人間臭くもがき先へと進むのが作者の魅力。ハガレンの高揚感再び。

鳥取県立高校教師 / 佐川ゆかり

- やっぱすごい! 世界が出来上がっていて、面白いです。ツガイ愛らしい・新刊を楽しみにしている作品のひとつです。

バイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- 今期出た漫画の中で一番ハラハラしたのは、『黄泉のツガイ』です。荒川弘先生の手によって描かれた伝奇アクション漫画であり、今までの荒川先生のアクション漫画でありながら新たな境地を切り拓いています。オカルト的な秘境の村と妖怪? が織り成す世界は、緊張感に満ちています。物語はユルとアサを中心に展開され、互いの立場が時に交錯しながら、村の秘密に立ち向かう姿が見事に描かれています。その緊張感とストーリーテリングの巧みさから、今回マンガ大賞にノミネートしました。荒川先生ならではの独特の世界観はそのまま、敵味方の立場が目まぐるしく変わる展開や、考察要素が満載です。さらに、土着的な因習要素や謎めいた村の秘密が、読者を引き込む要素となっています。荒川先生のシリアスとギャグの絶妙なバランスはそのままに、緊迫感と興奮を味わいたい読者に強くお勧めします。

会社員 / 佐藤優

- うしおととら、ジョジョ? ツガイってスタンドだね。一気に読者を引き込む力を持った力作である。

弁護士・三村小松法律事務所 / 三村 量一

- 『鋼の錬金術師』1巻ってもう22年も前だそうですね。少年ジャンルでこれだけの長期間活動して、しかも何度もヒット作が出せるのだろうかと思いついて読んでみたところ、1話でもグッと掴まれてしまいました。先生の描くスーツの男女たちも眼福です。

往来堂書店 / 三木雄太

- 読み応え抜群。キャラクターや世界観はもちろん引き込まれるし、敵勢力との境界が曖昧なものも面白く、誰が味方なのか分からなくなるほど奥行きのある作品。ツガイという新たな概念。存在が可愛く、推しツガイがどんどん増える。先の展開が読めなくてとても面白い。

スターダストプロモーション・アイドル / 秋本帆華

- ユルの心情に伴走する怒涛の冒頭、敵味方が先読みできない展開、随所に散りばめられた荒川節など本作も存分に楽しめます! ここまで散りばめられた伏線がどう回収されていくのか注目して読み続けたい!

ロングランプランニング / 小森和博

- ストーリー展開や登場人物の関係性が絡み合うなだけれど、混乱することなく読み進められる。

ツクリビト / 小野裕子

- 年によっては1年に何度も十勝を訪れる身としては、荒川弘という作家は『百姓貴族』『銀の匙』などの農業マンガ家だと捉えている。たぶんそんな読者は少数だろう。荒川弘というマンガ家は『鋼の錬金術師』という大ヒット作品（SFバトルダークファンタジー？）こそが作家としての本線であると認識されていたと思う。そんな路線の新作が『黄金のツガイ』だ。設定としてはかなり複雑かつ暗くなる場面もしばしばなのに、読者の理解を促進しながら、各話とも読み応えがたっぷりある。奥底に流れる深淵で重厚なテーマを、キャラクターの軽いトークで読み進めさせてくれる技術は特級品。その筆力には恐れ入らざるを得ない。未読のファンタジー好きの方、これからこの作品に触れられるなんて羨ましい！

ライター／編集者（馬場企画） / 松浦達也

- あっという間に物語に引き込まれた。どんどん展開されていくストーリーにページを捲る手が止まらなかった。なるべくなら前情報無しに読み始めてほしい。誰かに勧めたくなる、間違いなく面白い作品です。

会社員 / 杉佳尚

- 漫画や小説で、バトル多めの作品というのは目が滑ってしまいがちで「で、どっちが勝った？」と読み飛ばしてしまうタイプですが、一挙手一投足に目が吸い込まれる描写は流石というか、ストーリーパートで見せる各キャラクター達の常識から逸脱してる描写などは百姓貴族のようで、荒川弘の魅力詰め合わせという恐るべき作品だなと。

住職兼ライター / 蟬丸P

- 1巻から一気に、夢中になって読めるマンガです。荒川ワールド全開で登場人物もしっかり描かれていて面白い！

ブックエース上荒川店コミック担当 / 倉本かおり

- 読み始めるとさすが、荒川弘作品！と唸られます。表紙からは全く想像つかない、ストーリー性、展開の読めなさが素晴らしい。実は表紙だけ見て、ハガレンの外伝？かと思って、最初は読んでいなかったんですが、立ち読みで読み始めたら、あれよあれよというまに取り込まれました！今回は時代物か？と思わず、まずは3巻まで絶対読むべき！読み始めたら、あっという間に最新刊までまとめ買いしていた、そんな中毒性のある作品です。何が真実か。誰が味方なのか、敵なのか。毎回、シリアスと逆の移り変わりが忙しくて、捨てコマだったみたいなのが、実は伏線!?だったり、と何度、巻を行き来したことが。ヨルとアサの二人の兄弟はどうなるのか、巻を重ねるごとに次の展開が読めなくて、何が本題かが変わっていく印象を受ける作品です。今後の展開がとにかく楽しみ！！

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

- 問答無用の「少年漫画としての面白さ」が詰まった作品と感じました。数々の作品を生み出しながら、常に確かな評価を受け続ける大作家 荒川弘先生。漫画への情熱が微塵も薄れていないことを感じさせてくれます。いわゆる「なせる技」というやつなのでしょう。「魅せ方」に、強く引き込まれます。

音楽家・閃き堂店主 / 谷澤智文

- 手練れのエンターテインメント。膨大な数の登場人物を描き分け、読者を混乱させずに読み通させる物語力（いや漫画力と言うべきか）に脱帽する。

コミティア実行委員会会長 / 中村公彦

- 他にない独特の世界観と一癖もふた癖もある魅力的なキャラクターたち、そして一気に引き込まれる物語。巻が進むごとに増える謎、また伏線が回収される気持ちよさも味わえる、わくわくする作品。早く続きが読みたいです。

会社員 / 津田 圭

- 圧巻。登場するキャラクターがどれもこれも魅力的で、魅力的すぎて笑いがこみあげてくる。主人公や主人公を助ける者たちがチャーミングなもさることながら、敵役がたまたま良。バトルシーンも、宿命のからまり具合も絶妙。手のひらの上をころころ転がされるように、物語に身をゆだね、ただただ、おもしろがって読み進められる。元気な日にも、落ち込んだ日にも、誰とも会いたくない日にも、誰かと笑い会いたい日にも、おすすめ。

介護ジャーナリスト / 島影真奈美

- 隠れ里に住むいわくつきの双子の片割れが主人公で、時代物かと思わせて実は現代物で、「ツガイ」なる霊的な存在を使役する幾つかの派閥があって、でも一枚岩な訳もなく裏切ったり裏切ったふりをしたりして…なんて、こんなのもうアツすぎます。大好きに決まっています。とまあ勿論設定やストーリーも激アツなのですが、「ツガイ」の設定が民話や神話やUMAにちなんだものになっているので、読者の若い子や子どもたちがこの作品を通して民俗学に触れられるのも素晴らしいと思います。あと単純に「ツガイ」達が可愛すぎます。

会社員 / 畑中 瀬路奈

- これからまだまだ面白くなる要素を孕んでいます。いまでも読んでる私たちの心を揺さぶるこの展開にこの後どのくらい楽しませてくれるのか期待しまくりです。

販売員 / 八重田幸子

- 1巻無料で読めるよと教えてもらい、寝る前に1話だけ読もうと布団に入ってから読み始めたら、な、なん、なんじゃこりゃ、こんな1話でやめて寝られるわけない！さすがすぎると思いつつも、さすがという言葉で片付けていいものでもなく。その後の展開もずっと面白い。荒川先生の「銀の匙」はマンガ大賞受賞していますし、「鋼の錬金術師」や「百姓貴族」などでも有名。マンガ大賞のコンセプトは人に薦めたいマンガ。薦められなくても荒川先生を知ってる人、今作も読んでる人は多いと思いますが、それでもまだ読んでなかったらぜひとも読んでほしい。長く続けてこられて、またぜんぜん違う作風でこんなにも面白いです。

声優 / 富岡美沙子

- いいからなんでもいいから誰でもいいから説明してくれよ！っていう読者を置いていながら実はストーリーテラーの背中に目がついていてしっかりついてこられるように、読者が食いついて来られるように散りばめられたヒントとヒントとヒントに飲み込まれているうちに読み終わりました。なんだこりゃー！最初の牧歌はどこいったんだよおこんなはげしいのなんてきてない！しらないのぉとか言ってるうちにアサちゃんにトウクします。なんだこんなもん極トウクだわ。そういえば先生はダークファンタジーの金字塔描かれてますもんねどちらが正義でどちらが悪でどっちが善なのかわからずにモニョモニョして自分はこっち陣営が好きだ的なことを考えていうとうおおおなんじゃなんじゃ少年のココロにギョギョくるワードが飛び出るわ飛び出るわ。荒川先生ってやっぱり少年なんですよ。たぶん少年と青年のツガイ使ってるらっしゃる(確信)ガブちゃんの画力すこそんでやっぱ善悪分からねーわこれ作者の掌の上でころころされるやつだ

会社員 / 布施直人

- あいかわらずのワクワク感。コメディとシリアスのバランスも絶妙で、厨二心も変わらずくすぐってくれます。早く続き読みたい。

広告会社・プランナー / 平沼 良章

- 現代の日本とそうでない世界が入り混じっていて良いです。ツガイと主人公の関係もなかなか丁度よく、話のスピード感もよいです！敵味方含め、各キャラクターを立たせるのが上手いなど。どの層にも読みやすいかとおもいます！

デザイナー / 平沼寛史

- まだ本当の敵と味方が疑いながら読んでしまいドキドキしてしまう。黄泉のツガイを読み進めるとドキドキ息継ぎをわすれてしまう。そんなマンガでした。

カメラマン / 平沼久奈

- 面白い。最初は1巻で提示される様々な「？」に対して若干当惑するかもしれないが、2巻以降で徐々に世界観に対する解像度が上がっていき、気付けばのめり込んで最新刊に至っている。ふと気付いて前の巻でどういう描写がされていたのか確認したくなり手に取ると、そのままその巻を読んでしまう。そんな魅力を持った作品。作者は本作の他にも著名な作品を世に送り出しているが、やはりその手腕は素晴らしいというほかに、どうしたって魅せられてしまう。大好きな作品。

弁護士 / 弁護士 田邊幸太郎

- キャラクターとストーリーでぐいぐいと読者を引き込んでいき、続きが気になる！早く読みたい！と純粋に思わせてくれます。人間もツガイもとても魅力に溢れていて、特にツガイはモチーフも様々で、強さと共存するかっこよさや愛らしさ、怖さがとても良い！個性が爆発しているのに、出てくるキャラみんな好きになっちゃうこの現象は唯一無二です。荒川先生の描く新しい世界に触れられる喜びを、全身で感じてほしいです。

会社員 / 堀尾素子

- 日本独特の湿っぽい田舎の情景、息を呑むようなバトルシーン、軽快なギャグ、魅力的なキャラクター、その裏にありそうな粗大な謎、このマンガにはいろんな魅力がありますが、全てがたまらなく好き！老若男女すべての人が楽しめるマンガだと思います。

Sler・会社員 / 廣瀬 公将

マンガ大賞2024 ノミネート作品

トーチ web / リイド社

「神田ごくら町職人ばなし」坂上暁仁

選考員コメント・1次選考

- 江戸時代を背景とし、時代の職人をそれぞれ小話的にまとめた江戸人情味あふれる物語。お話もさることながら、とにかく絵がうまい、描写がうまい。
デザイナー / 高永貞光
- 桶職人、刀鍛冶、紺屋、畳刺し、左官といった江戸の職人たちが取り上げられている。桶職人、刀鍛冶、紺屋、畳刺しの4作品は1話完結で、最後の左官は3話でひとまとまりになっている。1話完結の切れ味も忘れがたいし、全3話で描かれている感情の絡み合いも素晴らしい。
鳥取県立図書館 / 野間勤
- 読み始めて1コマ目、職人道具の描写の凄さにまず衝撃を受けました！陰影までとても緻密に描かれており、まるで木の年輪の凸凹の手触りまで絵から伝わってくるかのよう！職人のカッコ良さが詰まった素晴らしい作品だと感じました。
会社員 / 小野塚博之
- 江戸時代の名もなき職人たちの手仕事の技が、今まさに目の前で展開されるようで、その描写力に圧倒される。この作者の研ぎ澄まされた技巧もまた、連綿と続くこの国の伝統の系譜にあるのだと思うと少し嬉しいのである。
コミティア実行委員会会長 / 中村公彦
- 黙々と腕を磨き、己の仕事を全うしていく職人達の生き様と言葉が、ただただ真っすぐに刺さってくる。何より、言葉なぞ不要と言わんばかりの、温度感、匂い、色まで伝わってくるような手仕事の描写に、毎話惹きつけられてしまった。うっとりするとともに、明日からもうちちょっと自分も頑張らなきゃなと引き締まりもする良作。
会社員 / 伊東敬祐
- 人の手元から何かが作られる、生み出されるということの美しさが活写されている。そして自らが作り出したものだけでその人生を十分に感じさせる生き方の、これも美しさとしか言いようのないものがある。
往来堂書店 / 三木雄太
- 左官や刀鍛冶など、もの作りに打ち込む江戸の職人をすごい密度と熱量で描き込む。仕事場の柱や梁（はり）の黒光り、道具類の使い込まれたツヤから、誇りと心意気が伝わる。オチの余韻はさすががしく深く美しい。職人たちを若い女性にしたところのユニークさとオリジナリティーも評価したい。
朝日新聞記者 / 小原篤
- この漫画には江戸時代の様々な職人たちが淡々と、でも、静かな情熱を込めて描かれています。自分の仕事にプライドを持ち日々背筋が伸びるような気持ちにさせてくれるマンガです。作る側のストイックな視点だけではなく、その仕事の結果を使う喜びも描かれているのがとても好きです。多様なタスクに追われて疲れている現代人の心に染み渡り癒やしてくれる。そんな漫画だと思います。日々仕事を頑張るすべての人に。
Sler・会社員 / 廣瀬 公将
- 丁寧な描写で、江戸の音、匂い、空気まで伝わってくる。
医師 / 岸本 倫太郎
- 職人の仕事。昔に比べて需要は少なくなっている、のかどうかはわかりませんが、いつの時代も職人の仕事に対する姿勢、粋な姿、がカッコよく、会社員としても姿勢が伸びます。とにかくカッコいい。
マネージャー / 樋口健
- 時は江戸、神田にあるごくら町を舞台にした江戸職人の物語。目線や手捌き、呼吸まで見えるような緻密な描き込みとダイナミックなコマ割り作品世界に吸い込まれそうです。他人のモノサシが気になってしまうことの多い昨今、地位や名誉を一に求めるのではなく、ただ生きるなかで己の技のみをひたすらに磨く姿がかっこいい。市井に生きる人に陽の光のようにあたたかな一筋のスポットライトを当てる、リイド社さんらしい丁寧な作品です。
公務員 / 宇田川結衣子

- 江戸職人たちの生きざま、心意気が作者の緻密な描写によって描かれる珠玉の作品。画だけで魅せるその圧倒的画力に脱帽。

あゆみ BOOKS 仙台一番町店 店長 / 土屋修一

- すごく丁寧な描写から、江戸の職人たちの動きが見えるような感じがして、見入ってしまいます。

会社員 / 林礼春

- いつの時代も「ものをつくる人」たちには頭がさがります。桶屋だったり紺屋だったり、江戸の様々な職人たちの生き様を丁寧な描写で切り取った良作。その中でも「畳刺し」の話は非常に艶っぽく、わたくしの大好きなエピソードです。

NIC リテールズ(株) / 池本 美和

- 美しく詳細な描写とほどよいフィクションを練り上げて、職人の技の素晴らしさを見せてくれる佳品。最近の人情物時代小説の読者の方などにももっと届くといいな…

会社員 / やのこうじ

選考員コメント・2次選考

- 江戸時代の職人の姿を描いた連作短編。主人公がすべて女性なのはフィクションだろうけれども、それ以外の部分は相当に取材・知識の裏付けがあるように見受けられる。丁寧な物語で、この先どこまで紡がれるのかを注目したい。
マンガ読み / サイトウマサトク
- 描き込みが凄まじく、江戸時代の職人の日常・作業工程の描写も含めて教則本みたいな作品でした。量の描写がエグいですね。キャッチコピーをそのまま地でゆく作者に、この作品に、「あんたはどうだい?」と言われているような...。人によっては説教臭く感じるかもしれませんが、むしろ今、今このタイミングで沢山の人に読んでほしい作品です。
会社員 / ターシ
- カッコいい。所作や道具の細部まで美しく職人たちの作った風景が町の風物詩になる様が壮観でした。
マネージャー / マネージャー樋口健
- 神田ごくら町という架空の町を舞台に、さまざまな江戸職人のありようを生き活きと描いた本作。桶職人、刀鍛冶、紺屋、畳刺し、左官と、各話の題が職名となっているが、どの話にも、職人が一意専心してしごとに向き合う瞬間が描かれている。何千回、何万回と繰り返してきた経験を指先に乗せて向き合うと、対象以外の存在が消え、そこに言葉はなくなる。そして自身のしごとを納めて、誇らしく上気する職人の顔のかっこうのよさたるや。そして「神田ごくら町職人ばなし」。本作もまた、丁寧な丁寧な職人のしごとでした。
Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ
- 絵が細かく、見ていて見惚れてしまいます。・ストーリーに登場する職人さんたちの職種は違えど、作るものに対する思いを感じられて読後満たされるものがありました
会社員 / 伊藤千恵
- 小学生の頃、近所にあった畳屋さんを思い出しました。開け放たれた扉からいぐさの香りがして、ご高齢の職人さんが作業している姿を通りしなに気にして見ていたけれど、いつの間にか閉じてしまわれた。本書で紹介されているような職人の技がどれだけ残っていて、今後どれだけ継承されていくのか。通販で現物も見ずに大量生産品を消費している事を、ふと考えてしまう1冊でした。
中央書店 / 井出 麻悠美
- 職人達の生き様が、とてつもなく粹に描かれていて味わい深い作品でした。渋い内容ではあるものの、日本文化に目を向けたくなる、大和魂を刺激してくれる作品でした。まだまだ様々な職人達の物語を魅せて欲しいと思いました。
主婦 / 碓氷麻里子
- とにかく画力に目を奪われる。漫画としてサラサラと読んでしまうのが勿体なかった。江戸の職人の矜持が描かれた短編集だが、そのまま作者本人の作品への思いがイコールに感じられる職人仕事な漫画。2巻を首を長くして待ちます
bar 図書室 / 岡部愛
- 職人さんのお話で、読み返していくと新しい気付きがあり、異彩の魅力を放つのが不思議です。画力とストーリーがピッタリ合っているように思えます。
サブカルライター / 河村鳴紘
- 職人の細かい所作の積み重ねが丁寧に丁寧に描かれていて、そこにリアルを感じ、現代までの繋がりまで感じられる。
医師 / 岸本 倫太郎
- 職人の技法、葛藤、意地…圧巻の描写力で描かれています。派手なストーリーではない分、伝わってくるものが大きいです。やはり職人、カッコいいですね。
図案家 / 橋本寛子
- とにかくあの迫力がすごい。アングルや書き込みの凝り方に作者のこだわりを感じます。江戸時代の人々の生き方が伝わってきます。他の職人の生き方も読みたいです。
デザイナー / 玉澤綾子

- すごい漫画だった。見事の一言。日本の誇りでもある職人の技の漫画。それも丁寧で繊細。歴史的価値というか、歴史的勉強にもなる。職人がいかに偉大で日本を支えていたかが分かる漫画。読んで欲しい。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西 良昌
- 各職人ごとのこだわり、美学を淡々とショートムービーのように描きあげている。物語としてもものすごい盛り上がる展開ではないけれど、読後の心地よい余韻がたまらない。

デザイナー / 高永貞光
- 登場する職人たちの仕事をめぐる矜持を書いているが、単にセリフで語らせるだけでなく、道具の扱いや淡々と積み重ねる作業のプロセスをじっくり見せてくれることで、腹に落ちる。

大日本印刷 / 佐々木愛
- 二次選考に残ってくれてよかった。ビッグネームひしめく周辺候補作ですが、読まれば決して引けは取らない作品ですよ！

往来堂書店 / 三木雄太
- 背景から小物まで、非常に細かく描いていて、キャラの息遣いまで伝わってくる。五感で感じて、読める作品。木の温もりや、炎の熱、水の音、周りの香りや匂いまでしてきそう。大胆な構図やコマ割りも物語に引き込んでくれる。ひとつの職業には無数のドラマが広がっている。

元 SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏
- その時代に生きる人々の息遣いまで伝わってくるような作品です。

書店員 / 渋谷 孝
- 各話読み切りでサッと短く、ドラマより描写重視、感情表現は抑えて職人の手に語らせる手際が見事。粹で潔い。グッとドラマに踏み込んだ左官の上下エピソードも、くどくは語らず、ラストは澄み切った余韻を残してこれまた粹で潔い。脱帽です。

朝日新聞記者 / 小原篤
- 市井の人たちの表現が丁寧で好きな作品です。真摯に生きる職人たちの骨太な言葉が印象深い。

ツクリビト / 小野裕子
- イマドキの「売れるマンガ」とは一線を画している。アニメされる多くの作品のように各話の起承転結がはっきりしているわけでもないし、キャラがわかりやすく強いわけでもなく、伏線を張り巡らせまくるわけでもない。各話の主人公はいずれも職人。木桶職人に刀鍛冶、モノクロが似合う上質な画風が作風の奥底に流れる「用の美」によく似合う。木桶職人に藍染め職人に畳職人に左官など……。民芸品も工芸品もない。少し前まで、暮らしのなかに当たり前のようにあった“芸品”を作る職人たちを描いた読み切り多めの物語。つぶさに調べ物をし、念入りな取材もしているのだろう。いい文芸作品やエッセイのような、心に沁みる読後感。「マンガなんて」という思い込みのある大人に届け！

ライター／編集者（馬場企画） / 松浦達也
- 江戸の職人というテーマ。カッコいい。絵もとても美しい。武士でも大奥でも、大名でもなくて、職人。職人というものは世界にもいるだろうけど、なぜか昔から日本の職人やドイツの職人はスポットライトが当たることが多かったと思う。そして日本は「丁寧な手仕事」が好きだ。その丁寧な手仕事を得意としているし、そのような「職人」にリスペクトを送る文化がある。そこも好きだ。そんな職人文化で、なおかつ江戸をテーマにした作品ということで、もはやジャケ買いをしてしまうレベルだったのだが、内容もちろんよかった。緻密な絵とストーリーの完成度。そして得られる「知識」マンガで知識を得ることに快感を覚えるタイプの人間は必ず好きになると思う。おすすめだ。

クラスター広報 / 西尾美里
- 緻密な筆致で描かれる手仕事の数々に驚くタイプの作品であり、漫画はストーリーやキャラのみで表現するものに非ずという思いを新たにしました。ドキュメンタリーフィルムのように、それだけではないという「魅せかた」という切り口鋭い一作

住職兼ライター / 蟬丸 P

- 江戸時代の古民家を数々の職人さんたちといっしょにリノベーションして「閃き堂」をオープンした僕にとって、どうしても「職人」とは憧れの存在です。「細部に神は宿る」という言葉があります。神を宿らせるも宿らせないも、職人次第。そんな職人さんたちの美意識、技術、意地にも似たこだわり。その背景や人間同士の関係性も含めて、「慈しむ」ということを教えてくれる漫画です。

音楽家・閃き堂店主 / 谷澤智文

- 時代劇を読むと、どうも作中の時間の流れと読む側の時制の間に距離を感じて身構えてしまうのだが、本作で描かれる手練の職人技はまるでその研ぎ澄まされた動きを眼の前で凝視しているようで違和感がない。これはその手仕事の描写がほぼ無音で描かれることにもよるのだろう。この国に連綿と続く名もなき職人たちの系譜に本作の出来栄えもまた位置付けられると思うと少しうれしいのだ。

コミティア実行委員会会長 / 中村公彦

- いつも YOUTUBE で職人さんのお仕事動画に見入っている。その作業の手際良さと納得の理由に感服。この作品は「江戸時代の職人」にスポットを当てているところがキモ。うーん、深い！

本と文具ツモリ 西部店 / 津守晋祐

- 森薫先生の「エマ」の伝説の着替えシーンを思い起こさせるような、丁寧に画のみで描かれた職人の姿に単純に惹かれます。外国人に、インバウンド棚で展開したい作品です。

COMIC ZIN 商業誌担当 / 塚本浩司

- 江戸の生活を様々に支えた職人たちの心意気にスポットを当てた群像劇。よくある江戸趣味なマンガと思わせておいて、その実は現代日本社会への真正面からの批判の書とも読むことができる。貧しくあってもおのれの仕事に対する矜持は現代人の比ではなく、その仕事ぶりを評価する施主や顧客の美意識もまた、いまの日本人がすっかり置き忘れてきてしまったものだ。きれいに軒の揃った葺の波を俯瞰して美しく描かれる神田の町並みは、現代の机上、地図上ですべてが決まり融通が利かず、グランドデザインもない都市計画の無策への批判でもあるに違いない。桶や藍染め、畳、左官が塗る土壁といった「自然界にある素材」を生かし、創意工夫してより良いものにして、大切に使い続けられる生活の道具や町並みは、大量に消費し、あっさり使い捨てる現代の「モノ」とのかかわり方がいかに持続性に反し歪んでしまっているのかという現実を、あきらめと自責の念とともにいやでも思い起こさせる。1巻の後半で登場する茶室の土壁のように、百年後を見越した想像力・創造性は刹那な現代日本社会が手放してしまった財産であり、取り戻すには何百年という途方もない時間が必要だと絶望的な気持ちにもなる。深読みしすぎかもしれないが、とはいえ作者は29歳で初の商業単行本だということで、すごい才能の持ち主がまた現れたということでマンガ読みとしてはうれしい限り。ストーリーそのものは勝ち気でけんかっ早く、純朴で愛すべき職人たちが織りなす人情話が主軸となって飽きさせず、読むにつれて誇り高いものづくりへの憧憬が呼び覚まされる。そういうの、みんな好きでしょ？

日本経済新聞記者 / 天野賢一

- 江戸の職人を描いたこの作品、職人や技能職と呼ばれる職に就かれています方々だけではなく、技術職の方々にも響くところがあるのではないのでしょうか。もちろんそれ以外の方にも。端的に言えば「神は細部に宿る」を具現化した作品なのかもしれません。それにとどまらず、エンジニアリングの人的マネジメントの一端も見せてくれているように思えます。漫画読みとしてだけではなく、技術屋（技術士）としてもご一読をお勧めします。さてさて、私自身も技術屋の価値と資格が無いと言われないように頑張ります。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

- 江戸職人の心意気、その生きざまを圧倒的な画力にて描き上げたこの作品にかなりの衝撃を受けた。

あゆみ BOOKS 仙台一番町店 店長 / 土屋修一

- 実際には女性の職人は相当珍しかっただろうし、きれいごとばかりではなかったはず。ある意味ファンタジーな江戸時代の職人術、とわかってはいるのに、それでもまるでタイムスリップして当時の神田の情景を垣間見ているような気持ちにさせられるのは、徹底した細部の描写の説得力所以。モノクロなのに、木や土、鉄、布の質感が伝わってくるような表現に圧倒されます。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- 時間をかけて調べたであろう職人仕事や風俗の描写に脱帽です！また登場人物たちも”てやんでい！”なステレオタイプではなく、現代の私達と同じような考え方や心の動きをしていて、私達と地続きの「江戸」を切り取ったようだなと感じました。物語の良さは勿論、江戸風俗への興味を持つきっかけにもなれる作品だと思いますので、幅広い世代の方に読んで欲しいです。

会社員 / 畑中 瀬路奈

- 江戸時代の職人たちのドラマを端正に綴り、豊かな連作を組み上げた逸品。この本自体が実直な職人仕事を感じさせる。

書評家 / 福井健太

- すごい作品が出た。桶屋の足の指先、刀鍛冶の焼き入れ、紺屋が反物を広げる描写、畳差しの張り替えをはじめとして、職人の細やかな手作業が具に描写されており、圧倒される。数ページにわたって絵だけで魅せるなどコマの使い方も大変迫力があって引き込まれる。その書き込まれた美しい絵の数々に目が行きがちであるが、各話しっかりと面白いのも素晴らしい。続刊でどのような職人の手技を目にすることができるのか、大変楽しみである。

弁護士 / 弁護士 田邊幸太郎

- 疲れているけど目がさえて寝つけないときに、桶や畳など、このマンガに出てくるモノの美しさがまどろみを連れてきてくれる。マンガを読む喜びを再確認させてくれる作品。

鳥取県立図書館 / 野間勤

- やっぱり職人ってカッコいい。そう思わせてくれるのが、丁寧な描写で、職人の持つ凛とした佇まい、仕事のこだわり、所作が伝わってくるから。SDGsを謳っていても所詮は使い捨ての世の中、百年使えるものなんてなかなかお目にかかれなから、憧れてしまう世界がこの中にある。

会社員 / 野口忠義

- 職人の仕事を通じて、江戸の人たちの生活までリアルに感じられるような気がします。これからもっともっと描かれる職人の種類が増えていくと、職人を通じた江戸の姿がどんどん具体的になってくるのではないかと期待しています。

会社員 / 林礼春

- 江戸の街で真っ当に誠実にもの作りに生きる人達の生き様に背筋が伸びる思いがするマンガです。色々な選択肢ができてシンプルに生きることが難しくなってしまった今の時代に生きる人におすすめの漫画です。じっくり時間をとってマンガを読むことも難しくなってきた自分にもとても刺さるマンガでした。もっと、一つのことに向き合っ

てシンプルに生きていいんだよと言われているかのようでした。

Sler・会社員 / 廣瀬 公将

マンガ大賞2024 ノミネート作品

モーニング / 講談社

「平和の国の島崎へ」瀬下猛、濱田轟天

選考員コメント・1次選考

- 戦禍・災害が続く昨今。否が応でも「平和」の有難さを実感したい。

本と文具ツモリ 西部店 / 津守晋祐

- 国際テロ組織に拉致され、兵士と育てられた主人公が組織を出て日本で平和に暮らす物語。平和な世界で穏やかに暮らすも、少しずつ不穏な闇が忍び寄り、戦いに誘われていく。日常はくすっと笑えるシーンが多く、温和な主人公に愛着が湧くも、やはり運命には抗えないのかと不安な心持ちにもなる。何より時折表現されるカウントダウンが怖くて、これから島崎さんに何が起きてしまうのか、続きが気になってしょうがない。

デザイナー/シンガーソングライター / 平松新

- 殺伐とした世界に身を置くものが安息の地を求めることは困難なことなのか。できれば島崎の周りの人たちが巻き込まれることのないように祈りながら読んでいます。

会社員 / 林礼春

- 1話目から最新話までずっと面白い。アクションの描き方ももちろんめっちゃくちゃカッコイイのですが、とにかく「人間」が本当によい。平和な日本での生活のようで、ずっとまわりつく張り詰めた空気がかなしくもリアル。年をとった大人であればあるほど刺さる、良作。

NIC リテールズ(株) / 池本 美和

- 圧倒的なリアリズム。おそらくここに登場する日本は実際にある気がする。社会の裏側は覗いてすらいけない世界であって、マンガやエンタメだからこそ楽しめる領域なのではないだろうか。国際団体、反社、日本にいる外国人の背景、犯罪組織、ずっとその裏側が近づいてきたとき。想像するだけで怖いけど、この漫画の面白さはあまりにもストイックで尊い。平和の国でありますように。

October Beast 代表・デザイナー / 北山友之

- 話が展開してきて、いよいよ面白くなってきた。人って、並大抵では生まれ育った環境下で構成された基盤みたいなものを変えることはできないけれど、逆に言えば並大抵以上の覚悟があれば変えられるのかもしれないな〜なんて思ったり。

1616 屋 / 杉本善徳

- 殺戮の世界で生きてきた島崎が、この世界での自分の在り方を見つける為になすべきことは、、、。戦闘員としていきなければならなかった島崎には何故かとてもピュアな魅力がある。不穏な未来をどうか回避してほしい、と毎回願ってます。

主婦 / 碓氷麻里子

- 島崎には平穏に暮らしてほしいですけど、そうはいかないというか、させてくれないというか。自分の居場所をつくるのがどれだけ大変か…。緊張と緩和、市井のヒーロー像が見事。一気に驚つかみされました。

会社員 / 野口忠義

- 巻を追うごとに面白さが増していくこの漫画。平和であるはずの日常に起こる非現実的な行為。近未来に起こりうることなのかもしれないと思うとゾッとする。

あゆみ BOOKS 仙台一番町店 店長 / 土屋修一

- 手に汗を握るような緊張感のあるバトルパートと、ほんわかクスッとさせる日常シーンのバランスが非常に良いなと感じました。島崎さんが幸せな日常を取り戻すことを願っていますが、「島崎が戦場に復帰するまで〇日 --」の無情さよ…。

会社員 / 畑中 瀬路奈

- ギャグっぽい日常を描いてたかと思うと急に本気の殺し合いを始めたりのりで心臓に悪い、けどマジで面白い！登場キャラが全体的に地味なのが状況の異質さや怖さをより際立てている気がします。あと、主人公が作るご飯がどれも美味しそうなので食べてみたくなる！

会社員 / 小野塚博之

- 島崎は実にオーソドックスなヒーローに見え、たとえば私などは「ゴリラマン」なんかを思い浮かべるのですが、ヒーローとは現在の闇を映す鏡であって、このメガネの優しそうな、そして冷徹で恐ろしい男の薄皮をはがせば、それが確実に顔をのぞかせることがわかる。それまではついていかざるを得ません。

会社員 / 末永龍介

- 幼少期に国際テロ組織に拉致され、戦闘工作員となった男・島崎真悟。30年の時を経て、組織からの脱出に成功した彼は故郷である日本に帰ってくる。そんな過去があるが、日本で平穏に過ごすシーンもとても魅力的。でも「島崎が戦場に復活するまであと〇〇日」というカウントダウンが記載される為、物語はそこに向かい、いつか争いが始まる。そこまでが楽しみだし、平穏な中にも緊張感があり、今後が見逃せない作品です。

吉本興業・芸人 / ムーディ勝山

選考員コメント・2次選考

- 国際テロリストに拉致・洗脳された元少年が主人公の物語。平穏な日常と暴力とのコントラストはシリアスでもありギャグでもあって、目が離せない。物語の終焉が、カウントダウンされる「戦線復帰までの日数」として提示されているのが不穏。死と暴力の世界から現代日本（的な社会）に復帰して、個としての小さな幸せを追うかに見えた主人公が、どうやって大きな物語に再接続されるのか。今後が気になる。

マンガ読み / サイトウマサトク

- 主人公が実は滅茶苦茶強い元戦闘員、という設定自体は漫画だけではなく映画でも多いですが、この作品の魅力は独特の冷たさだと思います。瞳孔が開いている系主人公、そして話の最後にカウントダウン入れてくるの大好物なのですが、登場人物達の台詞・表情に平和な国に生きている鈍感な者である自分は、一瞬水をかけられた様な、刺された様な感覚になります。読み手の考え方に影響を与えるシーンがあったりしますが、ただシリアスに全振りしている訳ではなくとても読みやすくもある作品です。

会社員 / ターシ

- 『フルメタル・パニック！』の相良宗介だったり『マージナル・オペレーション』のジブリールだったりと遠く異国の戦場で明日をもしれない命の中で戦い続けた少年少女にとってこの日本は、大人も子供も平和の中で弛緩して生きているように見えるのかもしれない。けれどもそんな弛緩が許される状況こそが尊いと思ってくれるかもしれない。少なくとも世界的なテロリスト集団の中で育った島崎慎悟は今はそのように思っているようで、襲いかかってくるかつての仲間たちを排除しながらもコミュニティを守り職場を守って生きようとしている。その振る舞いを尊いと思いきや恐ろしいとは思えないのだけれども平和に爛れきった世間もそう認め続けてくれるかといったところに不安を覚えつつ、今の頑張りで平和を生きる島崎慎悟を心から応援したくなる作品だ。刻々と刻まれる島崎が戦場へ戻る日のその戦場がどこなのか。それは島崎が望むものなのか。誰かがその道を選ばせてしまったのではないことを願いつつ行方を見守りたい。

書評家 / ライター / タニグチリウイチ

- 国際テロ組織に教育された元先頭工作員の物語として、本当にこんな事があるのではないかと思わせるほどストーリーや専門知識がリアルで興味深い。血みどろな戦いが多いが、殺伐とした中にも人間関係はホッとした瞬間もあったりして、辛過ぎない所も良い。殺人サイボーグのように人間味の薄かった主人公が、周りの人とのふれあいによって自分の居場所を見つけ守ろうとするのは、グッときます。とにかく周りの良い人達、死なないでくれー！！やっとな日常の幸せが続きますよう願っています。

主婦 / 岸本しのぶ

- 日常に含まれる異物感。非日常。主人公が善か悪かを考えさせられるが、ただただ人として生きていくことに奔走するさまから目が離せない。出てくる登場人物がそれぞれ非常に魅力的である。

デザイナー / 高永貞光

- 幼少期に拉致され、テロ組織の戦闘員として育てられた島崎は、組織からの追手や警察の監視の目に晒されながら、日本での潜伏生活を送っています。一見平穏な日常にも、島崎の周りには暴力や戦闘が潜んでおり、彼の暗い過去と現在の葛藤が作品の中心に据えられています。作中のキャラクターたちは傷ついた心の回復を目指し、普通に暮らす人との共存することで“溶け込むこと”を目指すのですが、否応なく生まれてしまう違和感が切なさを感じさせます。このコントラストが非常に切なく、主人公の葛藤に共感でき引き込まれます。

会社員 / 佐藤優

- ポップでバランスの取れた絵とは裏腹に、島崎の過去を踏まえた普段の生活がユニークに描かれていてとてもおもしろいです。ファブルのような印象も持ちましたが、あくまで日常を何気なく過ごすこと、正義を重んじることに重きを置いていて、また違った味わいがありますね。

会社員 / 三浦佑樹

- 海外の危険地帯のテロ組織に長年所属した日本人中年男性島崎が、「平和の国」現代日本に帰国し組織を抜けたところから物語は始まります。彼が憧れる「平和の国」で、社会になじみながらしかし組織に追われながら、必死に生きることを通じ、平和の意味が感じられる作品です。細かなリアリティがすごいです。

弁護士 / 三葛敦志

- これは、カムイ外伝である。連合赤軍の幹部が市井に紛れて生活していたというニュースは、この作品にリアリティを与えた。型破りのアクション漫画である。

弁護士・三村小松法律事務所 / 三村 量一

- 平和とは程遠い日常を生きて来たからこそ、ちょっとしたやりがいを感じながら過ぎていく何気ない日常が際立ちます。そして、そうならないと分かっている、その平穏な居場所に少しでも長く居られるように、つい願ってしまいます。

教師 / 持丸宏司

- 日常の中に潜む非日常の描き方のうまさ、キャラの意外性、ストーリーの緩急の激しさなどが相まって、ページをめくる手が止まらない面白さです！こうしている今も早く続きを読みたくて仕方ありません！

会社員 / 小野塚博之

- 島崎というキャラクターの魅力的なこと！自らの居場所を保ち、平和を享受するために奮闘する島崎。しかしその一方でその平和とはかけ離れた圧倒的なアクション描写や機転に引き込まれてしまう。各話の最後で提示される数字に震えながらも、彼の平穏を願ってやまない。

会社員 / 杉佳尚

- 物語の進みが少し遅く感じてきているが、カウントダウンが進んでいく中での不穏感が増してきて緊張する。平和っていいなあ。

1616 屋 / 杉本善徳

- 独特な空気感があるマンガというものが存在する。これもその一つなのである。ギャグ的なひょうきんさと、シリアスさ、そして今後どうなるかわからないというミステリアスさ。それが入り混じることで、この独特な空気、が醸成されている。登場人物はみんな個性的で、飽きない。ユーモラスさと人情味と、暴力性。いろいろな要素が入り混じっているところが最大の魅力だ。これは個人的な趣味なのだが、主人公より脇役のほうが好きになるマンガにハマりやすいタイプだったのだが、この作品は主人公に最も愛着がわいている。早く続きを読みたい。

クラスター広報 / 西尾美里

- この作品は非日常を描いているようで、実際はこれでもかというほどの「リアルさ」に満ちている。訓練されてしまったからこそその「心の機微」が秀逸。「戦場」から離れた男の戦闘アクション、すみからすみまでどこまでも良作。

NIC リテールズ(株) / 池本 美和

- 平和な日常と戦場は思った以上に近いのかもしれない。ロシアによるウクライナ侵攻や 2023 年パレスチナ・イスラエル戦争が相次いで起こり自分自身の価値観も大きく変わりました。問題意識を持って読みたい作品。

本と文具ツモリ 西部店 / 津守晋祐

- その中で暮らす限りにおいては当たり前そこに「平和」が、この地球上では歴史的に見ても地理的に見てもどれほど得難いものなのか。少し考えれば解るそんな事実を、しかし私たちは普段それほど真剣に考えることをしないままに日々を送っている。実際に平和が失われるまで平和の尊さを考えることをしない思考停止は「平和ボケ」と揶揄されるが、一方で「平和ボケ」は平和な社会にしか存在し得ない「平和の至高の姿」でもある。問題は地球上の津々浦々まであまねく平和ボケが行き渡らない、いわば「平和ボケの偏在状況」にある。全人類が等しく平和ボケであれば戦争など起きないだろうが、現実はそのではなく、いつでもどこでもいたるところで争いが絶えない。その諸悪の根源は経済格差である。そう考える先鋭的な国際テロ組織が「持てる」国家を標的にテロを繰り返すようになって半世紀——。そんな設定でこのマンガは幕を開ける。主人公・島崎真悟はまだ幼児だった30年前、このテロ組織が起こしたハイジャック事件によって取り返しつかないトラウマを負われ、かつその組織による拉致と洗脳で冷酷無慈悲な戦闘工作員に仕立て上げられるが後に離脱。平和な祖国に戻り、「平凡だけどころ変なところがある人」（見た目は若者とおじさんの間くらい）として地域社会になじんでいく（公安の尾行付きではあるが）。ところが小さい暴力は平和ボケのこの社会にもあるし、小さいとはいいがたい理不尽な暴力の被害者になる人も存在する。島崎は自身を受け入れてくれたコミュニティー内に「侵入」するいじめっ子やらヤカラやら半グレやら反社やらの暴力を、その類まれな身体能力、知力、判断力、経験値その他の力で撃退する。さらにテロ組織が脱出者である島崎の暗殺を遂行するために部隊を送り込み……。アクションシーンとして展開されるこれらの場面はスリル満点、迫力満点で、ある種のカタルシスも得られる。それにしても島崎の目力のものすごさよ。それ

だけでもエンタメとしてすごい作品なのだけど、このマンガの読みどころはそれだけではない。小悪を含めてほとんどの日本人にとっては平和ないつもの日常風景の片隅で、当事者以外の群衆が気づかないうちに瞬時に起こり、瞬時に終了する「戦闘」を描くことで、平和な社会というものが実は極めて脆いバランスの上に成り立っているのではないか、たまたまラッキーで続いているだけなのではないか、などと思わずあれこれ考え込んでしまう深さがある。4巻、血で血を洗う殲滅戦が終わり、死にゆく「対人地雷」（見た目は人の好さげなおじさんで、実際に妻子をこよなく愛する）が吐く呪詛の言葉に、自身の来し方そして行く末を思っか、島崎は一瞬の「間」を見せる。それはかなわないものを思う人間として当然の「祈り」だ。問答無用の暴力によって背負わされたトラウマと、有無を言わさぬ洗脳によってとことんまで痛めつけられた一つの魂を、果たして「平和」は救済することができるのか。「平和」には暴力への対抗装置としての力がほんとうに備わっているのか。そんな問いが読者一人ひとりに投げかけられる。とはいえ、四角四面のストーリー展開というわけではなく、むしろその逆。長年の砂漠の国暮らしゆえ日本語が少々不自由な話しぶりがひらがな多用で表現される島崎の「愛されキャラ」ぶりをはじめ、サブキャラの造形の妙や緩急やいろいろクスッとさせられる読者サービスも相まって、既刊4冊をあっという間に読み終えてしまう。続きがとても楽しみ。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

- テロリストを足ヌケして帰国した島崎さん。「平和の国」に溶け込もうとするも周囲が放っておいてはくれず。アクションもストーリーも半端ない説得力をもって描かれていて引き込まれます。島崎さんの過去もこれからも見逃せません。続きが楽しみ。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

- 巻を追うごとに戦闘の激しさが増していくこの漫画。島崎は平和な日常を守ることができるのか？とても先が気になってしょうがない。

あゆみ BOOKS 仙台一番町店 店長 / 土屋修一

- 国際テロ組織に拉致監禁され職員として育てられた少年が大人になり、なんとか祖国日本へ戻るも争いからは逃れる事が出来ず…と基本的にはヘヴィーな内容ですが、ところどころで描かれる島崎さんと「普通」の人たちとのふれあいに心が暖くなる作品です。人としてのあり方、平和のありがたさ、自分の心を表現する難しさ…。ただただしくも彼らと共にあろうとする島崎さんの姿に「頑張れ！」と応援したくなります。また、淡々と描かれるアクションシーンと、クスッとさせる日常シーンの緩急の付け方も大変素晴らしいと思います。

会社員 / 畑中 瀬路奈

- 「平和ボケ」という言葉の重みを急に感じた。今の日本への警鐘といっても過言ではない。何年後かに起こるかもしれない、もしくは既に起こっているかもしれないという恐怖を孕んでいて、そこにワクワクしてしまう。フィクションであるにも関わらず、ノンフィクションのような作品が好きなので、今後の島崎に注目しかない。

販売員 / 八重田幸子

- 平和な世界を穏やかに暮らす島崎さんに忍び寄り闇に不安になりながらも、この先の顛末が気になって仕方がない。非情さと優しさを持つ主人公に、どうか光を ... !

デザイナー / シンガーソングライター / 平松新

- 読み進めると島崎が好きになっていく。平和の国で決して平和ではない毎日を送る島崎。強すぎる姿と礼儀正しく優しい島崎のギャップに惹き込まれる。「島崎が再び戦場に戻るまで〇日」の記述が読んでいると悲しさを感じさせてくれる。

デザイナー / 平沼寛史

- 圧倒的なリアリズム。おそらくここに登場する日本は実際にある。社会の裏側はマンガやエンタメだからこそ楽しめる領域であって踏み込んではいけない。国際団体、反社、日本にいる外国人の背景、犯罪組織、ずっとその裏側が近づいてきたとき。想像するだけで怖いけど、平和の国に潜む問題は今こそ知らなければいけない。この漫画にゾットするのはおそらく人間の持つ潜在的な敵対心からだろう。でもストイックな強さと人間の暖かさから感じる面白さがそれを上回る。

October Beast 代表・デザイナー / 北山友之

- 「あんなふうだけど、あいつ実はめちゃくちゃ強いんだ」という、マンガがこれからも描き続けるだろうフィクションの最新版としてこれ以上のものはない上手さ。戦争のトラウマというものがまだエンタメを駆動するエンジンとして機能しているのは、この国が平和だからなんでしょう。

会社員 / 末永龍介

- 市民のヒーローと戦闘のプロフェッショナル。穏やかに働く昼と眠れない夜。殺戮と平和、緊張と緩和。今は相反する二面の世界で生きているが、ゆくゆくは街の人たちと安穏と暮らしてほしいと願うばかりの、見た目冴えないニューヒーローです。

会社員 / 野口忠義

- 特殊工作員モノの、作品は多いなか、人としての大事な思いや感情を、なぜか、自分に当てはめても考え感じてしまう、いい作品だと思います

tetote 代表 / カ丸 真

- 次が読めない展開と不穏なカウントダウンにページを捲る手が止まらなくなる。

会社員 / 齋藤隼

- 面白すぎる。シンプルだけどグイグイ読まされる画力、島崎という男の寂しさや切なさにとんどん心を掴まれて、日常の抜け感と非日常の恐ろしさの緩急にどハマリしています。テロ組織の解像度も素晴らしすぎる。これから島崎がどうなっていくのか、本当に楽しみです。

女優 / 齋藤明里

マンガ大賞2024 ノミネート作品

週刊ヤングジャンプ / 集英社

「ダイヤモンドの功罪」平井大橋

選考員コメント・1次選考

- 好きか嫌いかと問われたら、嫌いと答える。が、認めざるを得ない。友情・努力・勝利を旗印とする熱血スポーツマンガの歴史を終わらせかねない問題作。「子供の才能を伸ばす」というお題目は、実は大人のエゴに過ぎないのではないか？ 本作が問うものは非常に現代的かつ普遍的だと感じる。これがデビュー長編とは思えないほど語り口も面白い。一体どこに着地するのかも含め、今ももっとも目が離せない作品です。

読売新聞文化部 / 石田 汗太

- セオリー通りのスポーツ漫画かと思って読み進めていったらいい意味で裏切られ今後の展開がどんどん楽しみになる漫画。早く続きが読みたいし、周りに勧めたくなるストーリーでした。

ヘアメイク / 北原由梨

- 小学生の野球を題材としながら、心の機微をとて丁寧描いていますスポーツマンガとしても面白いし、主人公や同年代の少年達の葛藤が胸に突き刺さる。

主婦 / 岸本しのぶ

- これまで様々な野球漫画を読んできたが、葛藤の対象が自分の才能という他に類を見ない作品。読んでいて不思議な感覚になった。スポーツものなのに努力のシーンが全く描かれなく、サラッと日本一になり、今のところ世界でも負けなし。主人公は本気で野球をしたいわけではなく「敵も味方もみんなが楽しい野球をしたい」という平和主義な考えに周りは苛立ち狂わされる。小学五年生の心の成長にフォーカスを当てた全く新しい野球漫画に衝撃を受けた。

スターダストプロモーション・アイドル / 秋本帆華

- とてつもない才能を持った主人公が周りとのギャップに悩まされる姿に、読んでいるこちらの胸も痛くなりました…。誰も悪くないし、みんな良い子。この作品に意地悪な子供や悪い大人はいません。それなのに、あまりにも突出した才能はこんなにも人を苦しめるのか…と思わされます。

会社員 / 畑中 瀬路奈

- 天才の生きる道を楽しく読める

ツクリビト / 小野裕子

- 現在のスポーツ育成理論的には、実のところ主人公の年齢相応の感覚の方が真っ当で、スポーツマンガにおいても暗黙裡に踏襲されてきた、リアルなスポーツ少年団における早期育成・勝利至上主義の弊害を告発になっている面が興味深い。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- 大谷翔平選手が多くの人々の空想を現実のものとして塗り替えていき、これまでの野球マンガのスタイルが成立しなくなったなか、自らが圧倒的なフィジカルとセンスを持っていることに無自覚でただ純粋に野球を楽しみたい少年を物語の中心に据えた作品。彼とともにプレイし、その能力と底知れぬ才能に触れた者たちは、湧き上がるコンプレックスや畏怖の念を前に、否応なしに自らとも向き合うことになる。おのおのが自分の感情に揺さぶられながら彼に対する姿勢とスタンスを定めていく姿は、自分を映す鏡との対峙。そして逆に常に他者の「鏡」になってしまう少年もまた傷つき、孤独に苦しむ。物語はまだ小学生編。この先がどう描かれていくのかが目が離せない。

会社員 / やのこうじ

- この作品も、この一年で読んだ漫画の中では頭一つ抜けてるような、とても面白くて夢中で読んだ作品です。いわゆる少年スポーツ漫画の主人公が天才でチームを引っ張ってく明るい物ではなく、天才の影の部分にスポットを当てた漫画です。こんな視点があったんだ！と、衝撃に近い面白さを感じました。こんなとこ描いていいの？というぐらい、リアルに登場人物それぞれの影の部分を描いておられてページをめくるたびに感じる緊張とスリル。ただの少年野球漫画ではありません。度肝を抜かれること間違いなしです。

吉本興業・芸人 / ムーディ勝山

- 目から鱗の新しいスポーツ漫画。天才を描く漫画でこんなにしんどい話今まで読んだことがない。おもしろー！

bar 図書室 / 岡部愛

- 「天才の残酷性」を描く作品が好きすぎるのですが、中でもこちらは好みのだ真ん中です。主人公の（無自覚の）残酷さも、周囲の（悪い人じゃなくてちゃんと彼に寄り添っているにも関わらず）彼に対しての残酷さも、巻が進むにつれて高まっていて「え…どこまで行っちゃうんだろう」とどんどん怖くなる。と言いつつ、ワクワクが止められない己の残酷さ強欲さとも向き合わざるを得ないのがつらい（楽しい）。

ライター / 門倉紫麻

- 従来の王道の野球漫画とは違う視点で描かれた作品で、そうくるか、そうくるかの連続でした。よく天才子役の家庭が崩れたなどの話を、昔耳にしたことがありましたが、それに近く、さらに広範囲で展開されるストーリーに没入せざるを得ない作品です。

広告会社 プランナー / 平沼 良章

- 圧倒的な才能に魅せられる心地良さと、取り巻く大人達の思惑にモヤる気持ちのミックスに、初め脳がバグってました。

教師 / 持丸宏司

- 野球漫画ですが、そこはあまり重要ではなく、天才の苦悩を描いている作品です。天才もまた人であるということと、肉体と精神はまた異なるものであるということ、主人公が小学生であることからハッと気付かされます。また主人公という天才に振り回される大人たちに醜さに目を背けたくなる一方、その醜さに自覚があるが故の葛藤もまた見どころの一つです。できない人の気持ちなんてわからないんだ！と吐き捨てて頑張ってきたのが今までの漫画であるなら、出来る人の気持ちなんてわからないんだ！という新たな視点で描かれている漫画です。

会社員 / 佐藤優

- 良いな～この漫画。熱いな～。瑞々しいな～。

PENICILLIN / HAKUEI

- 読んでいて心が辛くなるが、非常に読ませる作品

会社員 / 齋藤隼

選考員コメント・2次選考

- 読んでいると子供の頃の瑞々しい感覚と大人になってからの現実的な感覚が喧嘩しているような気持ちになる。
PENICILLIN / HAKUEI
- この野球漫画を読んだ時はビックリしました。こんな野球の描き方があったのかと！その面白さに夢中で読み漁り、「いまめっちゃ面白い漫画があるんですけど知ってます？ダイヤモンドの功罪っていうんですけど」とその時あった全ての人に言ってました。今まで漫画界で星の数ほど野球漫画があった中で、新しい切り口を見つけた事が本当に素晴らしい！マジでチャラチャッチャチャラッチャです。
吉本興業・芸人 / ムーディ勝山
- 野球マンガの割に野球シーンが少ない本作は、家族と学校と野球しかない世界で、ひたすらに繊細で傷つきやすく、型破りで残酷な子供たちの、抜群にリアルでおもしろいアンファン・テリブルな少年野球マンガです。小学生当時、そこそ強いチームで野球に取り組んでいた僕ですが、なぜここまでリアルな子供の感覚や集団を描けるのかと恐ろしくなりました。今、大人のマンガファンとして、あらためて重くのしかかってくるタイトルに翻弄されながらも、この恐るべき子供たちの一員である主人公が心から笑えるような未来を願いつつ、続きの物語を楽しみにしています。
Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ
- 自分も好きでがんばっている、場合によっては自信もある、そんな競技や趣味で、目の前に現れた人に突然圧倒的な実力差を見せつけられたことはないだろうか。しかもその相手はまったく悪気のない、いい人だったりするのだ。そういう人に出会ってしまった時、あなたはどうか、どう接するだろうか。なにくそ、と反発すべきなのか、はたまた参りました、と頭を垂れるべきなのか。もちろんそこに確たる正解はない。本作は何か打ち勝って、目指す目標を達成して、読者にカタルシスを与えるスポーツマンガの構造をとりながら、同時に上記の問いを投げつけ続ける。試合じゃないところの方が緊張感をはらむ本作がどこに向かうのか、とにかく目が離せない。
会社員 / やのこうじ
- 天才少年が無意識に生み出してしまう功罪を、タイトルを改めて見て成程！と思いました。彼をとりまく周りの少年たちの葛藤や切実な姿を、悲痛さだけでなく小学生男子のほのぼのした視点でも楽しめて、繰り返し見つつ次巻を待っています！監督が車の中で黒ぬりになったのが、お互いの心情をうつしだしているようで、ゾクッとしました？。選抜チームを共にした仲間達がこれからどのように成長するのが楽しみです。ちなみに私は桃吾とまどかの幼馴染ズのやりとりが大好きです。
主婦 / 碓氷麻里子
- 「やるべきこととやりたいことが違うときはどちらを選べばいいですか？」という質問をある方がしていたことを思い出しました。周りの誰もがやるべきだと思うこと。それをすれば本人のためになるしたくさんの人を楽しませ幸せにできる。その才能があるのに、本人はそれをやりたくないというのは地獄。周りはどうしてもその才能を捨てさせるのはもったいないと思ってしまう。しかし本人の幸せを蔑ろにしてたくさんの人を楽しませ幸せにすることは正しいのか？どうか自分の才能に幸せを見出してくれ。そうすればWINWINじゃん、という傲慢。難しすぎる。そして天才を目の前にして様々な複雑な思いを抱く10代の思春期の子供たちが、それをさらけ出してぶつかり合っている。それを見守る周りの大人たちが概ね冷静でちゃんとした大人たちで本当に良かったと思いました。(4巻の村度にはショックを受けましたが攻めることはできない……) 全く自分の中で答えは出ませんが、主人公の行く末を見届けたいと思います。
金海堂イオン準人国分店コミック担当 / 園田美智子
- 小学生離れたフィジカルと頭脳を持ちながら、メンタルは年相応な、優しい怪物とでもいうべき綾瀬川くんを取り巻く野球群像劇です。圧倒的すぎる才能が近くにいるとき、同世代のプレイヤーは、そして大人はどう影響を受けてしまうのか、その様を残酷なほどにドライに描いていくという、超越的な怪物の存在に対峙した一般人を描いたという意味において『シン・ゴジラ』にも通じるような、禁断の野球漫画です。
株式会社ムービック / 岡部 真矢
- たくさん描かれたジャンルでも、まだまだ新しい漫画は出てくるんだなと関心。天才を中心にこんなしんどい話がかかるなんて、作者の方はどんな思いでこれを書いているのだろうか気になる。
bar 図書室 / 岡部愛

- どうしようもない天才の周りには悲劇が起きる。自分が凡人だからこそ、そういう物語にどうしようもなく惹かれてしまう。ただ、条件があって、天才がきちんと気味が悪いこと、太刀打ちできない言葉にできない何かを惜しみなく表現してくれることです。これは、静止画としてのデフォルメと時間軸をコマ割りで表現する漫画の強いところだと思います。今回の投票はどの作品もジャンル違いで面白く、毎日自分内順位が変わるぐらい悩んだのですが、この作品にはどうしても惹かれてしまいました。曾田正人作品が好きの人には絶対的にお勧めです。

WEB制作・ディレクター / デザイナー / 河本智芳

- 野球選手が小学生の頃からどんなストレスに晒されているかがよく分かる作品。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- 今まで無かったような少年野球漫画です。あまりにも才能が有り過ぎるため、疎まれたり気にし過ぎたり、小学生ながらこんなに悩むのかと思わされます。野球の勝ち負け試合運びよりも、球児達の心情にクローズアップしてるのも目新しい。天才少年に翻弄されるのが同級生だけでなく、大人達なのがリアルだなあと思いました。球児達も個性的で、これから先の展開も気になります。主人公の綾瀬川には心から楽しんで野球をやって欲しいし、吹っ切れて活躍するシーンが早く見たいです。

主婦 / 岸本しのぶ

- 天才を取り扱う漫画はよくあるが、天才がゆえに他人の気持ちが理解できないという切り口は面白い。この天才がどこまで通用するのか、今後の展開が気になります。

デザイナー / 高永貞光

- この作品は野球漫画として始まりますが、その根幹には天才の苦悩があります。主人公が小学生ということで、天才としての才能と人間としての葛藤が交錯します。また、大人たちも主人公に振り回される姿が描かれており、その中には自身の醜さに直面する大人もいます。これまでの漫画が「できない人の気持ちなんてわからないんだ！」という視点で描かれてきたのに対し、この作品は「出来る人の気持ちなんてわからないんだ！」という新たな視点を提示しています。天才としての苦悩や、それに対する周囲の反応を通じて、読み手は普段見過ごしている人間の複雑な心情に触れることができる作品です。

会社員 / 佐藤優

- 正直、読んでいて辛くなる。でも目が離せない。考え方が違うだけ、皆が野球に対して真摯であるが故に齟齬が生まれているだけで、悪い奴はここにはいない。そう信じたい。

八重洲ブックセンター宇都宮バセオ店 / 山本さとみ

- スポーツものという王道ジャンルの中での邪道。スポ根の新たな切り口。主人公が努力も根性も見せないでトップに君臨し、自分の才能に本気で悩む。どのジャンルにも天才はいるが、才能がある者の平和主義は時として周りを狂わせる、罪なのかもしれないんだと。野球を通して小学五年生の心の成長にフォーカスを当てた、新しい野球漫画。この一年で出会った作品の中で1番好きでした。

スターダストプロモーション・アイドル / 秋本帆華

- 苦悩と成長のストーリーに惹きつけられる。

ツクリビト / 小野裕子

- 何の世界でも天才はいるし、その影で泣くものもいる。仲間に喜ぶ者もいれば、仲間に泣くこともある。当たり前のようなことほど残酷で、そして面白いと感じる。

1616屋 / 杉本善徳

- 1次推薦でも書きましたが、読んでてつらい。全然好きじゃありません。それでも選ばざるを得ないところが本作のすごさ。綾瀬川のイメージ（の一部）は子どもの頃の大谷翔平選手だと私は勝手に思っています。大谷みたいなのがずっと同世代にいたら、そりゃたまったもんじゃないでしょう。こうした「負の感情」に焦点を当てたスポーツマンガは前代未聞だと思うし、それだけで高い価値がありますが、ひょっとしたら本作には「その先」があるかもしれないと期待までさせる。だから目が離せない。一種バケモノじみた問題作です。

読売新聞文化部 / 石田 汗太

- がんばって夢をかなえるとい漫画はありがちだけどなんでもできる人目線の漫画は斬新です。

ブックエース上荒川店コミック担当 / 倉本かおり

- よくあるスポーツ漫画にありがちな、熱血や努力というキラキラした作品ではなく、時に一人の「天才」がその世代にいて、時に多くの人を苦しめていく、そんな心がザワザワする作品。「ダイヤモンドの功罪」というタイトルが二重、三重にも感じられます。「天才」を世に出したいと思う大人たちの思惑、「天才」がいることで思い悩み打ちひしがれる同世代たちの現実と、それに反する、「ただみんなと楽しくやりたい」だけ、そのための努力をしているだけの「なんでもできてしまう」彼の埋められないギャップ。そのずれが周りを時に狂わせていく。関数を重ねるごとに、とても胸に迫ります。今後「天才」が落ちた先が描かれることがあるのだろうか…。どんな手のひら返しがあるのだろうか、分かり合えるときは来るのか…。こんなスポ根漫画のようで、全然爽やかじゃない、色んな人のエゴが渦巻く作品。本当に胸が痛い。ザワザワします。続きが早く読みたい。

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

- 今回のノミネートされた続きもの漫画としては一番楽しく読めた。普通に続きが楽しみ。

ソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

- “天才”の無垢な残酷さとそれゆえの苦しみについて真っ向から描いた作品。「努力」に縋る凡人からしたらこれほどしんどいマンガはない。だからこそ眩しく、目が離せないのだなあと思うわけですが。一番感情移入できてしまうのが、周囲の大人たちの「打算的思考」ってところにしんみりきますね。もっとバイタリティに溢れた思春期のころに読みたかったと、強くそう思います。

NIC リテールズ(株) / 池本 美和

- 飛び抜けた天才が現れることによりチームが救われるのではなく、本人が望まないうちに大人やチームメイトを巻き込み、関係性を壊してしまうという新しい切り口で一気に引き込まれました。主人公が救われる日は来るの?! 楽しいけどつらい?、でも早く続きを読みたい! と、ハラハラドキドキとした気持ちになります!

会社員 / 竹本 慧

- 天才の孤独と、周りの羨望、嫉妬、絶望。少年たちが背負うにはあまりに重い感情が描かれていて驚きました。スポーツとまるで縁のない暮らしの中で生きてきたので「何も練習しなくても出来てしまう」という才能にこれほどの苦しみがつきまとうとは想像もできません。願わくばこの物語の行く末がどうか明るいものでありますように。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

- スポーツ漫画は数多く読んでいますが、こうした「天才」に周囲の大人や仲間たちのそれまでの日常が壊れていく様子を描いた作品はなかったと思います。成功した天才ばかりを見てきましたが、その存在の異常さと凡人たちの日常のコントラストが読みごたえがあります。

COMIC ZIN 商業誌担当 / 塚本浩司

- 選ばれた人間が必ずしもそれを望んでいるわけではなく、それによって自分が望むような幸福から遠いところにポツンと立たされることがある。「こんなもの欲しくない」なんて言ったらその才能が欲しくてたまらない人、それを得るために血の滲むような努力を重ねたり、なんなら魂を売り渡してもいいとすら思う人からしたら、それは「罪」にも等しいのだろう。読み進めていくうちにこの作品のタイトルの良さにうなりました。

元書店員 / 内野智未

- 天才の影響や苦悩という古典的なテーマに正面から挑み、抑制の利いたストーリーを展開する姿勢が好ましい。恣意的に映る部分もあるが、野球漫画のバリエーションとして高評価。

書評家 / 福井健太

- いつもと違う視点の野球漫画で収支没入感をもってよめました。よく近い話で、スター子役の話をききますが、突出した才能が周囲に与える影響も大きいんだなと思いました。

広告会社・プランナー / 平沼 良章

- 野球漫画は何故今もお傑作が生まれ続けるのか。。。圧倒的才能の話もこれまで何度となく目にしてきた。努力に次ぐ努力の結晶だって、ダイヤモンドに潜むいろんな闇の物語を読んできたつもりでいた。それでもなお、この作品の光り放つオーラは新しいしカッコいい。野球好きでなくても読んでもらいたい珠玉の作品。1位!

October Beast 代表・デザイナー / 北山友之

- ただ茫然と立ち尽くしながら読むしかない。天性の才能というものが周囲をひたすら蹂躪し破壊していくさまは本当に美しい。漫画界では天才ものが面白いと相場が決まっていますが、演劇、ダンス、音楽、スポーツなど無数の天才たちが描かれており、そのどこか常人とかけはなれた、あるいは欠落を抱えたキャラクターこそがその作品の魅力でした。そう思っていました。本作を読むまでは。違った。天才とは、キャラクターとは関係がなかった。才能それ自体が災厄であり、そこに人格などはない。だからこそ、あくまで「普通」に、常人として主人公のキャラクターを造形することが、この天才という異常事態をもっとも引き立たせる。なるほど。言われてみれば、こうやって差し出されてみれば、もうそうとしか思えなくなります。本作を機に、天才ものは以前・以後に区切られるしかない。

会社員 / 末永龍介

- 悪人じゃない人たちの、わざとじゃない、いたしかたない残酷さにずっと胃がキリキリしている…のに、ワクワク感がそれを上回ってしまう。そういうひどい自分を許そうと思います。

ライター / 門倉紫麻

- 天才から始まる物語。見据えているであろう着地点が、いわゆるスポーツ漫画としては異色なのは。なので読み進めながら「え？ そうなるの？」という気持ちのいい裏切りが続く。野球漫画で、こういうドキドキの仕方をさせる成長物語、でも天才に限らず、主人公の抱える悩みというのは本当に小さいレベルでも日常にありますよね。だから納得して読めちゃいます。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

- スポーツって嫌だなあ……という思いを新たにしながらページを繰る手がどうにも止まらない。

ときどきライター / 縣丈弘

マンガ大賞2024 ノミネート作品

Souffle/ 秋田書店

「天幕のジャードゥーガル」 トマトスープ

選考員コメント・1次選考

- 物語が進むにつれて、世界を圧倒する軍事力を持ちながらも考え方の基本が騎馬遊牧民族という、版図を拡大しつつある当時のモンゴル民族の面白さが際立ってくる。物語を動かすファティマが主人公であると同時に、舞台であり背景であるモンゴル帝国もまた柔軟に変化し成長していく。この先をどう描いていくのが楽しみだ。

会社員 / やのこうじ

- イランからモンゴルに連れ去られた女性奴隷を通じて描かれる壮大な歴史物語。そこには権謀術数があり、表裏ある登場人物たちがおり、濃厚なドラマがつむがれ、趣味が起点だからこそその緻密な考証の風景と衣装があり、そして人間存在に対する普遍的で深い洞察がある。このぎゅうぎゅうに詰まった骨太な要素が、基本二頭身の、かわいいキャラクターですべてが描かれている！！ トマトスープさんご本人におうかがいしたところ、「その方が人の心を刺せる」とのこと。他の作品、『ダンピアのおいしい冒険』などでもそうですが、絵柄のためにこうなったのではなく、人の心を刺すためにこのスタイルがあるということの証明。これはもう、傑作になるしかないわけです。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

- モンゴル帝国への復讐を、様々な経験を経る女性の目線から描く大作。昨年大きく話題になったが、まだ巻数も若い。改めてブッシュ。

本と文具ツモリ 西部店 / 津守晋祐

- 1巻ですでに傑作と思ったが、3巻でますます評価が上がった。このスケールにして、この展開の速さには驚くべきものがある。もし劇画系の人が描いたら100巻かかるのではないかな？ それでいて決して軽さは感じず、きちんと重厚に物語が進んでいるのがすごい。マンガにおける「情報量」とは何かを考えさせてくれる稀有な作品。

読売新聞文化部 / 石田 汗太

- 実在の人物ファティマ・ハトゥンを題材にした作品。自分にとってあまりなじみのない文化や時代背景を持った作品なのですが、きちんとエンタメとして面白くも作られているので、結末が史実としてわかってしまっても面白く読めます。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

- 登場人物も増え、后たちの思惑も見え始めて来た中で主人公の立ち振る舞いが今後どう影響して行くのか…！ これからの展開にも期待が止まりません！

会社員 / 竹本 慧

- モンゴル帝国が世界最大の版図を拡大しつつある苛烈な時代。育った街をモンゴルに滅ぼされ奴隷として生きる少女が主人公です。非力な主人公は力が支配するモンゴル帝国の中で知恵を武器に逞しく生き抜いて行きます。その姿は学ぶ時間が充分にある頃にはなかなか気が付けなかった、「知恵は自分の未来の選択肢を広げ、人生を豊かにするきっかけをくれる。」ということをおしえてくれます。自信をもってすべての人におすすめできるマンガです。自由に学べるということはとても幸せなことなのです。

Sler・会社員 / 廣瀬 公将

選考員コメント・2次選考

- 一人の人間の復讐心が国を巻き込むストーリーなので悔しくて辛いシーンもありますが、一話一話が濃密で未だ3巻しか出ていない事に驚き。海外の歴史物の漫画は登場人物の多さや名前を覚えるのに大変で実は苦手だったので、読む手が止まらない作品です。面白い作品は途中から見ても惹きつける強烈なモノがあります。絵柄で判断して手に取らないのは損ですね、とりあえず読んだらこの独特な絵柄にハマると思います。

会社員 / ターシ

- 主人を殺めたモンゴルに復讐を誓ったファーティマが、モンゴルの王族に近い場所へ入り込んで来たかに着実に居場所を確保し同じ目標を持った大ハンオゴタイの第六妃のドレゲネと通じ合うようになる。その「魔女」としての結末は歴史にしっかりと記録されていて、現代の人々はある意味で成就とも未だ道半ばとも言える結末を知っている。漫画の方はそこへと至る道のようにく端緒から急変へと向かう状況へと差し掛かり、妃たちの勢力争いの中でファーティマが徐々に存在感を強めていく状況が描かれている。そうしたファーティマの一代記を通してチンギス・ハンを引き継いだ息子たちがモンゴル帝国をどのようにもり立て後に元朝を打ち立てるまでに至ったかに触れることができる歴史漫画であると同時に、男たちが戦と政治に明け暮れる傍らで女たちがめぐる策謀や思いを描いた人間ドラマでもあってと読んで浴びせられるものが多い作品。ともすれば陰惨になりがちなそうした展開を愛らしいキャラクター描写によって紡いでいつところも本作がモンゴルという異国の歴史物語でありながらも大勢を引きつける所以だろう。

書評家 / ライター / タニグチリウイチ

- モンゴル帝国の創成期を生き、皇族でも功臣でもないが帝国に小さからぬインパクトを与え、歴史に爪痕を残した女性を主人公に据える大胆な作品。チンギス・ハンか元寇かではなかなか知ることのない帝国のダイナミズムとその内幕に着目するとは、さすが『ダンピアの冒険』のトマトスープ先生！

会社員 / やのこうじ

- 白、黒、そして（おそらく）1種のトーンという、くっきりとした3色で描かれる世界が、怖くて美しく、引きずりこまれてしまう。特に、闇夜をはじめとした黒ベタは迫力を帯びていて、物語の重厚さや残酷さをグッと引き立てています。そんな舞台の中で、知識を武器に立ち回る主人公のファーティマをはじめ、誰の、どの思惑が上を行くのか。恐怖や緊張感が付きまとう物語を、トマトスープ先生ならではの可愛らしい人物たちで繰り広げているのが、なんともまあ魅力的な作品。まだの方は、ぜひ体験してみてくださいませ。

会社員 / 伊東敬祐

- 戦記モノ、歴史モノを読んでいてしんどいのは、明るく愉快的な気持ちには中々なれないという点。人が死んだり傷ついたり、もうやめてあげて！と思うこともしばしば。それでも面白いと感じて引き込まれてしまうのは、主人公とされる人物の魅力が圧倒的だからなのでしょう。あまり馴染みのない国とはいえ、ちょっとググれば分かってしまう歴史的事実はあえて調べないまま、主人公と一緒に振り回されながら読んでます。

中央書店 / 井出 麻悠美

- 日本の普通の人感覚からするととっつきにくい「チンギス・ハーン」の世界が、分かりやすく魅力的に描かれています。なお史実を踏まえて読むと面白さが倍増するのもポイント。世界史を選ぶ受験生は読んでおくと役に立つかもしれません。わけありの主人公を応援したくなるのです。

サブカルライター / 河村鳴紘

- いろいろな思惑の交錯を独特な絵柄で表現していてクセになる作品です。大河ドラマのような壮大な世界観の割に、個人個人の感情に寄った描き方のせいか、あまり難しく考えずに読んでいます。強い感情を持ち続けたいと願い、置かれた環境である喜びを直視しないことで持ち続けている矜持と、それでも賢くありたいと思いの矜持すら疑いたくなる気高さ。主人公を側で見守りながら、今後どのような奥深い仕掛けが畳み掛けてくるのか、とても楽しみです。

WEB制作・ディレクター / デザイナー / 河本智芳

- 女奴隷がモンゴル帝国に復讐を挑む歴史ロマン。独特な表現スタイルと物語の展開が噛み合っって小気味よく読ませます。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- 去年も一次選考でも果てしなく推して、まだ書くことがあるのか。以下、もう紹介ではなく、勝手な押し語り。独自性と時代性（この時代だからユーラシア大陸の物語は意味深い）この緻密なストーリーと詳細な考証、その中にふっと現れる深い洞察が、一件可愛い絵で描かれ、だからこそ脱臭されきらない残酷さが垣間見えるこのテキスト、誤解を覚悟で言うが、手塚治虫だ！そして、この作品の恐ろしさは、おそらくまだここまでが導入に過ぎないのであろう、ということ。詳細に出来事を知らないからこそ、真実の歴史の複雑さと重みを驚きを持って迎えられこの喜び！ 手塚治虫の完結しなかった作品に対する渴望が、ここで満たされるのかも！

ニッポン放送アナウンサー / 吉田 尚記

- 昨年推した本作、二次選考にあたり再度読み直しました。悩みましたが・・・結局推さない訳にはいきませんでした。智と怒りを秘めた主人公ファーティマが帝国を相手にどう立ち向かってゆくのか。まだ3巻なの？と驚くほどにお話の濃縮度が群を抜いている気がします。そして大作の匂いのする本作、まだ3巻だからこそ今お勧めしたい漫画です。

フリーランス / 金輪英恵

- チンギス・カンの息子たちと、その後たち。女たちの戦いは、男たちの戦いよりも、ずっと複雑。男たちの戦いや戦う理由はシンプルだけれど、女たちの戦いや戦う理由はほんとうにそれぞれだ。権力に愛された女たちは夫を支え、権力に翻弄される女たちは連帯し、それぞれに気づかれぬ戦いを挑む。空前絶後の大空間に広がった大モンゴル帝国を舞台にしたこれら権力者たちの戦いに、われらが主人公ファーティマは、古代ギリシアから時間を超えて伝わった知識とみずからの知恵を武器に切りこんでいく。第3巻は第一皇后ボラクチンの登場によって、ぐっと奥行きが深まった。集中していく皇帝権力にファーティマはどうやって抵抗していくのか。きっと文章だと陰謀と殺戮と略奪の陰惨な大河ドラマになるところ、これぞマンガの力でみごとに昇華されている。まだまだ底が知れません。個人的にはテムゲ叔父さんが好きです。

教員 / 戸田 稔

- 去年も投票したけど、ますます面白くなってきやがる。どういうことだ。個人的に女性版横山光輝になるポテンシャル秘めてると思う。

鳥取県立高校教師 / 佐川ゆかり

- チンギス・ハンのモンゴル帝国がなぜ大帝国となったのか、そして分裂し衰退していくのか。その世界史的分岐点の重要なポイントを、一人の奴隷出身で聡明な女性ファーティマの目線を通じて俯瞰することができます。社会や制度を整えていく過程と、そこにある歪みは、どの時代、どの地域や組織にもありうるもの。かわいらしいタッチの絵柄でハードな物語が展開します。

弁護士 / 三葛敦志

- 復讐の相手はモンゴル帝国。奴隷から一足飛びに国の中枢へ入り込むことはないし（でもそこがいい）、武力ではなく智力を使った静かな戦いだけれど、いつか嵐を起こして欲しい。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

- 版画のような、切り絵のような画風が世界観に合っていて、異文化をより感じさせてくれる。生きるために学ばなくてはいけない。かつて言われた言葉を糧に、ファーティマは激動の時代を、復讐のために生き抜く。絵柄からして、まさかここまで本格的な歴史マンガとは思わなかった。

元 SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

- モンゴル帝国というと、チンギス・ハンが大帝国を築いて、その死後すぐに分裂したと思い込んでいたが、全く違った。チンギス・ハンの死亡時には、まだ金も南宋も残っており、その後もモンゴル帝国は何代にも渡って存続している。その当時をリアルな絵柄ではないのに、現実感溢れる情景を感じさせる描写は圧倒的です。歴史なので出来事と結末は確定しており、決して明るい展開にはなりそうもないのだが、どのように描かれるのか非常に楽しみです。

丸善ジュンク堂書店 営業本部 / 小磯洋

- 個人的には1巻を読んだときの「ファーティマの物語がマンガになる！」という興奮が高かったため、なんとなく興奮度が落ち着いてしまったような気になってしまっていたが、冷静に考えると、やはり面白い。この作風で、あの物語が描かれていくのか？と考えるとドキドキする。

1616 屋 / 杉本善徳

- 1次推薦であらかた書いてしまったので、付け加えることはあまりありません。繰り返しになりますが、もしリアルな画風でこの作品をやったら、何十巻あっても完結できないと思う。作者の世界史知識の広さ深さ、それを現代的にやさしくかみ砕く知性、シンプルなようで豊かな情報を持つ絵のタッチに圧倒されっぱなしです。何でこんなにすごいマンガが描けるんですか？

読売新聞文化部 / 石田 汗太

- 歴史ではモンゴル帝国は内輪もめでどんどん弱体化していったと一言で済まされるも、こういった内容や状況なのかという点と点の繋がりを補うかのような緻密な描写とダイナミズムが同居しており、侵略性の複合他民族国家というのはどこに根深い恨みを抱えた人間が居るか分からないというドラマ性が衰退を呼んだのであろうな……と思える作品です。

住職兼ライター / 蟬丸 P

- 『ダンピアのおいしい冒険』のほうがノミネートされるかと思っていたけどこちらが来たか。この絵柄だがへビーな歴史もので一気に引き込まれる。

ソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

- 復讐を誓う主人公の広い知識と八方美人にも見える立ち振る舞い、王子の一人が亡くなりパワーバランスが崩れてきた妃たちの思惑がどう影響して行くのか。今後の展開も楽しみです。

会社員 / 竹本 慧

- 女性の視点から描くモンゴル帝国歴史。独特な雰囲気画と相まってその説得力は秀逸！一巻発売当初から注目を集めるも今回は巻数も進みより読者にはより読み応えを感じてもらえるはず。おすすめです！

本と文具ツモリ 西部店 / 津守晋祐

- かわいらしい絵とはうらはらに、描かれる歴史は重く苦しい。侵略され、モノのように扱われながらも、主人公の少女は書物から得た知識と知恵で窮地を切り抜ける。敵中にありながら、味方を作っていく。でも、その味方は再び敵に変わる可能性も秘めている。誰が加害者で、被害者なのか、読み進めるほどに分からなくなる。その混沌にいっそう惹かれる。知恵の勝利が見たいし、敵討ちも果たしてほしい。でも、主人公には権謀術数うずまく天幕を離れ、平和な世界で生きてほしいとも願う。一刻も早く続きが読みたくて、待ち遠しい作品。

介護ジャーナリスト / 島影真奈美

- 十三世紀モンゴルで皇后の側近を務めた女性をモチーフとして、歴史漫画の名手が持ち味を発揮した良作。全六巻で完結した『ダンピアのおいしい冒険』を推したかったが、こちらも投票の価値は十分にある。

書評家 / 福井健太

- 人類がおそらくはじめてグローバルを感じたモンゴル帝国の時代ははたしてどのようなものだったのか。それを理解する手助けをしてくれる作品だと思う。

鳥取県立図書館 / 野間勤

- 物語も佳境へ。登場人物なども増えてきたものの、それぞれの役割分担がわかりやすいのと主人公の立ち位置が明確なこともあって壮大な歴史ドラマの一部をくりぬいて読んでいるような楽しみがあります。モンゴルの文化の描き方もあざやかで、愛を感じる素敵な作品。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

- 今までの歴史漫画が描こうとしてこなかった何かを描こうとしてとても意欲を感じる作品。

ときどきライター / 縣丈弘

マンガ大賞2024 ノミネート作品

少年ジャンプ+/集英社

「正反対な君と僕」阿賀沢紅茶

選考員コメント・1次選考

- とにかく読んだ後にほっこりします。それぞれの登場人物がちゃんとそれぞれの人生を生きている感じがします。素直な気持ちで見守りたい物語です。絵もおしゃれで登場人物たちの着ている服などにもいつも注目しています。
デザイナー / 玉澤綾子
- 本当に普通の高校生活グラフィティ。学園ものだとキャラクターの特性として、非常に頭が良い(勉強ができる)、非常に運動が得意(部活のエース)、非常に顔が良い(モテル)といった分かりやすい特徴をもっていることが多いが、この作品の登場人物たちは、個性にあふれているが、本当にみんな普通の高校生。ショッキングな事件なども起こらず、本人にとっては大きいのだが、周りはそこまで気にしていないような事で悩んだりしながら日常を過ごしているだけなのに、面白い。
丸善ジュンク堂書店 営業本部 / 小磯洋
- 現代人の高校生時代の性格を濃縮して還元したような非常に高いレベルの「心理描写の言語化」。これに尽きる。たぶん作者はアカシックレコードの人類心理の頁の写しを持って。だって思わない? 「あ、これ自分だわ」って。何でこんなにも自分なのか??? 平はオレなんだ!! オレだ! 平の心のキズはオレのキズだ!! 平の悩みはすごく共感できる。他の人が笑ってたら自分が笑われたんだって思ってたから。平みたいに後ろ向きだったのが後退し続けた結果なんか上手く行って自己肯定できてるのが今の自分なんだなって。「正反対な君と僕」ってタイトル、確かに正反対な2人だよなあって思うんだけどさ、「表層に出てきてる部分が大きく違う」ってだけで、実は似た物同士なんじゃない? って思うことがあったり。同じぐらい愛情深くて照れ屋で見栄っ張りだったり、相手のことを真っ直ぐ見れていたり、自分自身に鈍感だったり。たぶん読者は誰と誰のことを言ってるかわかる。(過言)社会的証明を超越した領域の、自分とは正反対なところを尊敬し合える君と僕なんだろうと思います。「憧れは理解から最も遠い感情だよ」って偉い人が言ってたけど、尊敬は愛情と近い感情なのかな。月曜日(隔週)が来るたびに2週間分の会社行く元気が湧くからもはや私のインフラ。
会社員 / 布施直人
- 毎話、毎シーンが全て可愛い。キュンとする。こういう何でもない、そして楽しい学園生活を送りたかった。いや、この漫画を読んでいる時だけはそんな学園生活を遅れているような気がする。そんな作品。
女優 / 齋藤明里
- こんな高校時代を送ってみたいかった…登場人物が全員主人公と言っても過言ではないくらい、青春してます。
販売員 / 八重田幸子
- 友達や好きな人のこと、好きなことへの上手く言えない、もどかしくてキュウッとするような甘酸っぱい懐かしさ。青春時代にこんなふうに言ってくれる人がいたら、こんなふうに言えてたら素敵だったろうな。不器用ながらも少しずつ前進していく登場人物たちが愛おしい。
元書店員 / 内野智未
- 陽の者と陰の者の恋愛はオーソドックスですがたまらない。それに加えて本作は学園の「友達関係」や「親子関係」がとてもありアルで、学生時代を思い出したり共感しやすいテーマが様々取り込まれていると思う。とても清潔でクリーンな恋愛で、コミカルな様子などもありつつ、真摯な感情が描かれていて「健全な恋愛もの」で安心する。今ドロドロのものが多い中、過去の純粋性を思い出すし、このような感覚の尊さに気づかされるのです。
クラスター広報 / 西尾美里
- 読むたびに各登場人物に対するいとおしさが増すような気がします。この子たちの日常をいくらでも読んでいきたいです。
会社員 / 津田 圭

- メインカップルがロマンチックに盛り上がるのも楽しいし、同時に次のカップルもジワジワ来て、更に「おや、もしかして3番手も？」と期待が膨らむ。時間差で打ち上がる花火のよう。バカな男子ノリまでうまい。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 告白して両思いになりました。めでたしめでたし。なんて童話の世界だけで、本当は付き合ってからの方が、ずっと悩むし、面白い。そんな2人と周りの仲間の話。年齢はずっと上になっちゃったけど、読み返すたびに、同世代の友人の1人のように登場人物を応援したくなる

鳥取県立高校教師 / 佐川ゆかり

選考員コメント・2次選考

- Z世代高校生のワチャワチャした可愛らしい青春をみれてほっこり・思春期の解像度が高いのですが、ドロッとせずポップでサクサクと読み進められました。・阿賀沢紅茶先生の氷の城壁もすごくよかったです。

会社員 / 伊藤千恵

- 鈴木さんが、見た目イケイケなのに、可愛くて、なつかしい感じで、ウキウキしますね。良いですねえ。

書店員 / 桶谷佳代

- 私の本業はラジオパーソナリティです。職業上のこだわりとして、もっとも大きなものの一つが、『生きた言葉を話す』こと。この作品の、言葉の活け造り感がハンパないのは、1ページでも読んだ人にはわかるハズ。例は枚挙に暇が無いけれど、4巻166ページ。「…コンビニの蒸しもん」…へ!?…いや肉まんのこと「蒸しもん」って呼んでたのが密かに気になってて…だってピザまんとかもあんじゃん(※山田の独自ルール)(中略)電車とかでイクアウト持ってる奴会ったことねえ?あの匂い有罪なやつふっ…以上、印刷物なのに、真横で高校生たちがライブで喋っているようにしか聞こえない。そしてこのテキストレベルでの生きている感が凄いのだけれども、リズムやトーンや音量や間によって、言葉の生き死にはむしろ文字面より左右される。その意味で、この作品のフォントと吹き出しの仕事っぷりがヤバイのだ。同じ人間の語りのなかでも違うフォント、様々な太さの線が使い分けられ、時には背景が透明化・半透明化する吹き出しなどが繰り出される。さらに人間の自然な呼吸に絶対に逆らわないような改行…!ああ気持ちいい!!!小説がいかに深いことを描いても、画面に踊るように、湧き出す会話の言葉を画面に描き出すことはできない。まさに、文字のマンガ。文字こそマンガ。表情が存分に伝わってくる表情も、私からすると文字をより、より気持ちよく読ませてくれる要素になってて、もう、ラジオほんと、負けてらんない。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田 尚記

- いつも楽しく読んでます。登場人物の描写が自然で安心して読めます。横取りとか裏切りとかもなく、何気ない日常の描写がとても好きで純粋に応援したくなります。垢抜けた絵柄もとても可愛いです。

デザイナー / 玉澤綾子

- 自分の学生時代はとっくの昔ですが、それぞれの悩みや思いは共感してキュンとしたりクスッとしたり。このコたちのクラスメイトになって学校行ったら楽しいだろうなあ!

主婦 / 紺野 泉

- 甘酸っぱい。むず痒い。若い。でも40過ぎた自分にもものすごく共感できる。人間の生きにくさと、それを飛び越えてくれる大切な人への感謝の気持ちは幾つになっても変わらないんだろうなあ。

鳥取県立高校教師 / 佐川ゆかり

- ここ最近の作品の中でも最高のラブコメだと思います。思春期の気持ちが詰まった爽やかなストーリー。笑いと感動が絶妙にマッチしていて、絵柄の可愛さとテンポの良さが気持ち良いです。登場人物全員が可愛い。軽快さがあるのですが、心理描写は深みもあり、キャラクターたちの成長と人間関係が魅力的ですね。

会社員 / 三浦佑樹

- 出てくるキャラクター全員愛おしくなります。読んでほっこりする作品です。

書店員 / 渋谷 孝

- 昔からよくある高校生の青春グラフィティで決して斬新な内容ではないのですが、見せ方が現代的で新しい。何より登場する高校生たちは、皆、普通の子たちで、それぞれ悩みはあったりするが、悲劇的な展開になることはなく、安心して読んでいられる。恋愛模様が中心ではあるが、決してそれだけではなく、濃淡はあるが、各キャラクターたちは自分というものに向き合って、自己を形成していく成長物としての側面も大きい。多感な若者も、不惑になってしまった大人も楽しく読める健全な作品です。

丸善ジュンク堂書店 営業本部 / 小磯洋

- いろいろまいけれど、ダイアログがうまい。思春期の心を行き交うモヤモヤしたつかみどころのない感情が、ヘンテコなたとえやら素っ頓狂なリアクションやら、ユニークな言葉遣いで飛び出してきて、まずはギャグとして笑わせてくれるが同時に、それを受けるキャラのセリフで腑に落ちてくる。ああ、その感情はこういう形をしてて、その形のおそこが刺さってあそこが障って、だからこうなのか…と気づかされる。パッと見、繊細な感じの絵柄ではないが(失礼!)そこがすごい。主人公らがいろいろつまづいても、終始、陽性の空気をまとっているところに、愛を感じる。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 一次選考で推した「氷の城壁」もそうだったが、阿賀沢紅茶というマンガ家は、年齢・性別ともに公開していない。Twitterなどを拝見する限り、おそらくは関西出身で会社員歴もあるだろう立派な成人が、どうやったら10代の心の機微をこんなにも深く覗き、2020年代の世相も含めた観察ができるのだろう。現代の「あるある」を反映したリアリティの高いボケとツッコミの質量が高すぎて気を失いそうになる。「映画は好きだけど映画館は客がガチャだから苦手だわ」「凍らせたスポドリ全然溶けないからあらゆる固い所叩いて回ってんの」「誠実な男から旨味を感じられないんだよね」などのセリフ回しのなんと秀逸なことか。10代だったことのあるすべての人におすすめしたい。

ライター／編集者（馬場企画）／松浦達也

- 彼らの学校生活への憧れがつのり「夢高校生」マンガとして読むようになりました。まっすぐな気持ちには何事もかなわねえなあ。周囲の人たちにも恵まれた「両思いカップル」マンガ。読むと元気になれる！

NICリテールズ(株)／池本美和

- 昨年のノミネートで初めて読んでからのファンです。巻数が進み登場人物たちの関係性も一歩ずつ前進してきて、リアルな学生生活を一緒に過ごさせてもらっているような感覚です。一見「陽キャ」と思われるようなキャラクターたちにもひとりひとりに悩みがあり、自分の心を探りながら一生懸命に日々を過ごしていることを丁寧に描いているところが好きです。コマのすみずみまで絵が可愛くて、画面を見ているだけで心が躍ります。

伊吉書院 類家店／中村深雪

- 1巻からほんとうにどのキャラクターも魅力的ですが、巻が進めば進むほど全てのキャラに愛着が湧いてきてしまっていて……もう本当にみんなかわいい。いつまでもこの日常を眺めていたくなります。

会社員／津田 圭

- しゃべりたいことはしゃべり切れなくらいたくさんあるし、したいことも、行きたいところもたくさん。どれだけ時間があっても足りないし、会ったばかりでもまたすぐ会いたくなってしまう。そんな理想の高校生活を絵に描いたような多幸感あふれる幸せすぎる世界。鈴木さんと谷くんという、性格も風貌も「正反対」なふたりの恋愛関係がゆっくりと深まっていくのが縦糸だけど、そういう木の幹以外に差し込まれるエピソードの一つひとつが、高校生の時しかあり得ない心情を丁寧にくみ取っているようでとてもリアル。サブキャラの一人ひとりに血が通っているし、それぞれが互いを思いやって気遣って、大切にしているのだと読み手がわかるように話がつくられている。結果として一コマひとコマの情報量は多い。おしゃべりに加えてそれぞれの内心の声やト書きがぎっしりと詰め込まれていて、それを読み飛ばさず丁寧に拾って読んでいくと、全体として稀有な幸せすぎる世界観がそこに立ち上がる。現実の世の中はもっとドロドロしたところもあって、それは情報の不足や誤解や相手への無関心からくる判断が理由なことも多い。その意味でこのマンガはファンタジーなのだけれど、大事な誰かとコミュニケーションを通わせることの大切さ、難しさや、コミュニケーションがうまくできて自分の気持ちや相手の気持ちを相手や自分が共有、共感できたときの喜び、うれしさをしっかり描き込んでいる。この作品が一貫して追い求めているのはそこなのだろうと思う。そして高校生の仲間内のエピソードだけで進行する他者不在のマンガでは決してなく、自分の親や相手の親やバイト先の店長やクラスの普段はそれほど接点のない生徒までも含めてきちんと「社会」が描かれているし、そんな社会の関係性があるからこそ自分たち二人は互いを思う気持ちをはぐくめているのだ、と鈴木さんも谷くんも考えていることがうかがわれるのも好ましい。平和にあふれた、やさしい世界。10代はまぶしい。ポップなイラストのように華やかで楽しい画面は読むたびに気持ちが上がる。なんともかわいらしいマンガ。

日本経済新聞記者／天野賢一

- 学生もの、恋愛ものではお決まりのエピソード（試験や夏休み、クリスマスにバレンタインなどなど）はきっちりおさえられてその点はとてもベタなのに一つ一つのエピソードにリアリティがあって、登場人物全員が愛おしいと思える作品。とにかくキャラやそれぞれの関係性に彩りと奥行きがあって何度も読み返したくなる。書き文字の独特のフォルムもややキャラクター的にデフォルメされた登場人物たちとマッチしていて、そこも良い。

元書店員／内野智未

- 羨ましさすぎるアオハル！読んで自分の顔がニヤついているのがわかる。自分に置き換えて読むことがよくあるのですが、隠キャの自分からすると住む世界が違いすぎて、陽キャの子たちに憧れはあれど、関わりたくないと思って遠くからみているだけの青春でした。あの時こんな風に話しかけていたら違っていたのかも…と作品を読んでい

と感じることが多くあります。あの時代には戻ることができないから後悔だけが大きいです。現役でアオハルしている子たちで読んで、少しでも後悔のないおとなになって欲しいです。

販売員 / 八重田幸子

- 明るく友達も多いけど空気を読んでしまう鈴木と、静かで口数が少ないけど自分を持っている谷くん。恥ずかしがり屋で人との会話が苦手な西さんと、ムードメーカーで誰とでも仲良くなれそうな山田。様々な正反対と、個性豊かなキャラクター達。阿賀沢先生はそれぞれの心の内を言語化するのが本当に上手で、共感できたり自分と似てるキャラが見つかると思います。私はナベの過激なマインドとても共感します(笑)それからホンちゃんの気持ちもとてもわかる。上手く言語化できていなかった気持ちをすると伝えてくれて、そう、そうなの！そういうことだったの！と、もやっとしていた物が消えたように感じました。そしてやはりキャラクター1人1人と、それぞれの関係性が尊い。漫画でキスシーンを見て、え、え、見ちゃっていいんですか！？と思ったのは初めてです(笑)

声優 / 富岡美沙子

- 現代人の高校生時代の性格を濃縮して還元したような非常に高いレベルの「心理描写の言語化」。これに尽きる。たぶん作者はアカシックレコードの人類心理の頁の写しを持って。だって思わない？「あ、これ自分だわ」って。何でこんなにも自分なのか???平はオレなんだッ！オレだ！平の心のキズはオレのキズだ！！平の悩みはすごく共感できる。他の人が笑ってたら自分が笑われたんだって思ったから。平みたいに後ろ向きだったのが後退し続けた結果なんか上手く行って自己肯定できてるのが今の自分なんだなって。「正反対な君と僕」ってタイトル、確かに正反対な2人だよなあって思うんだけどさ、「表層に出てきてる部分が大きく違う」ってだけで、実は似た物同士なんじゃね？って思うことがあったり。同じぐらい愛情深くて照れ屋で見栄っ張りだったり、相手のことを真っ直ぐ見れていたり、自分自身に鈍感だったり。たぶん読者は誰と誰のことを言ってるかわかる。(過言)社会的証明を超越した領域の、自分とは正反対なところを尊敬し合える君と僕なんだろうと思います。「憧れは理解から最も遠い感情だよ」って偉い人が言ってたけど、尊敬は愛情と近い感情なのかな。月曜日(隔週)が来るたびに2週間分の会社行く元気が湧くからもはや私のインフラ。

会社員 / 布施直人

- もう主人公カップルの谷くんと鈴木さんより、平くんと東さんから目が離せません。とくに劣等感の塊である平くんの陰キャの解像度高すぎて、ツライ……！そこまで卑屈にならんでもとも思いつつ、自分にもどこか心当たりがあるから辛いんですね。そんな平くんには、どうか東さんと何とかなしてほしい！東さんも東さんで、平くんのように根がいい人なら安心でしょう……と、人の恋路を勝手に応援したくなる漫画です。

主婦 / 堀江千秋

- 自分の気持ちを、異様に高い解像度でスキャンせざるを得なくなってる人(そうして見えたものが合っているかは別として)の描かれ方が本当にすごい。著者は登場人物全員を(読者のことも)応援しているんじゃないかなあと考えてきて、それがなんかうれしくて、自分も彼らのことを応援してしまう。みんな、大丈夫だから！！と大声で言いたい。

ライター / 門倉紫麻

- 「普通な感じ」の初々しさとか楽しさとか、この作品の持つ雰囲気に取り込まれてしまいました。また、ラブコメのキャラクターってモヤモヤしたものを抱えたとき、相手のちょっとした仕草や表情の変化から勝手に自己解決してしまいがちだと思うのですが、この作品の登場人物は割とすぐ口に出してしまうのもある意味普通な感じがする理由の一つかもしれません。

会社員 / 林礼春

- 何度読んでも、きゅんきゅんして、ニヤニヤしてしまう。こんなに真っ直ぐで純度100%な青春漫画なかなか出会えません！

女優 / 齋藤明里

マンガ大賞2024 ノミネート作品

ココハナ / 集英社

「環と周」よしながふみ

選考員コメント・1次選考

- 代表作といえる人気の長編作品、長期連載作品がありつつ、短編作品もバシッと決めてくれる作家だと改めてうなる。バラバラの時代、全く異なる世界観で描かれたそれぞれのストーリーや登場人物が、最後の最後に（もちろん最初も！）見事に結びついて、想像できていたのにあまりの完璧な美しさに涙が止まらず。舞台だったらスタンディングオベーションで全力拍手するところでした。

元書店員 / 内野智未

- ひさしぶりのよしなが先生の短編集。静かな人生の中で、平凡な日常の生活の中で、はりつめていたものがわっとあふれだす瞬間、緊張の糸がふっとゆるんでたたえていたものが流れ出すあの瞬間が、たぶんわたしにとってのよしながふみ体験で、この瞬間は、どんな人物、どんな物語において出会っても、いつも、その人が、その気持が、懐かしく親しく愛しく思われる。

教員 / 戸田穰

- 読後、マスターピースという言葉がバーン！と浮かんだ。ずっとずっとすごい作家さんですが、今のよしながふみだからこれを描いたのだと、そして今の自分でこれを読めてよかったと思いました。

ライター / 門倉紫麻

- 既にいくつも名作を描かれていますが、人と人との関わりを、こんなふうに丁寧に、繊細に描けるなんてすごいなと改めて思いました。漫画なのですが、途中から漫画であることを忘れ、まるで誰かの思い出を、その人自身から聞かされているような感覚になりました。収録されている五編の物語は、決して悲しいだけの話ばかりではないはずなのに、読後、とても切ない気持ちになるのはなぜなのでしょう。「泣ける」「感動する」という言葉だけでは伝えきれない感情が湧いてきます。

主婦 / 堀江千秋

- 当代随一のストーリーテラーの面目躍如と思う。主人公の名前以外に関連の無いようにみえた短編の連なりが、最終話で悲劇の幕切れと共に秘めた背景が明かされる。エピローグのラストページの独白にゾクリとさせられた。これが運命（さだめ）というものか。

コミティア実行委員会会長 / 中村公彦

- よしながふみが、なぜ今ごろ「転生モノ」？と最初は訝しんだが、実はこの連作、転生でもなんでもなくて、「環」と「周」という記号がたまたま一緒なだけだと思えてきた。つまり、個々のエピソードには何の関係もない。それを転生モノに見せる「錯覚」が作者のたくらみではないかと。考えすぎかもしれないが、もしそうだとすると、作者が「大奥」の後にこの作品を描いた意味が、うっすらわかるような気がしてくるのです。

読売新聞文化部 / 石田 汗太

- 「大奥」も「きのう何食べた？」も面白い…けど、よしながふみのこういう短編がずっと読みたかった！！雑誌で掲載を迫っている時には、恥ずかしながらこの一連の物語に隠されていた真実に気が付きませんでした。単行本を手にして「あっ！そういうことか！」と気づいた瞬間には震えました。描き下ろしのエピローグがまた良かった。読後の満足度がとても高い一冊です。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

選考員コメント・2次選考

- 環と周のそれぞれの出会いと想いを、こんなにも多様な物語でみせられるのは、よしなが先生だからこそ！と敬服しております。どの時代の環と周にも、言葉や表情から滲み出る人間味があり心揺さぶられました。自分にも、魂の巡り合わせがあるのだろうかと思いを馳せました。

主婦 / 碓氷麻里子

- 読み終わってから前のページに戻って「こっちが環でこっちが周……」という答え合わせに四苦八苦しましたが、何度生まれ変わっても環が周を助けに来る物語だなと思いました。呪いのように始まった運命は、様々な時代のしらみにも縛られ続けましたが、現代ではそのようなこともなくなり（昭和の二人の病気も、現代ならもう少しどうにかなったかもしれない）互いのことではなく子供のことを思い悩む二人になったということは、二人の魂の物語はここで終わりを迎えるのではないかと思いました。エピソードの現代パートでは「全然劇的でロマンチックでもない馴れ初め」とありましたが、いえいえとんでもなくドラマチックな馴れ初めですよ。と読者は心の中でつこみを入れたことでしょう。そしてまた、自分ももしかしたら、と想像してみるのも楽しいかなと思います。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

- 登場人物の名前が「(たまき)」と「周 (あまね)」性別も環境も生きる時代も状況も違うそれぞれ各話の主人公たちの名前が共通点。違う角度視点から「人の繋がり」をみせていき…なんてことない日常なのか、深い感動なのか、「読み手」によって形を変えるストーリー展開が素晴らしいです。

図案家 / 橋本寛子

- 初めて読んだ際に1話の終わり方に疑問が残り、この先どんな展開になるのかなとふと軽い気持ちでページをバーっと捲り続けてしまいました（※大後悔しています）。あるセリフが目飛び込んできて「えっ」と驚き、そこで納得できなかった1話、その他の伏線の予感に思いがけず触れてしまい思わずリアルに息を吞んでしまいました。本当に漫画読みとして決して褒められた読み方で無いのは承知しているのですが、その衝撃が凄まじく、改めて胸が震えたまま2話以降読み進めました。結ばれるだけが運命じゃなくて、時には怨念のような、時にはささやかな願いのようでもあって。何でも無い瞬間が実はドラマティックだったりもして……。久しぶりにこんな読後感の漫画を読んだ気がします。

フリーランス / 金輪英恵

- 否応ない時間の流れのなかで、流されたり、のみこまれたり、石にあらわれたりして傷ついたりする、魂が、ほんの一瞬、時間の流れからぬけて顔をだす。その息継ぎの一瞬に、口からは声が放たれたり、嗚咽がもれたり、目から涙があふれたりする。けれど、その流れはいつもはげしい濁流なわけではなく、ときに穏やかでゆったりとした流れともなり、やがて回帰する流れでもある。『環と周』には、よしながふみの悲しくも幸せな一瞬と永遠がこめられている。

教員 / 戸田穠

- 各時代で巡り合う「環と周」のオムニバス短編作品。特に1話は私自身の思い入れが深い『こどもの体温』を思い出して胸が締め付けられました。昔から「思春期の子と親」というモチーフを解像度高くかつ繊細に表現されていて本当にすごいなあと思います。他話も、恋愛ではなく「さまざまな好きのかたち」を人の心に寄り添って描かれていて美しい小説を読んだかのような読後感でした。これからも自分の人生で何度もじっくりと読み返す作品になるだろうと思います。

営業 / 佐々木つむぎ

- もう、こういうささやかな機微を描かせたら、よしなが先生の右に出る漫画家はいないのでは……。

大日本印刷 / 佐々木愛

- 油断して電車の中で読んでしまったものだから、大変でした…泣ける!!! あらゆる時代の環と周がからんで、全てが深く繋がっていて…涙が止まりませんでした。

バイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- お堅い職業の人には、環といえば環昌一（最高裁判事）、周といえば西周（政治家、教育者）だが、もちろんそのような作品ではない。何組かの環と周の物語。さすがに、よしながふみ、である。独身女性と病身の男児の話は泣かされる。

弁護士・三村小松法律事務所 / 三村 量一

- 二人の人間が出会い、別れ、また出会う物語。かもしれないし、そうじゃないかもしれない。違う時代の同じ名前の二人の物語、様々な別れ模様を描いた物語。かもしれない。でもやっぱり「また会ったね」のほうが素敵でしょ。
八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

- 一緒にいたいと願う「人が人を想う心」には、時代も年齢や性別も関係無いのかも知れません。どのお話も、あるがまま過ぎていき、読み終わって切なくなります。
教師 / 持丸宏司

- それぞれの人生と繋がっている壮大な物語に圧倒されました。
書店員 / 渋谷 孝

- 珠玉の名作！連載まで長く寝かされたからこそ味わうことができる奥深い作品。出会えてよかったです。感謝！
ロングランプランニング / 小森和博

- よしながふみの短編集。ほんの一言差し込まれる台詞が照らす人生の残酷さと美しさが心に残る。さすが。
ソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

- 短編集の体を取りながら、プロローグとエピローグが綺麗な円環となる構成に、読み終えて慄然とする。よしながふみという作家の凄みに圧倒された。
コミティア実行委員会会長 / 中村公彦

- 一次選考でも「今年はいかなる！」と思いながら推薦しましたが、ノミネート作を全部読んでも「やはり今年はいかなる！」という決意は揺らぎませんでした。ストーリー、構成、キャラクターの描き方の濃さ。よしながふみ先生の漫画力にあらためて感服です。
伊吉書院 類家店 / 中村深雪

- 短編集をここまで濃密に仕上げられるのが、すごいなあ、さすがだなあと思って読んでました。何を言うのも野暮なので是非読んで欲しいなあと思います。私が一番気に入っているのはエピローグの最後のページ。ここまで濃縮というか圧縮というか、密度の高い6文字はそうそうお目にかからないかと思えます。
めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

- 時代を超えてつながる「環」と「周」という2人のキャラクターの運命を描く短編集。夫婦、親友、戦友、宿敵……いずれの関係性にも、確かに存在するのはさまざまな形の愛。読後、静かな感動がじわっと余韻を引きます。名作「愛すべき娘たち」と同様、今後も何度も読み返すことになりそうです。
ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- 母の立場で読んだらついつい涙してしまいました。どの話も心を掴まれその世界に入れました。
カメラマン / 平沼久奈

- 1次選考のときにほとんど思いの丈を書いちゃったのですが、読み返すたびに込み上げるものがあります。悲しいけど悲しいだけじゃない。むしろ、温かくて優しいから泣けてしまう。人が人を思うとき、性別や年齢、立場は垣根になりません。そして相手を思う感情に、恋であるとか友情であるとか、ひとつのことに決めてしまうような名を付ける必要もありません。誰かを思いやることは、ただただ素晴らしいのだと気付かせてくれます。
主婦 / 堀江千秋

- 1つの作品としてあまりにも完璧すぎて怖いと思ってしまった。著者が伝えようとしている肝の部分は受け取れたと思うけど（なぜなら完璧なので）、10年前の自分には絶対わからなかったところがあって、ということは今の私にもわかってないところがきつとあって、10年後の自分にならわかることがあると思う。楽しみ。
ライター / 門倉紫麻

- 家族、友人、恋、愛、巡りめぐる環も、周も、巡りめぐる、ポリリズムが頭の中で、巡りめぐるいい作品であると思います。
tetote 代表 / カ丸 真

- 希望に満ちた子供の頃、力みなぎっていた若い頃、階段を降り始めているように感じ始める頃、人生にはいろんな段階がありますが、そのどの時代でも苦悩や喜びがあります。その場面場面で苦悩に向き合い折り合いをつけ、覚悟を決めて前向きに生きていこうとしている人たちが描かれています。その登場人物たちの姿は色んな年代、性別の人に向けたエールのように感じ、前向きな気持ちになれます。行き詰まりや閉塞感を感じている人に特にオススメです。

Sler・会社員 / 廣瀬 公将

- 構成力が高く、なおかつメッセージ性もあり、よしながふみ先生の匠の技が感じられる。

会社員 / 齋藤隼

マンガ大賞2024 ノミネート作品

週刊ビッグコミックスピリッツ / 小学館

「ひらやすみ」真造圭伍

選考員コメント・1次選考

- この緩さと暖かさと人情味と優しさと楽しさと癒しがちょうどいい。疲れている時に、仕事が忙しい時に、ちょっと行き詰った時に、読んで欲しい漫画。読むたびに刺さる場所が変わるかも。その時の気持ちに寄り添ってくれる、そんなひらやすみ。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

- ヒロトとヒデキの関係性が深まることで、心地良い作品の深みがより増してきている。

医師 / 岸本 倫太郎

- 心の動きが透けて見えるようでとても切なくて温かい。

PENICILLIN / HAKUEI

- 幸せって何なんだろう。そういえば自分はどんな夢を持っていたらだろうか。ふと読みながらそんなことを思い返す、ほっこりとした優しさに溢れた素敵な作品。こうあるべき理想の姿と、それに程遠い自分とを重ねて辛くなってしまっている人にこそ読んでほしい。

会社員 / 杉佳尚

- 読んでいて、ホッとする作品。情景はもちろん、実際にこんな人いるかも、と思うくらいに身近に感じます。

販売員 / 八重田幸子

- 毎回候補に挙げてしまう。この優しい世界観がとても好きだ。疲れている人もそうでない人にも薦めたい。癒されます。

あゆみ BOOKS 仙台一番町店 店長 / 土屋修一

選考員コメント・2次選考

- ふんわりとした日常を描いているのに所々にピリッとしたリアリティーと緊張感がある。そして登場人物全員魅力的過ぎる。

PENICILLIN / HAKUEI
- 大好きな作品です。みんなもう知ってると思いますが。

マネージャー / マネージャー樋口健
- 何故このマンガが好きなのか！？と考えると、ゆるりとした登場人物やストーリー展開が心地よく、自分の理済みで読み進めていることに気付いたからでした。平たく言うとこのマンガの空気感がとても好きなんです。

株式会社エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部 大介
- 主人公のヒロトの優しさや生き方はそう簡単に真似できるものでもないけど、「少しでもこうありたいな」という気持ちが、バシッと突き動かすのではなく、そっと背中に添えられた手にジワッと押されるように入ってくる。何なんですかね、この不思議な温かさ。何言ってんだよと思うかもしれませんが、読んで同じように思ってくれる人がいたら嬉しいし、そこそ居るんじゃないかなと思うんです。他人事に思えないような葛藤や挫折も、美味しそうなご飯も、不器用だけど人間臭くて愛しさ溢れる人物も、真造先生の描く世界は本当に心地よく染み渡ります。良いんです。って2年前も同じようなコメント書いてました。やっぱりこの作品、好きなんだなあ。

会社員 / 伊東敬祐
- それぞれの事情があって生活は回っていくというあたりまえのことを改めて思い出しました。・一人で何か失敗したときに誰も声をかけてくれる人がいなくてぐっとなるかんじなどもキュッとすることもあるけど読後なにかむねのあたりからあったかくなる感じを毎巻で感じています。

会社員 / 伊藤千恵
- 暖かいおうちに温かいゴハン。友達の家がこんな感じだったら毎週末入り浸ってるだろうな？とユルく読みつつ、でも身近に在りそうでない絶妙な空気感が漫画ならではの、結局は憧れが詰まってる訳です。

中央書店 / 井出 麻悠美
- なんですかね、この読んだあとの多幸福感。どのキャラクターも等身大。乗り合わせた電車の隣で、駅前の駐輪場の精算機の前で、自分もふとすれ違っているような人たち。もちろん自分も誰かにとってはそんななんでもない人であるわけですが、なんでもない自分のなんでもない生活が愛おしくなります。日々いろんなことに追われて見失いがちなものって、足元の砂の中に埋まっててほんとはキラキラしてたんだな。一話一話読むたびにそう思えます。隣りにいる誰かを大事にしたくなる。そして自分が癒やされる。忘れていたけど、それってほんとは当たり前だったのかもしれない。優しさに触れられる。優しさって、思ってたより小さくて手軽で、どこにでもあったんだな、自分で気づけてないだけかもしれないな、なんて思いました。生きていくことって、悪くないじゃん。過去の大賞でも推しましたが、ここにきてまたそれぞれに展開がありぐっとよくなってます。二度目のノミネートも納得です。初めて読む人にも過去触れたことがある人にも今読んでもらいたいなと思います。

公務員 / 宇田川結衣子
- 読んでいくうちに、泣きそうになりました。なつみちゃんのあの気持ち、何か、分かるような気がしました。ハッピーになって欲しいです。

書店員 / 桶谷佳代
- 中央線沿線の文化的風土が濃厚に味わえる作品。

マンガ研究 / ライター / 会田洋
- 登場人物の日常の描写とちょっとした前進でずごくワクワクさせられて、長く読んでいたい作品。

医師 / 岸本 倫太郎
- トム・ハンクスが昔、「悪い人には会ったことがない」と言っていた。やさしいことと、やさしくあろうとすることと、やさしさに応えようとするのは、全部、隣り合っていて、違うこと。この作品に登場する阿佐ヶ谷の人たちは、まったく善人しかいない。やさしくあることに疑いがある人がいない。ただ、どんなにやさしい意図があろうと、実際にやさしくできかどうかは運次第。ときには、やさしくしたいけど今はシャク！ぐらいに思っていたら、自分とはまったく関係ない、自然や縁がそれをかなえてくれたりすることもある。善人しかいないのも、やさしさが叶う

かが運次第なのも、真実ですよ。ひとつのやさしさが、ビリヤードの一つ目の球を撞いたときのように巡り巡って、みーんなポケットに入っちゃえばいいのに、と願いながら読んでいます。きっと、それをかなえてくれる、奇跡のショットがこの物語なのでしょう。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田 尚記

- 今年が最後のチャンスということでおすすめさせて頂きました。ゆるゆるとふわふわとそして人情味があって温かい漫画。主人公の周囲の関わりある登場人物たちが主人公に影響されて、周囲の環境の変化にも影響されて、少しずつ捉え方や考え方、心情が変化していく微妙な部分を丁寧に描いているなあと感じます。決して停滞することなく少しずつでも前に進む主人公たち。疲れている時に、仕事が忙しくて嫌になっちゃった時、自暴自棄になっちゃった時にも読んで欲しい作品。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西 良昌

- じわりじわり、物語は3歩進んで2歩下がり、恋愛ドラマも成長ドラマも急ぎすぎない。その難しそうなきじ加減にうまく転がされて、じれったくも心地いい。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 主人公の優しさが本当に素敵で、読みすすめるほどにこちらまでじんわりと優しい気持ちになります。忙しい日常の中で忘れがちな、本当に大切なものを改めて見つめ直すことのできるような作品です。

会社員 / 小野塚博之

- 主人公ヒロトの存在が波紋のように周りの人たちに影響し、そして影響し合っていく様はとても心地よいです。自分自身までもが、まるでその輪の中に存在しているかのように感じられ、循環していきます。不完全な僕たちがどうやってよりよい関係を築いていくかを指南してくれているかのようでもあり。この時代にこそふさわしい、癒やしと学びを与えてくれる漫画なのでは、と思います。

音楽家・閃き堂店主 / 谷澤智文

- 登場人物たちの日常風景や心情が丁寧に描かれており、心がポカポカする作品です。主人公のヒロトとなつみが人との触れ合いを経て少しずつ考え方や生き方が変わっていき、新刊がいつも待ち遠しいです。

会社員 / 竹本 慧

- この荒んだ世の中にこんなにも優しい世界がある。いろんな出来事に疲れている人、そうでもない人にもお薦めしたい。

あゆみ BOOKS 仙台一番町店 店長 / 土屋修一

- 穏やかで変わらない日常に少しずつ変化が訪れる。それでも時に立ち止まって良いのだと感じるのは、この物語とヒロトくんの心が、愛とやさしさに溢れているからなんだろうなと思いました。日常の愛おしさや豊かさを教えてくれるおすすめ作品です。

デザイナー／シンガーソングライター / 平松新

- やさしいだけでなく、人との交わり方や生き方など主人公とともに色々と感じられる作品で読むだけで心が豊かになります。

ヘアメイク / 北原由梨

- 2次選考にあたり改めて1巻からじっくり読み返しましたが、やっぱり好きです……！ずっとほのぼの、のんびりな雰囲気だったのに、5巻・6巻ではぐっと苦い現実も描かれています。が、そこはヒロトくんの優しさと大らかさに救われました。6巻ラストで、ずっと無為に時間を費やすことに苛立っていたなつみちゃんが、無駄だと思っていることにこそ意味があるのかも、ということに気付いたのが大変良かったです。タイパ重視の世の中だけど、そう、本当に、もっともっと無駄だと思える時間を大切にしていこう。

主婦 / 堀江千秋

- 2年ぶりのノミネートということで、改めて読み返しました。みんなかわいいな、絵が素敵だな、なんて思いながら楽しんでいると、ふとした瞬間にぼろぼろと涙が……私は一体なぜ泣いているんだろう……。日常だなんてそんな言葉では収まりきれない。特別ではない「この瞬間」が、一番大切で、それがあからみんな生きていられる。多くの人に、すべての人に届いてほしい漫画です。

会社員 / 堀尾素子

- それぞれの壁にぶち当たってもがき苦しんだり、いまを思いっきり楽しんだり、ちょっとした偶然にドギマギしたり…。そんな人たちを迎え入れる「平屋」という存在の、なんと懐の深いことか。できることなら、やさしい世界をずっと読んでいたい。

会社員 / 野口忠義

- ノスタルジーを感じるようで現代的な作品。実際にこのような暮らしをしてみたい、と思いながら読みはじめたはずが、登場人物の小さな心情に共感していることに気づく。設定や話の雰囲気だけでなく、その中で描かれたそれぞれの「気持ち」に郷愁を感じながら読んでいくことに気づかされました。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

マンガ大賞2024 ノミネート作品

月刊コミックビーム / KADOKAWA

「ファミレス行こ。」和山やま

選考員コメント・1次選考

- この構成力と描写力。迂遠で細かいギャグの精度の高さ。すばらしいと思う。

マンガ読み / サイトウマサトク

- ついに！待望の！長かった！あのカラオケ行この続き。ちょっぴり成長した2人の変わらないゆるい雰囲気とエモさにまたやみつきに。

ヘアメイク / 北原由梨

- 和山先生 2023 年内に刊行して下さいありがとうございます……！！そもそも続編が出たこと自体が最高にエモいありがとうございます。すれ違いつつも『確認』せずにはいられないその感情の揺れ動き……もうどうしたらいいですかね読者（ファン）は翻弄されっぱなしですどうしたらいいですか和山先生！！本作は前作『カラオケ行こ！』を読んでいないと登場人物同士の関係性が分からないまま読み進めることになるので、この上巻から読むことを躊躇う方もいるかもしれませんが、そこはさすが和山先生。クスッと笑えるパートが随所に挟まっており、そんな方でも気軽に楽しめるのではないかと思います。本編の笑いどころほぼ持っていった北条先生（とそのアシスタント）、アルバイトの先輩、アパートの下の階に住む美人……など、まだまだ謎めく本作が下巻で終わるなんて嘘ですよ……？

フリーランス / 金輪英恵

- 待望のカラオケいこの続編。ファミレスいこ。いこう！いきましょう！色んな人に出逢いに！

カメラマン / 平沼久奈

- あっ 映画化されちゃうんですね。マンガ好きとしては複雑ですが【カラオケ行こ！】の主人公が大学生になって、新たな視点での面白さが。やはり最高です。

株式会社エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部 大介

- 変わらない和山ワールドが楽しめました。思わぬところでの繋がりがお互い知らない間に進んでいってそれを読者だけ知っている感覚が楽しいです。メインの2人の関係が今後どうなっていくのか、とても気になります。

デザイナー / 玉澤綾子

- 『カラオケ行こ！』のまさかの続編でした。血圧低めの会話の冴えはそのまま、さらに今作ではその場に登場するあらゆる情報が、ヘンな形につぎつぎに繋がっていく、ふしぎな伏線回収のスーパーコンボ。舞台上で繰り広げられる極上のコントライブを見ているような感覚に陥りました。電車の中では絶対に読めないことだけが、ただ一つの欠点です。

株式会社ムービック / 岡部 真矢

選考員コメント・2次選考

- 漫画でこんなにも雰囲気を出せるのが凄いなとつくづく感じます。和山先生はどの作品もそうなんですが、個性的なキャラクター、ニヤッとさせる会話の数々、ページから感じる余韻というか余白のようなものから「和山臭」がプンプン匂います。それが本当に凄い事だと思います。それでいて最高に面白いんだから、もう受け流せませんよね。
吉本興業・芸人 / ムーディ勝山
- カラオケの続きがあるとは・・・しかもタイトル変わっているし・・・シチュエーション変わっても・・・やっぱり最高ですねこのマンガ。
株式会社エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部 大介
- 前作から謎のスケールアップを果たし、随所にちりばめられたエピソードが奇妙にもつれて収束していくという、長尺の絶品コントを見ているような感覚になる和山先生の最新作です。そこが繋がるんかい、お前なんかい、とツツコミが口を衝いて出る可能性があるため、電車の中で読むのだけは注意したほうが良い作品です。
株式会社ムービック / 岡部 真矢
- これからが気になる状態で終わっていて、おあずけ状態で、ソワソワしています。あんまり色々言っちゃうと・・・なので、そこもまたソワソワ。
書店員 / 桶谷佳代
- 淡々と交わされる体温の低いやりとりの中にクスッと笑える和山先生特有の隙間がありつつも、不穏な雰囲気が漂い続ける本作『ファミレス行こ。』。前作『カラオケ行こ！』より成長し大人と子どもの狭間で揺れるようになった聡実くんの苛つきと衝動に対して、妙に落ち着き払っているように見える狂児との対比が不自然でもどかしい。私はこの作品が果たして何をテーマにして描きたい作品なのか、現時点で何も分からないというのがこの作品を今推す最大のポイントだと思っています。結末を読んでようやく先生が何を描きたかったのかがやっと分かるのかもしれない。そのくらい先の知れない奥深さがあります。何てったって二人が交流を続けるには障害しかありませんから・・・。前作のように歌の先生と生徒ではない、ましてや親戚でも友達でもない聡実くんと狂児の二人の関係に名前がつく日が来るのだろうか。そっと見守り続けたい所存です。あまりにも結末がどうなるか分からなすぎて、オタク同士で肩寄せ合って1コマ1コマをじっくり見ながら先生の意図を推察し合っているこのムーブメント、凄まじいものがあります。描き方が非常に繊細で曖昧だからこそ、少ないながらもはっきりした事実を『確認』して噛み締めて悶えてしまうんですね・・・恐ろしい・・・。はあ・・・聡実くんの幸せって、なんなんでしょうね・・・。
フリーランス / 金輪英恵
- 読んでいて一番笑ったのは編集者の鈴木さんです。顔は1回も出てきていないのに存在感すごい。読みながらファミレスでご飯食べたくなり、焼き肉にも行きたくなりましたが、最後のあれは、どういう感情にもっていけば良いのか大変悩んでいます。。正直困っています。下巻出るまでお預け辛いです。(楽しみです)
営業 / 佐々木つむぎ
- 毎度個性が強くて、笑かしてきます。カラオケ行こ。も好きでしたが、今回も面白い！登場人物のいろんな過去がわかり、ますます楽しみです。最後、予想していなかったのでキュンとしてしまいました。
バイオリニスト / 佐藤帆乃佳
- 『カラオケ行こ！』の続編だけあって、本作も濃密な1話1話が折り重なっていく和山ワールドを心ゆくまで堪能できます！映画のような和山先生のコマ割りが大好物です！
ロングランプランニング / 小森和博
- セリフや間の取り方のセンスが本当に絶妙！淡々とした会話だけでもめっちゃめや笑えます。思わぬところで繋がっている登場人物同士の関係性が面白く、物語の続きも気になります！「カラオケ行こ！」から地続きな話なのもファンには嬉しいところ。
会社員 / 小野塚博之
- 待ちました！和山ワールド全開であつという間でした。間の取り方が絶妙。
ブックエース上荒川店コミック担当 / 倉本かおり

- 和山先生がファミレスが舞台の作品（しかも「カラオケ行こ！」の続編）を出すと知って、心待ちにしていました。聡美くん、狂児、謎のカタギじゃない2人組の客、マンガ好きの同僚……ストーリーが進むにつれてすべてがゆるっと有機的につながっていく展開は、和山先生の巧さが短編だけではないことに気づかされます。下巻が待ち遠しい！
ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- 小学生から大人まで楽しめるマンガをありがとうございます！岡君のその後描いてくれてありがとうございます！やっぱりジワる。ジワジワきます。

カメラマン / 平沼久奈

- 言わずもがなですがこの作品を嫌いな人はいないのではないかと思います。主人公たちの時間と環境は変わっても心の距離は近付いていってる、なんとも続きが気になる作品。和山先生の織りなす世界は魅力的で繊細でユーモアに溢れていて素敵です。

ヘアメイク / 北原由梨

- すべてのキャラクターの個性が強い！セリフでしか出てこない担当編集者までキャラが立ってる！ただファミレスでバイトしたりマンガ描いたり飯食ったりしてるだけなのに、状況はどんどん面白い方向へ転がっていってる、っていうストーリーが正直すごいなと思います。

会社員 / 林礼春

マンガ大賞 1次選考作品

全作品名・選考員コメント掲載

「愛さないといわれましても ～元魔王の伯爵令嬢は生真面目軍人に餌付けをされて幸せになる～」石野人衣、豆田麦、花染なぎさ

■ただただアビーちゃんが可愛く、それを愛でる漫画。これが父性というものか。

COMIC ZIN 商業誌担当 / 塚本浩司

「愛してるゲームを終わらせたい」堂本裕貴

■本心を隠すために始まったゲームを終わらせたいけど、終われない。早く終われよお～～と、まだまだ終わるなよお～～の気持ちが永遠に交錯するほどじれったい恋愛をする2人ですが、それがまた尊く愛しく感じます。何より登場人物の表情が魅力的で、喜怒哀楽やその間の顔を絶妙に表していて、キャラクターが生きているように感情移入できます。

デザイナー/シンガーソングライター / 平松新

「アカネノネ」矢田恵梨子

■全DTMerや音楽家、夢を目指す全ての人にぶっ刺さる、音楽の夢と挫折、再起の物語。成功者の父を持つ無才の主人公が、幾度となく壁に当たりながら成長する姿が心に響きます。自分も音楽をしていた経験から、作品の様々なシーンに自己投影をしては落ち込み「うぐう」という地鳴りにも似たうめき声を出してしまいます。ちなみに私は出汁推しPがすぎです。

デザイナー/シンガーソングライター / 平松新

「あくたの死に際」竹屋まり子

■往生際の悪さは、生きる熱量そのものだなあ、と。その熱量に魅せられた人達が、せっせと燃料を投下するって大事だと思いました。

教師 / 持丸宏司

■大手企業を休職中の会社員・黒田が学生時代の文芸サークル後輩と再会し、文章への熱を蘇らせ小説家を目指すストーリー。文芸への熱量、焦り、天才への嫉妬など人間臭く悩める姿から目が離せない。「普通」と「狂気」の境界線が曖昧で、日常と憧れの世界がテンポよく切り替わり、グイグイ惹き込まれます。

営業 / 佐々木つむぎ

「悪役令嬢のデレは俺だけにバレている」松尾葉月、Crosis

■乙女ゲーに転生した男子が、悪役令嬢可愛さにヒロインの邪魔をしまくる、テンプレのようであり、男子目線が故により易さが抜群。ギャグ要素強なのにちゃんとごまあ要素や少女漫画要素も抑えているので、割とどの層にもオススメ出来ます。

中央書店 / 井出麻悠美

「悪役令嬢の中の人～断罪された転生者のため嘘つきヒロインに復讐いたします～」白梅ナズナ、まきぶろ、紫真依

■悪役令嬢ものといえば主人公が真ヒロインとして逆転していくお話が多い中で悪役令嬢が主人公で悪役です。こんなわっるい顔で笑う主人公がいますか！（大好きです。）目的は復讐なのですが、その復讐もあるルールにのっとっているだけで全て「悪いこと」ではないのが魅力的。

図案家 / 大橋寛子

「明日の敵と今日の握手を」フクダイクミ、カルロ・ゼン

■二人の作者の頭の中で、これだけ濃密な登場人物と彼らが置かれた状況を生み出せることに感嘆。楽しい外構

往来堂書店 / 三木雄太

「新しいきみへ」三都慎司

■ウルトラジャンプ 2023年11月号で完結。連載開始は新型コロナ禍真っ最中の21年10月号。3年間を「完走」したいま、全6巻を改めて通して読み返さないと、この作品の凄さは分からないかもしれない。魔性の女子高生「相

生垂希」がさえない高校教師の佐久間悟と絡む妖しい雰囲気と、予想死亡者数 50 億人というペストに酷似したパンデミックの急展開が並行する 1 巻は、実は伏線に次ぐ伏線の嵐。6 巻を読み終えた後に初めて、1 巻最後で垂希が漏らす「私…本当に先生が好きなの」という告白の重みが迫ってくる。ぜひたくさんの人に一気に読みしてほしいので多くは説明しないけれど、垂希はパンデミック禍（設定は 2014 年）で、1 人だけ過去の記憶を持ったまま半年間のタイムループを無限に繰り返すという境遇に陥っている。ある存在が仕掛けた災厄の謎を解こうと孤軍奮闘する中で悟に出会うが、悟は前のループの記憶を持ち越さないで「わずかな時間で人類が滅亡間近」という垂希の話信じようとせず、結果的に「失敗」が繰り返される。しかしループを止めるカギを握る悟との協力が欠かせないと考える垂希は、ループを繰り返すうちに限られた時間で悟の信頼を取り付ける術（すべ）を得て、物語は徐々に核心に――。未曾有の大災害の渦中で手に汗握る秒単位の追跡行が展開する中で、10 代と中年という世代差を超えたシンパシーが描かれる。その中で記憶を積み重ねたままひたすら 2014 年 4 月の失敗を繰り返すという孤独なループを繰り返してきた垂希の、絶望に逆らい、次の 2014 年につなぐ一縷の希望と純情が描かれる。物語の終幕、世界が再び動き始めて 10 年後に起こる新しい、そして懐かしい出会いに、世界が続いているという安堵と、人生が続いていくという希望がにじむ。青年誌らしいキュートな女子高生の造形だけどそこにちゃんと血肉と感情が感じられるのも良い。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

「アフターゴッド」江野朱美

- 今いちばん推したい漫画！推し神はもちろんヲロカピ！神は人類の敵として憎むべき相手のはずなのに、読めば読むほど好きになってしまう……

会社員 / 竹本 慧

- 「神（のようなもの）vs 人」みたいな何度もおいしく調理された素材を使って、まだこんなに面白いもの生み出すことができるんですね…。一気に読みしまいました。話が進むたびに判明する事実に絡み合うように新しい謎がうまれ、加速していく感じがたまらないです。残酷な展開ではありますが、ストーリーのコアにあるのは諸刃の剣のような愛情。こんなふうには描けるのか…。改めて読み返してみると、伏線がしょっぱなから散りばめられていてもうたまらないです。緻密な絵とともに楽しんでもらいたいです。

公務員 / 宇田川結衣子

「アフターメルヘン」田島生野

- 誰もが知っている御伽噺のあとのお話し。キラキラした御伽噺のエンディングがあってそのあと、その主人公はどう過ごしているのか。ぞわぞわするダークな展開です。ものがたりを進めていく二人にもミステリーがあり、早く続きが読みたいです。

アニメイト / 鈴木寛子

- おとぎの国の各地で役目を終えたモノを回収するとある兄弟を主人公にした、名作の「めでたしめでたし」の後を描いた作品。あったかもしれない”その後”が描かれる作品は白雪姫やシンデレラなど誰もが知っているものばかり。そのとっつきやすさとは裏腹に、全体的になかなかダーク。誰だって人生は山あり谷あり。どの瞬間も「めでたしめでたし」とはいかない。散りばめられた伏線を下巻でどう回収するかも楽しみな作品。

弁護士 / 田邊幸太郎

「ABURA」獏九三口造、NUMBER8

- 幕末に起きた油小路事件って……知ってた？完全に覚悟を決めた男たちの姿と作画の熱さがすごくマッチしている。さらにさらに事件のその後への影響までをこの巻数でコンパクトにまとめた原作の手腕も見事。

往来堂書店 / 三木雄太

「甘いのは好き？」永田正実

- お菓子作りが得意な女の子と拗らせ編集者との恋愛ストーリー。SNS で出会うのが何とも現代っぽい。永田作品ほどのキャラも愛嬌があって癖が強い！好き！お惣菜パートのおばちゃんたちですらユーモアに描ける漫画技量の安定感がすごいです。ニコニコしながら読めます。主人公も可愛くて好感が持てますし、お菓子もとても美味しそうでした。

営業 / 佐々木つむぎ

「雨がしないこと」オカヤイツミ

- 恋愛をまったくしない主人公と、そんな彼女に何らかの縁がある人物たちの視点それぞれから描かれる不思議な群像劇。作者独特のタッチが醸し出すじんわりとした温度感が心地よい。そして、はっきりと言葉にするのが難しいのだけど「何だか、いいなあ。」といった間にか思わされてしまう、花山雨という主人公の魅力には、ぜひ触れてみてほしい。

会社員 / 伊東敬祐

「暗号学園のいろは」岩崎優次、西尾維新

- 西尾維新流の超絶キャラクター造形術とそれに応えて余りある作画・岩崎優次による群像学園ものとしてまずとんでもなく面白く、張り巡らされた伏線にヒント、そしてキャラ描写の密度が濃すぎて単行本を 10 回読んだ程度じゃ汲み尽くせません。やってることはジャンプ大好きな原作者による王道の（メタ）少年マンガで、学級兵長選抜最終戦の盛り上がりには誰もが魂を焼かれるでしょう。え、そのうえ毎話オリジナル暗号ゲームをやってるんですって？

会社員 / 末永龍介

「あんじゅう」幾花にいろ

- タイプの違う女性二人（先輩・後輩）のルームシェア二人暮らしを定点観測する同居ドラマ。劇的な事はないけれど、それなりに人と人が暮らしている事で起こる交々と筆者独特の画風が相まって強烈な存在感を放っている。昨今一発で「あ、この人だ」という分かる絵の強さを見せてくれた作品

住職兼ライター / 蟬丸 P

「家が好きな人」井田千秋

- これは漫画か？住宅間取りの紹介集か？家でまったりするのが好きな人にはお薦めの一冊。まったり生活の内容と間取りがきれいなイラストで紹介されています。居住者の性格も丁寧に書き込まれたほっこりした人物描写です。人物の絵もきれいな仕上がり。自宅でひとりでゆっくりお茶したくなりますよ。

弁護士・三村小松法律事務所 / 三村量一

「生きてるうちに推してくれ」丹羽庭

- お坊さんと地下アイドル。利害の一致した二人が織りなすお祓いユニットが面白い。二人の掛け合いもさることながら、どこかヲタ心をくすぐるストーリーを是非推してほしい。

主婦 / 碓氷麻里子

「生きとし生ける」長谷川未来

- 12 月に出た 1 巻が出たばかり。北九州市門司港で出会った男 2 人《小説家とアイドル》がくり広げる過去と現代の物語。今すぐにでも実写化できそうな構成力。海の情景の描写は大変美しく、物語も戦中から戦後、現代を違和感なく行き来していて、読後感は純文学のような味わい深さ。

営業 / 佐々木つむぎ

「異郷の爪塗り見習い」まるかわ

- 異世界転生って好きなんだけど、その世界でチート能力持ってるのしあがるよりも、その世界に合わせてどう生きていくかって方が断然興味ある。物語としては世界観の描写が細かい分難しいと思うけど、世界観の作り込みと主人公の逞しさがよく描かれていて好き。

鳥取県立高校教師 / 佐川ゆかり

「いつか死ぬなら絵を売ってから」ぱらり

- 一時期、いわゆる「アート」の業界の本当に末端に関わらせていただいたことがあり、そのポジションの短い期間でさえ何度も日本でアートを一般的なものにすることの難しさを考えさせられたし、金銭に変えていく難しさも目の当たりにしたので、とても面白いテーマだと思いながら読んでいます。

1616屋 / 杉本善徳

- 端的に言えば、養護施設で育った人生に悲観的な主人公の絵の才を見出し、パトロンが着くというサクセスストーリーなのですが、その中で主人公のお金に対する意識が変わっていくこと、落書きだと思っていた自分の絵の価値を半信半疑ながら飲み込み、作品を作ることへの気持ち良さに気付く。自身の過去に対するリベンジとでも思わせるような、主人公の感情の動きが良かったです。

会社員 / 三浦佑樹

「一級建築士矩子の設計思考」鬼ノ仁

- 一級建築士・古川矩子（こがわかなこ）お仕事を描いた技術系漫画。技術屋の酸いも甘いも詰め込まれていてエンジニアとしてはほだされます。私自身は機械屋でやや畑違いですが技術士としてもお勧めします。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

- これって、「設計思考」と「設計施工」のかけ言葉になっているのですね。建築業界を裏事情を含めて描写する作品。業界に関心のある人は必見です。主人公のキャラクターがよく描けています。絵もきれい。

弁護士・三村小松法律事務所 / 三村量一

- 住まいに関する日常ネタを一級建築士でもある作者のたしかな建築知識によりナルホド…と感心するアプローチで問題を解決していく様は今まであまり見たことがなかった作品です。飲兵衛でもある作者なため、お酒のネタも絡めてあり建築のあれやこれやだけではなく美味しいお酒を知るきっかけにもなります。

デザイナー / 高永貞光

- 有資格者の手による専門業漫画の最高峰の一つ。難しい要素を噛み砕き、エンタテインメントに昇華させる手間とスキルはもはや圧巻。リアル建築士の理解に繋がる受験編は読み継がれるべき名作だ。

書評家 / 福井健太

- 作者さんが18禁マンガ家で、同時に一級建築士って、そんなことあり得るんですか?! とんでもない画力で建築が緻密に描かれ、そして他の人には侵すことのできないしっかりしたフェティシズムが、建築とキャラにはもちろん、街、酒、などなど全編に渡って貫き通されている。ただ、この作品から読んだ方はそれを意識することはない。このフェティシズムの貫き方は、どうしても人気を考えなければならないマンガ家さん、という仕事だけでなく、ゴリゴリに手に職がある人だからこそ、他人とは違う地平に立つことが出来て生み出されている作品なのではないだろうか。ご本人、もちろん建物の設計図面が引けるそうで、「密度の高い画面にフェティシズムがあるのかもしれない」とのこと。手に職がある、ということがもたらすのは、自由。その自由をもってして、この作品も自由に生み出して行っていただきたいです。フェチで生まれてるキャラ、超かわいいです。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

- この世界を建築士の視点から見るとどのように見えるかを追体験できて面白いです。建物はデザイン面がフィーチャーされることが多いと思うのですが、このマンガを読むと建物がちよっと違う視点から見れるようになり、建物を見る楽しみが広がるような気がします。また、一級建築士の作者が描く緻密な絵と、お酒の話も魅力です。

Sler・会社員 / 廣瀬 公将

「犬とサンドバッグ」尾崎かおり

- 東京で孤独を味わっていた日子と、双子の弟を失い島で生きづらさを感じていた千真希との年の差の恋。可愛らしい絵で陰を表現しつつ、最後には苦しいことも悲しいことも優しさに包まれて素敵なエンディングでした。尾崎先生 30 周年おめでとうございます！あとかきの通り、これからも尾崎作品と一緒に年を取っていききたいです。

営業 / 佐々木つむぎ

「いやはや熱海くん」田沼朝

- 微妙に周りのいわゆる「普通」から少しだけ浮いてる感じの、下手したら呼吸しにくい感覚を、別にそれでもいいんじゃない？と押すでもなく手を引いてくれるわけでもなく、ただそこで肯定してくれるような優しさを感じる作品。疲れたなあって夜になんとか読み返したくなるようなじんわりとしたあたたかさ！■

元書店員 / 内野智未

- 美形で、毎日のように女の子から告白されて困っている高校生の熱海くんが主人公です。好きになるのは男の人で、惚れっぼい。そんな熱海くんが、足立さん(男)という先輩と出会い、学校生活に変化が訪れます。一つ一つの恋を乗り越えていく過程で、少しずつ成長していく熱海くん。熱海くんの中で起こる、感情の動き。それは決して大きくはないけれど、わずかな変化を自分の中で咀嚼していく熱海くんの姿が丁寧に描かれています。読んでみると、陰から応援したくなるような、見守りたくなるような、そんな気持ちになります。

会社員 / 堀尾素子

- 形にならなくてもそれは嘘じゃなくて全部本物で、そうじゃなきゃいけないなんて事はなく矛盾もせずになり続ける。人間 YES か NO か、どこかで割り切らないと正気でいられないけど、その間に無数の曖昧な答えがあるというのもまた真理だなと考えさせられたり。思春期にしか持て余せない時間、その眩しさやいじらしさが熱海くんの周囲からゆるやかに感じられてとても良い。

フリーランス / 金輪英恵

「ウスズミの果て」岩宗治生

- 荒廃し絶望的な世界が舞台ですが、主人公が出会う人々とのストーリーがじんわりあたたかく心に響いてきてとても素敵な作品です。背景の描き込みも素晴らしい！

会社員 / 竹本 慧

- 退廃した世界を、ゴールの見えない任務を果たすべく 1 人と 1 匹が旅をする。一見して重たく感じる設定ながらも、緻密に描かれた世界、主人公の小夜とクーの表情や、行く先々での発見や出会いのエピソードのそれぞれが、読む側の気持ちを前向きにさせてくれる。その先にどんな光が待っているのか、ぜひとも追いつきたい旅の物語。

会社員 / 伊東敬祐

- 大戦が起こり、病原菌で人生は死滅した。終末世界となった場所で 1 人生存者を探し続ける女性の物語。『火の鳥』のロピタを令和にグレードアップして読んだかのような不思議な感覚のするストーリーだ。基本はそこに映画『アイ・アム・レジェンド』の女性版があると考えてもらったらわかりやすいかも。廃墟がかなり細かく書き込まれており、その美しさも魅力の一つ。

October Beast 代表・デザイナー / 北山友之

- 人類が滅亡した荒廃した街で人類を探す世界観が好きです。荒廃した建物の描写が非常に良いですね。環境に対応した生存者と出会い、仲間が増えてこれからの話しの展開が楽しみです。

デザイナー / 平沼寛史

- 緻密な背景の描き込みにまず心奪われました。そして静寂さをも感じさせるような独特な世界観が最高です。誰もいなくなった世界で、ひとり任務を遂行するため静かに旅をする主人公の姿は美しくすらあるように感じました。今後の物語の展開が楽しみです！

会社員 / 小野塚博之

■ いやーすごい作品出てきた…。今までの口調じゃあ書かれねえ…。あまりにも深い人間の業。しゅうまつがやってきたあとの世界。人が生きた痕跡は醜い争いだったり確固たる信念で、人と世界の在り方を深く考えさせられる作品。つくづく人間は「人間病」なんだなあと思う。自分が世界に何を遺すか、遺せるか、人類は何を遺すべきなのか。何が遺るのか。今生きる私たちが抱えている問題。終末後の世界には国境なんて何の意味も無いし、現代人が囚われてる組織、責任、肩書きなんてものも意味を持たない。描かれる世界はただただ空虚で残酷で自由だ。…それにしてもちょっと画力高すぎやしませんかね？小夜ちゃんになりたいかって言われると私には難しいかな、シネマの館長をお願いします（懇願）自分だったら活動停止する時までマンガとアニメとゲームを見まくるんだろうなあ。でも行き詰まる？息が詰まる？そう考えると使命って人を生かす重要な要素なのかもしれない。今さかに行われている AI 開発や高性能ロボットの行き着く先は、もしかしたら人類文明の存続なのかもね。

会社員 / 布施直人

「生まれ変わるなら犬がいい」堤葎子

■ ファンタジックですこしレトロなタッチで描かれる愛のお話し。こういうお話が大好きな私にとってこの物語に出会えたことはもう運命なのかも知れない。

女優 / 齋藤明里

「うるわしの宵の月」やまもり三香

■ カッコいいけど、かわいい宵ちゃんが市村先輩との関係を少しずつ進展させていくのに焦ったさやモヤッとしたりしますが、そういう部分を期待して読んでいます。

販売員 / 八重田幸子

「エクソシストを墮とせない」フカヤマますく、有馬あるま

■ 主人公が自分を受けとめて生き始めることに共感する

ツクリビト / 小野裕子

「エロスの種子」もんでんあきこ

■ とても官能的な作品ですが、ただエロいだけではなく、戦前戦後の日本の在り方、そして女性の「性」と「生」について丁寧に描写されています。基本的に短編ですが作品全体を通して描かれているストーリーもあり、展開に惹き込まれます。

会社員 / 畑中 瀨路奈

「ENDO」ペッペ

■ 第二次世界大戦中、日本とイタリアの西上の変化によってある日突然“敵国人”となってしまったイタリア人とその家族のリアルを描く。実際にあった出来事を基にしたフィクションとのことであるが、これでもかとヒリヒリする不条理を見せつけられ、今の日常のありがたみに気付かされる。絵のタッチも不気味な雰囲気醸し出すのに一役買っている。続きを目の当たりにしないとイケない、そんな気持ちにさせる力作。

弁護士 / 田邊幸太郎

「王様の耳」えすとえむ

■ 客が打ち明ける秘密を買い取る不思議なバーが舞台のオムニバス作品。人間ではない（よね？）店主と、アルバイトの青年や常連客などの登場人物とのエピソードと、回を重ねるごとに様々なピースが少しずつはまっていて、作品の本筋に迫る全体像が見え始めたところ。重低音でじんわりと響くような不気味さが好きです。映像化しても面白そう！

元書店員 / 内野智未

「OHMYGOD」反田背骨

- アブない設定でんこもりの魅力的な世界観。繰り返し読み返して楽しめる絵の密度。シリアスな話の中で垣間見える温かい人間模様。一次審査の締切週に、お友達でもある審査員さんの投稿で知ったマンガ。某食通おじさんよろしく、このタイミングでなんちゅうもんを読ませてくれたんや・・・と99%の感謝と1%の恨みを込めて、ポストアポカリプス好きに全力でオススメさせていただきたいマンガです。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- 処女作初連載でこの絵の感じ。私が初めて「ドロヘドロ」や「ファイアパンチ」に出会った時に受けた衝撃と同じ感覚を得た。ストーリーの冒頭は、一瞬よくある展開かと思うのだが、すぐにそれがオリジナリティにあふれた世界観だとわかる。主人公の魅力や過去のエピソードの奥行きもあり、先が気になるミステリー要素や、人間同士の付き合いや心の交流などもしっかり描かれ、惹きこまれた。3巻の表紙もすばらしくカッコよくて、それを見て一気に1-3巻を買い、買ってよかったと心から思った。

クラスター広報 / 西尾美里

「音街レコード」毛塚了一郎

- レコード屋と書店は似ているかもしれない。電子の波に流され、すでにその存在はなくなりつつある。でもそんな尊い存在だからこそ愛おしく思える。同作家の同じレコード、音楽マンガ「音盤紀行」の宣伝ポスターの文句が秀逸で、本作にも通じます。「レコード1枚130g、CD1枚16g、配信0g。重みの中に思いが宿る。」

COMIC ZIN 商業誌担当 / 塚本浩司

「おひとりさまホテル」マキヒロチ、まる

- クラシックホテル、リノベーションホテル、アートホテルなど自分の好きな形式のホテルが1冊に幾つかある！この前、その中のひとつのホテルの系列に行ってみたのですが高過ぎて断念。ただ、夜のディナーだけそのホテルが経営しているレストランで摂ることにしました。ひとりで行ったのですが、そこに居合わせたもう一人のお客様とスタッフの方とお話しが盛り上がり、このマンガを見てお伺いしたのです。と伝えると、そういうお客様が結構いらっしゃいます。と言われました。マンガを読んで、訪れる同士が居るのかと大変嬉しく思いました。日本の魅力あるホテルを沢山紹介いただけるので行きたいな～。行ったら何しようと思っただけで楽しいです！

アニメイト / 鈴木寛子

「俺達ノ秘メ事」潮見知佳

- 強面すぎる四代目は入院中の親父にまで心配される怖い顔とは裏腹に「ヤクザだけど友だちがほしい！」んです。その心の声のギャップがかわいくて面白すぎます。いつも素敵ないケメンを描かれる作家さんなのですが、イケメンでこんなコメディが読めてうれしい！

主婦 / 紺野泉

「俺の死亡フラグが留まる場所を知らない」乙須ミツヤ、泉、Aちき

- ゲームと同じ世界に転生するも、主人公のキャラクターは非業の運命を抱えていた。自分がいる世界とその先の行く末を知るチート的な条件がありながらも、苦難の道を歩まなければならない主人公。修羅と孤独の道を選ばなければならないことが多く胸が締め付けられますが、彼の信念と覚悟を持つ姿、苛烈な言葉の本当の意図を察して、次第に彼を支える仲間が増えていく様に、読者である自分も主人公の未来を応援したくなります。

デザイナー/シンガーソングライター / 平松新

「開花アパートメント」飴石

- 時代背景が凄く好んで、話の雰囲気もとても好みます。映画館で動画を見たいなあ、、、と思います。

書店員 / 桶谷佳代

- 訳あり者達が住むアパートメントを舞台に、それぞれの人生を垣間見る感じがグッとくる。雰囲気抜群の作風で、ストーリーもどンドン広がるところに、また次巻！楽しみにしてます。

主婦 / 碓氷麻里子

「街道あるくんです」猪乙くろ、竹本真

- 現在の東海道を江戸時代の風景を偲びつつ歩く、「プラタモリ」好きにはたまらない作品。江戸時代に亡くなった幽霊を通すと幽霊が生きていた江戸時代当時の風景が見える、またその幽霊が記憶をなくしているが、東海道を何か思い残しがあり成仏できないらしく、その理由を探していくといったストーリー要素もあり、歴史好きではない読者も続きが気になる展開で考えられている。あちこちに史跡や記念碑・案内パネルなどが溢れていることに改めて気付かされ、歴史が身近になります。

丸善ジュンク堂書店 営業本部 / 小磯洋

「ガクサン」佐原実波

- 参考書をテーマにした漫画なのだが、もちろん参考書の使い方や、学習の仕方、等は、子を持つ方々に是非勧めたい！それだけでは無い、ヒューマンヒストリーも、ドラマ化しても良いぐらいと、思うけど、色々しがらみあってし無さそうだから、漫画で是非に読んで欲しい！

tetote 代表 / カ丸 真

- 今更ながらに勉強の仕方として目から鱗です。学生の頃は1日でも早く勉強から解放されたかった思い出しかありませんが、大人になってからの勉強の方がめちゃくちゃ大変ですよ… 受験生や学生だけでなく、大人の私も勉強になりますっ！

株式会社エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部 大介

「描くなるうえは」蒲夕二、高畑弓

- マンガ家志望のオタク少年と、同じくマンガ家志望のギャル。ラブコメを題材にした作品がいろいろありますが、格差？とマンガをテーマに加えることで、これほど生き生きするとは……。二人の距離感、プロへの道……という二つの軸がうまくかみ合って誰にもおすすめです。

サブカルライター / 河村鳴紘

- 漫画家志望の少年とギャルという相容れないように見える属性の2人が近づいて織りなす青春模様を描いたラブコメディ。『これ描いて死ぬ』にも描かれた漫画を描く苦しさと感じさせつつ、閉じこもらないで外にむかって繋がることの喜びも教えてくれる。漫画を描けばギャルが来るならあなたもさあ、漫画を描くのだ。

書評家/ライター / タニグチリウイチ

「かさねと昴」山田金鉄

- 思いもよらぬ出会いから始まる女装男子とのラブストーリー。ニマニマしながら二人の恋の行方を是非見守りたい作品です。

主婦 / 碓氷麻里子

「彼女のそれにやられてる」大海たび

- 性癖破壊マンガ。このマンガは子供には読ませてもらえないと思う (;^ω^;) なぜなら性癖が捻じ曲がるからだ。いい年した自分でさえも新たな扉を開いてしまった気がする。恐ろしいマンガだ。

COMIC ZIN 商業誌担当 / 塚本浩司

「かみまち」今日マチ子

- 一晩の雨風をしのぐ部屋を提供してくれる「神」をただひたすらSNSで待つ家出少女たちのリアルを描く上下編。娘への愛情の名の下にモンスターのよう拘束してくるママから逃げるため。愛情が足りないママが連れ込む男の汚れた手から逃げるため。などなど「かみまち=神待ち」の境地に至る十代女性の理由はそれぞれながら、しかし、そうするしか生きていけない、ほかに生き延びるよすががない彼女たちはたどり着くべくしてそこにたどり着いた。神などと言ってみたとこで実態は欲望をギラつかせて彼女らを搾取しようとする、世代を問わず薄汚いただの男だ。だから「神」という言葉はそんな男たちの本当の顔を糊塗しているというわけではもちろんなく、「救いの神などこの世にいない」という彼女らの皮肉だし、自らの境遇に向けた絶望の表現だ。つまり呪詛。ただの男性読者

である私は読み進めながら、彼女らに居場所を提供することさえしない無関心極まる日本社会について憤って見たところで、「で、そういうことを思うあんた、自分はどうかのさ？」という問いかけとたびたび向き合わざるを得ない。読んでいてとてもつらい。作者自身も後書きで「とにかく気分が塞ぎがちだった。でもやめる気もなかった」と書いている。社会に対する冷たい怒りを感じる一作。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

「かわいすぎる人よ！」綿野マイコ

■「かわいい」って見た目にまず目がいってしまうが、このマンガを読むと「かわいい」は「愛おしい」だなんて納得する漫画。地味な少女・メイとキレイな叔父さんとのほっこりする日常。メイの幸せそうな雰囲気から、こっちも幸せをもらえるととても愛おしくかわいい。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

「気になってる人が男じゃなかった」新井すみこ

■みつきとあやの女の子同士の友達以上恋愛？未満な関係が甘酸っぱくて、キュンキュンする。コマ割りや画角が良く、より一層キャラの表情や感情を引き立てている。

元 SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

「きみは謎解きのマシェリ」糸なつみ

■時代は昭和初期。女性がまだ職業に就くには大変な時代に奮闘する女性探偵の物語です。そこまで手の込んだ謎解きではないのでライトに楽しめます。描かれている時代感や、昭和モダンなファッションがひたすらに良いです。

会社員 / 伊藤千恵

■昭和初期の物語なのに、そこで描かれる人の想いや悩みは令和に生きる私たちに通じるものばかりです。グッとくる表情の描き方も素敵。

女優 / 齋藤明里

「ギュゲスのふたり - 透明な能力者たちの破滅譚 -」カトウタカヒロ

■癖になり、先が気になる面白さ

会社員 / 齋藤隼

「今日、駅で見た可愛い女の子。」さかなこうじ

■懐かしさと共感で読んでいて楽しすぎる。登場人物とみんなでわいわい語り合っているような感覚になりました。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

「凶乱令嬢ニア・リストン 病弱令嬢に転生した神殺しの武人の華麗なる無双録」古代甲、南野海風、磁石

■つい最近読んでしまいました。非常に胸躍る「転生」作品。病弱幼女に転生した大英雄が第二の人生エンジョイします。文字にすると「普通」な感じになっちゃうな、違う、そうじゃないんだ。強い女の子、賢い女の子、王道少年マンガが大好きな読者のみんなはぜひともご一読くださいまし！

NIC リテールズ(株) / 池本 美和

「キラキラとギラギラ」嵐田佐和子

■ギラギラした劇画の世界でキラキラ少女漫画のルルちゃんががんばってます！説明の意味がわからなかったらぜひ読んでほしい、何も考えず楽しめます。

主婦 / 紺野泉

「霧尾ファンクラブ」地球のお魚ぽんちゃん

■同じ男子生徒「霧尾くん」のことを好きになってしまった女子2人のエスカレートする愛を描くコメディ。思春期にどち狂ってしまうのは、男子だけでなく女子も同じと実感。散りばめられた伏線の回収も楽しい。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- 女子高生 2 人が同じクラスの「霧尾くん」に夢中になり、彼を巡る奇妙で笑える日常を描く一方通行ラブコメディ。漂う不穏さとシュールなギャグの絶妙なバランスに時に爆笑し、時に謎の感動を覚えたりもします。とにかく作者の感性、センスが素晴らしいのでこのまま笑わせて欲しい。これからも頑張れそうです。

会社員 / 三浦佑樹

「キルアオ」藤巻忠俊

- コナンみたいな作品って言うのが失礼かもですが、ザ・少年誌ってかんじで面白いと思います

tetote 代表 / カ丸 真

「クジマ歌えば家ほろろ」紺野アキラ

- 鳥？のクジマの居候ライフ。ホームドラマ？ホームコメディ？どどんクジマが馴染んで行くのが不自然じゃないのが不自然 w

元 SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

- 兄の受験失敗でぐしゃくする家庭にやってきたのは、謎の生物（鳥？）クジマ。突然やってきた異種生物との生活は「ドラえもん」などから続くおなじみの設定ですが、本作は家族のあり方に現代らしさが加わっていて、あらたな魅力を感じます。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- ここ 2 年くらいで 1 番人に薦めたマンガ！まず本屋で見つけて、この表紙は気になるでしょ。久しぶりにジャケ買いしました。ロシアから日本にやって来た喋る渡り鳥？のクジマは、本当は虫とか食べて生活もできるけどせっかくなら日本食が食べたくて自販機の下に落ちて小銭を集めていたところ、新しく出会います。そのまま新しく家に居候することになり、納豆食べたり季節イベントやったり楽しく過ごします。たまにロシア語でキレられるけど。とにかく絶対面白いから今すぐ読んで！

声優 / 富岡美沙子

「クジャクのダンス、誰が見た？」浅見理都

- 読んでいて登場人物全員を信用できなくなってくるような、クライムサスペンスです。真相が早く知りたくなります！

主婦 / 岸本しのぶ

「黒博物館 三日月よ、怪物と踊れ」藤田和日郎

- これは怪物が人となる物語。戦う女性たちの姿は、美しくもカッコいい。すべてが終わった後、パーシーが頑張った話も読みたい。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

- 元より藤田先生の描かれる女性像が大好きで憧れで、その『女性』を主人公に、あらゆる『醜さ』に打ち勝とうとする姿をこの令和の時代に青年誌で描かれた事それ自体に意義を感じてしまいました。すごい漫画です。

フリーランス / 金輪英恵

「劇光仮面」山口貴由

- こんなに格好よくも精神を揺さぶられる作品には久しぶりに出会いました。物語はヒーローもののアクタースーツを作る大学サークルの人間たちが、社会人になって先輩の葬儀で久しぶりに集まるところから始まります。サークルメンバーは大人になって社会に適応する中、主人公だけが表面上では繕いつつも内面は全く社会と隔絶して生きています。ただの厨二病という現代的なカテゴリーではなく、主人公の思考や行動には信仰に近い信念があり、自分と社会のギリギリのところで苦しみもがきながらも、ある種達観した思想が持っていて、それを今もアップデートしながら何とか生活しています。ヒーローと怪人。現実には存在しないモノの魅力、魔力に見せられた主人公が、現代社会における価値観とのギャップから、徐々に心身ともに綻んでいく物語、と想像していたら…もうとにかく 4 巻まで読んでください。もうやばいっす。自分が人生で読んだ漫画の中で一気にトップ 10 に入りました。

バーテンダー / 村井真也

■ 信念がどこまでも純粋で狂気じみても美しく感じてしまう。

PENICILLIN / HAKUEI

■ 2023 年は『シン・仮面ライダー』も公開されたし、まずはこれか。そういえば山口貴由の描いてきたマンガの主題は「何かをまとめて／被って戦う者」だったな、と。その中心ド真ん中をまたも、またも、またも描こうとする。例えば日本刀のような、それをふるえば間違いなく致命に至る何事かをぞろりと扱う空気感／緊張感がすごい。

ソフトウェアエンジニア / 第3齋藤

■ 「どこまでがリアルでどこからがファンタジーなのか、その境目が侵されていく。やばい漫画が生まれてしまった。」と書いたのは昨年コメントでしたが、毎年違う作品をと思っているものの、ふたたびあげざるをえません。フィクションだからこそ追求されるべきリアリティ、そしてフィクションの中にこそ光るリアルというのがひとつのテーマかと思っていたんだけど、2023 年の物語はより複雑に、リアルのリアリティのなさよ！さらにやばく展開していったよ。

教員 / 戸田穰

■ 四巻でついに「本物」が！と話題ではありますが、この物語の肝は「非常時のヒーローとは平時の狂人」なのであって、第一話からずっと本番なのです。彼は言っています。あなたはもっと信じていい、いや、信じていることをもう隠さなくていいんだと。

会社員 / 末永龍介

■ 特撮好きな方にはたまらない単語やシチュエーションが盛り盛りな、山口節全開なヒーロー漫画です。山口先生の描くヒーローは色気と覚悟があって素敵ですね！話がまだ謎だらけなので。これからどうなるのか気になります！

主婦 / 岸本しのぶ

「げこの酒道」二宮ゆうこ

■ お酒大好きな女の子に恋をしたお酒が飲めない主人公が、お酒の勉強をするお話。指南役の女将のキャラが濃い！女将を通して「お酒は美味しい！！お酒って素晴らしい！！」というパッションが伝わってきました。外食で料理とお酒の組み合わせも気軽に試せそうですし、紹介された料理のレシピも作ってみたいと思いました。飲めない主人公が真面目にあらゆる種類のお酒のうんちくを学んでいくのでとても勉強になります。

営業 / 佐々木つむぎ

「煙たい話」林史也

■ 同級生だった 2 人が、大人になって同居生活を始めるお話です。特別仲が良かったわけではなく、恋愛感情でも無い。友達と一言で片づけるのも違う、言葉では説明できない関係性の 2 人。それぞれが自分の生活を送る中で、自分の感情と向き合い、自分を理解し、相手を受け入れていく。繊細で柔らかな絵柄と、チクリと刺さる内容のアンバランスさがとても良いです。読んだ後ほんのりと残るほろ苦さが、何故か心地よく感じます。

会社員 / 堀尾素子

「煙と蜜」長蔵ヒロコ

■ 大正の純愛譚。ゆっくり丁寧に流れる季節が描かれています。姫子が可愛くての成長を見守っている気持ちです。文治さまの大人な魅力もたまらなく素敵です。

主婦 / 紺野泉

■ 大正 5 年の名古屋。12 歳の姫子と年の離れた許嫁で陸軍軍人の土屋文治の、その日常の物語。物語もさることながら、その日常の細やかな描写がとにかく素敵すぎます。悪天候のときのこと、女中さんたちのお仕事、そのころの名古屋、そしてときに陸軍のこと。ただそれを見守るといっていいかな作品です。

弁護士 / 三葛敦志

「獣上司に実は認められていた話」しろいぬ

■ 新刊も胸あったか～～で泣けました。もがき苦しみながらも戦い、寄り添い、心が近づいていくキャラクター達をこれからも見守っていきたいです。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

「恋せよまやかし天使ども」卯月ココ

■「少女」の感覚からはだいぶ遠ざかってしまったおばさんですが、久しぶりに少女漫画を読んでときめきました！絵が圧倒的に素敵！髪の毛の美しい線にうっとり。キャラクターの豊かな表情にも心をつかまれ、あっという間に虜になりました。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

■学校では完璧美少女、完璧男子を演じてるふたりのカッコいいギャップにやられました！可愛い顔も悪い顔も好き！

主婦 / 紺野泉

「恋人以上友人未満」yatoyato

■元AV女優の宮子がお見合いした相手は、かつて共演したワイルド男優。最初は偽装お付き合いのつもりが、、、という王道ラブコメ(なのか?)。スタート地点はともかく、少しずつ距離が縮まったり離れたり。出オチかと思いきや、そうでもなく。そこは読んでのお楽しみ。事情を知らない周囲の人々とのドタバタも心地よいです。

弁護士 / 三葛敦志

「高度に発達した医学は魔法と区別がつかない」瀧下信英、津田彷徨

■お医者さんがファンタジー世界に転移したらというif話架空の存在に現代医療を施すというお話はフィクションとして面白い原作者が医者でもあるため、細かな描写にリアリティがあります。またそれを支える作画担当の絵もうまく非常に引き込まれます。

デザイナー / 高永貞光

「コーポ・ア・コーポ」岩浪れんじ

■大阪の貧しいシェアハウスというべきか、共同住宅というべきか、令和の今にもあるのかもしれない、濃厚に昭和の臭いの立つ物語。それぞれにけっこうキツイ背景を抱えてんねんけど、そんなワルになるわけでもないし、賢いわけでもないねんけど、生まれてきたんやから生きていかなきゃあないし、実際かなりつらいこともあったけど生きていくんやろなっていうのを、おだやかに、はげますでもなく、描いてくれて、人生ってそんなもんなんやろなという気持ちにさせてくれる漫画。全6巻完結です。

教員 / 戸田穠

「氷の城壁」阿賀沢紅茶

■正反対な君と僕から入ったけどいや前作もすごい…名言が多すぎる…。「誰といる時の自分が好き?」とか「1人で人を嫌いになれない人達と関わる必要ある?」とか、思春期の人間関係に悩んでいた昔の自分に言ってやりたい。もっと早くこの言葉に出会いたかった。もしかしたらモラトリアム終わった人にこそ刺さるのかもしれないね。縦読みのさあ…平行線にさあ…角度が付いてくるの……………いいよね…ッ

会社員 / 布施直人

■相手を「傷つけた」のではなく「傷つけにいった」…など、自分のみにくい気持ちに向き合う登場人物たちの姿がずっと美しく、ずっと胸が苦しい。人間は多面的で、いろいろな考えの人がいて、でも主人公のいうように<感情のある同じ人間>で…だからきつとわかりあえる!という希望を見せてくれます。連載中の『正反対な君と僕』(こちらら大好き!)と通底するものがありますが、よりヒリヒリして生々しい輝きのある本作を推したいです(祝単行本化!)

ライター / 門倉紫麻

■これまた、いわゆる青春群像劇というやつです。ただ、マンガでそういったものを読むと「無い無い!」みたいなものに憧れたりする感覚になるものが多い中、この作品は「あるある(あったあった)」が多いので、なんか甘酸っぱさ以上に息苦しさを感じられて、隠の者として読みやすいです。

1616 屋 / 杉本善徳

「ここは今から倫理です。」雨瀬シオリ

- 生徒たちの今の悩み、大人になっても見つからない答え、学ばねば成長は無いが、学んだところでまた大きな壁にぶつかる。先生と生徒という舞台装置を使って人と人の壮大な対話を描いてる今作は巻を進めるごとに熱く深くなっていく。素晴らしい作品だと思いました！

OKAMOTO' S / オカモトショウ

「午後のあくび」コマツシンヤ

- もの凄く可愛くて、もの凄く素敵で、ワクワクが止まりません。この世界に入り込んでみたい。夜の図書館が素敵すぎます。しびれます。同僚が猫になる話、好きです。エスカレーターの話や、空を飛ぶ話が、あり得ない経験なんだけれど、感覚が分かる気がして、(多分、私は夢の中で見ているんだな、きっと、と思いました。) 不思議な感覚でした。また、次のお話を、凄く楽しみにしています。

書店員 / 桶谷佳代

- 少し不思議なショートショート。停電の夜に懐中電灯をつけたら、まるで深海のように光の魚たちが部屋を泳ぎ出した。これは”海中”電灯。若草色の万年筆で文字を書き、日光に当てるとその文字が本物のお花に！(複雑な字ほど花びらの多いお花になります。) 金平糖を入れると星の光の音が聴こえてくる古い電信柱。そんな不思議が漫画の中から溢れてきて、私の毎日もちょっと素敵になる気がします。私も主人公のあわこさんのマネをして、若草色のペンで手紙を書いてみたり、知らない町で「この町の住人です」という顔をして初めて入る本屋で漫画を買ってみたり、水たまりの中の世界を覗き込んだり、夏の音に耳をかたむけたりしました。あわこさんも本が好きで、自宅でコーヒーを飲みながら、屋上で暖かな日の光を浴びながら、カフェでひと息つきながら、雨音を聞きながら、本を読んでいます。ぜひそんな風にのんびりとこの漫画を読んでください。あなたの毎日もちょっぴり素敵になりますように。

声優 / 富岡美沙子

「こっち向いてよ向井くん」ねむようこ

- 憎めない・憎めない主人公です。読んでいるといろんな人に共感しちゃいます。人間臭い漫画です。

バイオリニスト / 佐藤帆乃佳

「言葉の獣」鯨庭

- 言葉で伝えるという意味と言葉本来が持つ意味をあらためて考えさせられる作品。SNS やニュースなどで言葉が意図せず届く時代に、心のお守りのような作品だと思います。

マネージャー / 樋口健

- 言葉を掘り下げていく判りやすいように獣の形をしてその特徴で、言葉を理解する。初めての体験で、ときどきします。短編でひとつの言葉を掘り下げていくのですが最後にふたりが言う「言葉」の内容が「なるほど〜！」となり、気持ちよいです。

アニメイト / 鈴木寛子

「この世は戦う価値がある」こだまはつみ

- 極端なストーリー。だけど、そこが際立って興味を駆り立てられ、社会の中で自分では確立したつもりの価値観を、ふと見直してしまう。そんな作品です。

広告会社 プランナー / 平沼良章

「転がる女と恋の沼」芥文絵

- 「アイドルオタクの葉が出会った爆イケ男子(一般人)。彼は爆イケのあまり私生活を追い回される苦労を抱えていた。そんなある日、彼のストーカーと出くわしてしまった葉は…！？どんなにやべえ奴も葉と出会うと全員良い子になるものすごい才能を持つヒロイン爆誕！1巻ラストで急に三角関係はじまるよー☆」というPOPを作って積み展開しました。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

「転がる姉弟」森つぶみ

■ どういう感情なのかわからないのですが、笑いながらぼろぼろ涙が出てきます。読み終わると心がスッキリする。サウナみたいな作品。

マネージャー / 樋口健

■ 凄くあったかくて懐かしい物語。

書店員 / 渋谷 孝

■ 血の繋がってないきょうだいが段々とお互いを家族と思える過程が丁寧に心温まる一冊。読んだ後、幸せな気持ちになり身の回りに優しくなれます。

ヘアメイク / 北原由梨

「殺し屋の推し」大島琳太郎

■ 伝説の殺し屋が足を洗い一般社会へ戻るジャンルで今いちばん面白いのはこのアイドル推し活！さすが元伝説の殺し屋、身のこなし方が一般的な推し活とは違う…！地下アイドルの描き方も丁寧に、あるあるネタや用語にも詳しくなれます！

会社員 / 竹本 慧

「婚約者は溺愛のふり」仲野えみこ

■ 胸キュンラブコメ最高～！新刊を歯医者者の待ち時間に読んでいたのですが、泣けるシーンも多くてちょっと大変でした。(半ベソで診察室へ～)

金海堂イオン準人国分店コミック担当 / 園田美智子

「THE GAMESTERS -ザ・ゲームスターズ-」オノ・ナツメ

■ 「思ったことと逆の行動を取らせる」高級マンションのドアマン・ハワードと、「相手のウソを見破れる」偏屈老人・グラント。バッチバチに顔の良い超能力中高年二人のパディが、能力と老練な経験をもって様々な問題を解決していく、サスペンスタッチの物語です。アダルティな色気に満ちた、軽妙洒脱な掛け合いを味わいながら、ひりつく緊張感のある展開を楽しめます。

株式会社ムービック / 岡部 真矢

「ザシス」森田まさのり

■ 怖さの描写が秀逸。動作の機微を描くタイミングが絶妙な森田先生のサスペンス、面白いに決まってる！

医師 / 岸本 倫太郎

「雑用付与術師が自分の最強に気付くまで」アラカワシン、戸倉儂、白井鋭利

■ 「設定構築しっかりマンガ大好き」マンにはたまらんファンタジー作品。好きすぎる。自己肯定低すぎ主人公が実はめっちゃくちゃ強い、よくあるタイプのなるう系と思いきや…。「強さ」にきちんと理屈があるタイプの漫画、好感度 1000% !!! 皆様ともわかちあいたい！

NIC リテールズ(株) / 池本 美和

「散歩する女の子」スマ見

■ みうらじゅんさん、赤瀬川原平さん、能町みね子さん、木下直之さんのようなマニアック散歩界の新星です。ふだん通る道や目にするものも、視点を変えれば楽しみ方は無限大。退屈に彩りを添えてくれます。

会社員 / 野口忠義

「じいさんばあさん若返る」新挑限

■ タイトルそのまま。おじいさんとおばあさんが若返ります(笑)ですが、ほっこりがとまりません。長年連れ添った二人が若返ったら、ただのカップルではないのでヤキモチや久しぶりのときめきを見るたび素直にキュンとします。超人的な能力(?)をもっていたりギャグも面白いです。ずっと長生きしてほしい・・・。

図案家 / 大橋寛子

「J⇔M ジェイエム」大武政夫

- 殺し屋のおじさん・純一 (J) と女子小学生・恵 (M) の入れ替わり日常モノ。設定を聞くだけでも大変楽しいです。まともな教育を受けないまま殺し屋になり、ハードボイルドに憧れた生活を送ってきた J の微妙な阿呆さ。学校でいじめられ、ママの厳しい教育を受けてきたが故の M の妙な賢さ。絶妙なバランスで繰り広げられる会話と、醍醐味であるシュールな絵面が相まってクスッと笑いを誘います。みるみるうちに力関係が J < M になり、おじさん姿の女子小学生の尻に敷かれる女子小学生姿のおじさんの図が出来上がり、ああこれこれこの感じ…と大好きな『ヒナまつり』を彷彿させる展開に思わず笑みがこぼれました。女子小学生の姿で殺し屋を続け、ママの厳しさにも耐え、勉強も頑張り、学校でのイジメにも立ち向かう、明らかにハードモードな人生を送ることになった J が報われる日が来るといいですね。これから 2 人の生活と関係がどのように進み、変わっていくのか、続きが楽しみです。
会社員 / 堀尾素子

「JK ハルは異世界で娼婦になった」山田 J 太、平鳥コウ

- 全 7 巻で完結。1 巻の表紙が綺麗だなという軽いきっかけで読み始めたのですが、女性の生き方について考えさせられる描写が多々あり、自分の心に深く刻まれる作品になりました。どんな困難に見舞われても自分の意思と知恵で強く生きていくハルの姿に何度も涙し、絶対に幸せになって欲しいと願わずにいられませんでした。物語に「これ」という結末が無い終わり方だったのも良かったです。ハルの人生はこれからも続くのだから。
伊吉書院 類家店 / 中村深雪

「塩田先生と雨井ちゃん」なかとかくみこ

- 久しぶりに新刊が出たので！新刊も可愛くておもしろい！数ページめくって髪の毛がつんつんに爆発している寝起きのヒロインを見てこれだ…これがこの漫画の神髄…と思いました(?)今回はまりあちゃんと友情ストーリーもとてもよかったです。泣けました。
金海堂イオン準人国分店コミック担当 / 園田美智子

「四十九日のお終いに 田沼朝作品集」田沼朝

- ありそうでなかった空気感。日常を綴った短編集ですが、どの作品も会話のテンポが気持ちよく、キャラクターひとりひとりの描写が事細かに描かれているわけではないのにそれぞれの人となりが見えてくるような奥行きを感じます。短いお話のなかにあるキャラ同士のコミュニケーションが、描かれていないそれまでとこれからの時間が見えてくるような自然さ。うますぎる。。久々に人との出会っていいなって思えました。日々の心のささくれが癒えていくような居心地の良いマンガ。同時期に出ている連載作品と悩みましたが、こちらを推したいです。
公務員 / 宇田川結衣子

「司書正」丸山薫

- フラッシュアニメを制作されていた頃から、丸山さんの作品が大好きです。前作、『ストレニユアス・ライフ』『事件記者トトコ!』はふふっと笑えるコメディな場面も多かったのですが、今回は本格的な SF 大河、しかも陰謀渦巻く後宮ものというシリアスで、これまでとは一味違う面白さにわくわくします。ヒロインのキビが優しく澁刺とした少女であること、翡翠、瑪瑙、月桃、仙丹花と、綺麗な言葉が散りばめられていることで、暗く重いテーマでありながら、美しく幻想的な物語のように思えます。どうかキビと司書正の彼が不幸な目に遭いせんようにと願いつつ、今後の展開が楽しみです。
主婦 / 堀江千秋

「自転車屋さんの高橋くん」松虫あられ

- 高橋くんとパン子のやさしさ溢れる 2 人の関係性をずっと見つめていたい作品。ただ、ほのぼのとした物語ではなく不器用な人たちが不器用なりに前に進もうとする姿に心打たれます。
女優 / 齋藤明里
- 巻が進むにつれて、展開が気になります。ともちゃんのその意思、素敵だけど、どうなるのでしょうか。何か、二人を見ていると、羨ましくなります。
書店員 / 桶谷佳代

「ジドリの女王～氏家真知子 最後の取材～」トウテムポール

■ 強烈な個性の週刊誌編集者が、ハイヒールを打ち鳴らし、記者として事件を暴きに突き進む。ドラマ「エルピス」っ
ぽいかな、と思ったのだけど、なんだか、新章に入って、さらにスピード感が上がってきているのでぜひ読んで
もらいたい1冊です。ドラマ化絶対オススメ作品！！

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

■ とある田舎町で起きたミステリアスな中学生連続怪死事件。その謎を追う主人公の事件記者・氏家真知子はいささ
か強引な取材手法ながら、的確に目撃者に食い込み、事件の真相に迫る。けれど一筋縄ではいかない犯罪グルー
プの策略で一転して窮地に陥ってしまう…。何ともサスペンフルな展開に目が離せない。トウテムポール氏の新境
地に注目だ。

コミティア実行委員会会長 / 中村公彦

「死に戻り令嬢のルチェッタ」天乃忍

■ 天乃先生の描く「ヒロインが兎に角鈍感！」「ヒーローがんばる！」が大好きです。異世界転生ものと合う！読ん
で楽しくて仕方ありません。

アニメイト / 鈴木寛子

「しめっばい話ですが」小田扉

■ 葬儀社を舞台に、ユーモアあふれる小田扉節が冴え渡ります。「死」は特別なことではなく、いつでも、誰の隣に
もすぐ在り、悲しみとおかしの境界もとても曖昧。連作のエピソードは今笑ったと思えば涙が出てくるし、気が
つくともた笑っているようなことの連続で、読んでいるうちに心をしずかに慰めてくれるマンガです。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

「地元最高！」usagi

■ ヤバい、危ない話しかねあって感じの漫画です。ほぼ女の子ばかりが出てくるのですが、内容がアレなので確かに
女の子キャラに置き換えないとキツイなと思いました。こういうジャンルは苦手だと言う人にも、この絵柄・キャ
ラクターなら読めると思います。少年漫画のような展開もあって、危ない話だけじゃないという部分もあり
ます。Netflix とかでアニメ化してくれないかな。

会社員 / ターシ

「じゃあ、あんたが作ってみろよ」谷口菜津子

■ 古風な考え方をもつ主人公が振られたことをきっかけに、他人を知り自分の変革にチャレンジする物語。その姿
をコミカルにリズミカルに描かれてるのがとてもよいし、自分の戒めにもなりました。自分を省みることができる
あなたはかっこいい。と主人公がいわれるのですが、ほんとにその通りと思いました。今の時代に合ってると思
います。すべての人に読んでもらいたい漫画です。

Sler・会社員 / 廣瀬 公将

「13回目の足跡」三部けい

■ 「僕だけがいない街」の作者が描くサスペンスものだけに、放っておいても人気が出そう。次々出てくる謎の作り
方が巧み。犯人を勝手に予想するだけでもかなり楽しめます。

サブカルライター / 河村鳴紘

「十次と亜一」コドモペーパー

■ 絵が可愛らしいのでさらっと読めたのですが、結構ドロドロとしたサスペンスでした。導入が童話的ですがしっかり小
川未明を思わせるだけに、途中から江戸川乱歩的な展開になっていくことに驚きつつ、江戸川乱歩が好きなので、
ああ、うん、これはあれか！と、乱歩の各作品を思い出して唸りながら読みました。過ぎた純粋さは、ときに狂
気のようにも思えます。亜一が十次に出会えてよかったと、心から思います。面白かったです。

主婦 / 堀江千秋

■ 軽快に進む物語の奇妙さや不穏さと掛け合わさった、独特の美しさを持つ大正レトロの舞台に、みるみる引き込まれて読み進めてしまった。全体的には柔らかく明るい雰囲気なのに、しっかりミステリーでゾクッとさせられる。リアリティある時代描写ながら、織り交ぜられるファンタジーな表現も独特の味わい。装丁を含めて紙本で楽しんでほしい、満足度の高い短編。

会社員 / 伊東敬祐

「上京生活録イチジョウ」三好智樹、瀬戸義明、萩原天晴、福本伸行

■ 萩原天晴原作のカイジスピノフはどれも必読のおっさん癒し読み物だが、本作は「青春」にフォーカスを当てて新味を出しつつキレイに完結している。

ときどきライター / 縣丈弘

「ショーハショーテン！」小畑健、浅倉秋成

■ お笑いを解析説明しつつも漫画ならではの表現していて引き込まれる。面白いと思います。

tetote 代表 / 力丸 真

「植物病理学は明日の君を願う」竹良実

■ 人類の滅亡を賭けて主人公が戦う。とても魅力的だ。魔王だったり宇宙人だったりたまたま天変地異だったり。魅力的だからこそ、そういうものと戦うマンガは枚挙に暇が無い。ただ、この作品が戦う相手は、超斬新！この作品の2話、ラスト。「人類の摂取カロリーの8割近くは、たった14種類の植物性食物だ。もし私が人類の半分を減ぼすとしたら、この人類の弱点を利用する」…！！ こんな人類の危機を取り扱う物語を見たことがない！！ それを防ぐべく行われている学問が『植物病理学』。まずその植物病理学がとてとても魅力的なのだが、いままでに見たことなかった知恵をベースに、なんとこれが教授と助手の（ほぼ）探偵ものエンターテイメントなのだ！名匠・竹良実さん、この先、絶対登場人物のイメージがひっくり返り、でも絶対納得のいく場所に連れて行ってくれるはず。無限の期待！

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

「女子高生除霊師アカネ！」大武政夫

■ 現実はどうしようもなく冷めているところからこそ生まれてくるユーモアとコメディ。それがさらに「霊」をめぐるやりとりとなることで、その面白さが増幅しています。

会社員 / やのこうじ

「しよせん他人事ですから ～とある弁護士の本音の仕事～」富士屋カツヒト、左藤真通、清水陽平

■ 数ある弁護士マンガの中で、誹謗中傷、名誉毀損、なりすまし等々のインターネット上のトラブルに完全特化した作品です。「所詮は他人事じゃん？」と突き放したような保田弁護士の言い方が実は適度な距離感による冷静な判断で、事務所内の「他人事」と大書した掛け軸と相まって、響きます。

弁護士 / 三葛敦志

「地雷なんですか？地原さん」りょん

■ 地原さんが可愛い。抜群に可愛い。すごいよ。真顔でいるだけで画が持つもの。個人的には扉絵がめちゃくちゃ好みで扉絵だけの画集とか出して欲しい。本編よりも扉絵眺める時間が多いまでである。でも女の子が可愛い作品なんて山のようにある（逆であるの？）けど、その中でもしっかりと刺さったのはなぜだろう？ヒロイン兼トリックスターとして常に物語を展開していく地原さん、そのトリックスターを更に面白い方向に転がす千夏、たまに考えることと言うことが逆転する黒木…当たり前のように極振りしている友人たち…やっぱりそれぞれのキャラクターが立ってて見ていて楽しいからなのかな。そして4巻出てもキャラがブレないのは完成度の高さあつてのものだと思います。みんなの心掴むために超能力が使えたり流行りと廃りを掻き分けて生まれてきたのが地雷。なにそれ超面白い。千夏さんの圧倒的自我感好き。みんなほんわかして鬱展開が無い、こういうのがいいんですよ！こういうのが！！黒木はいいやつ。ストレスなんて現実世界だけで十b新しい巻が出る度に1巻から読み返す作品はホントに好きなんですよ（自分調べ）

会社員 / 布施直人

「白山と三田さん」くさかべゆうへい

- 何度読んでも面白過ぎます。田んぼに落ちるシュチュエーション。文字と絵柄のギャップあり過ぎて堪りません。声を大にして言いたいのは、2人の空気感がサイコーです。

株式会社エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部 大介

- 先日ちょうど100話で最終回を迎えました。始まった時から「ふたりが上京する」というゴールが決まっていたこの物語。最後まで笑ったり泣いたりしながら見届けることができて嬉しいです。偶然の出会いから、時間をかけてお互いを思いやれる関係を作り上げた白山と三田さんの人生に幸あれ。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

「新古書ファイター真吾」大石トロンボ

- 電子書籍以前、かつて盛況だった新古書店に通い倒すマニアたちの「あるある」ネタが「あるある」のまま描かれていて、懐かしく共感を覚えました。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

「スーパースターを唄って。」薄場圭

- 笑ってるけど泣いている人。真顔だけど嬉しい人。そんな表情の描き方が本当に凄い。ちっともマンガ的ではないセリフに感情をブツ刺されたら、すえた匂いが漂ってくる町に放り込まれている。2023年いちばんの衝撃でした。歌いたいことなんかないと嘯いた主人公が、マイクで人生を変えるところを見たくて仕方がない。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- 「抗う」「抵抗する」といった、昨今あまりそれが必要な場面にもでくわさない言葉がぴったりの作品です。かわいい絵なのに、場面場面の薄暗さや匂いまで感じさせられるような、迫ってくる感じがあります。

会社員 / 林礼春

- 絵柄とストーリーにギャップがあり環境や運に負けずに頑張ろうともがき苦しんで必死に生きようとしているキャラクターたちになんども胸を掴まれる。

ヘアメイク / 北原由梨

- 舞台は整った。物語は動き出した。腹の底で煮えたぎる怒り、思考から離れぬ悲しみ、それでも続く現実の毎日への冷え切った諦念、それらを抱えてどこに向かうのか、早く見たい。

会社員 / やのこうじ

- 可愛らしさのあるタッチで描かれた人物たちとは真逆に行くような、匂い立つ暗く汚い空気と、そこで繰り広げられるエグさ満点の展開。重ためのパンチを喰らい続けながら頁を捲る中で、主人公が一筋の道に縋るように、その燻らせた炎を燃やすステージには思わず鳥肌。紙面から音がビリビリと伝わってくる作品は久々で、この引きずり込まれるような感覚は誰かと共有したいと強く感じた。

会社員 / 伊東敬祐

- 冷たすぎて火傷するような、青い高熱の炎のような。ヒリヒリのストーリーに、どうか幸せになってほしいと願いながらページを捲り続けてます。

マネージャー / 樋口健

「スーパーの裏でヤニ吸うふたり」地主

- 営業職で40代、喫煙者の佐々木。スーパーで働かっこのいいしっかり者の女の子、田山。その二人がスーパー裏の喫煙所でタバコを吸いながら、他愛もないやり取りを繰り広げる…というのが本筋なのだが。とにかく手にとって読んでみてほしい。田山は可愛い。佐々木も可愛い。どこもかしこも全面禁煙。灰皿は撤去。喫煙者に風当たりが強い昨今。でもこの漫画はタバコを吸う人にも吸わない人にも優しい、一推しの素敵な作品。

会社員 / 杉佳尚

「スクールバック」小野寺こころ

- とある高校の用務員さんとそこに通う高校生たちとの触れ合い。この用務員さんと高校生たちとの距離感がとてもいい塩梅。気にし過ぎず干渉し過ぎず、先生ではないからこそ見えてくる、大人な対応。そして寄り添うべきときは側にいてくれる。こんな用務員さんがいたらきっと隠れた人気になっていただろうと思う。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

- 嫌なやつも悪人もいなくて、でも「悪意ないちょっとしたひと言」にガリッと削られることもある。特に学生のうちは。そしてこんなことで傷ついていることを悟られるのは恥ずかしかったりノリが悪いと思われるのはカッコ悪いんじゃないか、みたいな、表に出せない悶々。用務員の伏見さんて、例えば10年後くらいに同窓会した時に「そういえばオモロい用務員さんおったよな〜」って色んな人から色んなエピソードが出てきて、その当時の自分だけの小さな宝物みたいな記憶のかげらをみんなで集めたような存在だなと思う。説明するのは難しいけどとっても共感できる、大人も子供もなんとなくみんな経験あるむずむずした何かが、繊細に見事に漫画として表現されている作品。好きです！

元書店員 / 内野智未

「寿々木君のていねいな生活」ふじもとゆうき

- 寿々木君のようなていねいな生活に憧れます。高校一年生の優しい寿々木君にがんばられて応援したくなったり、ほっこりしたり、ホッと優しい気持ちになります。

主婦 / 紺野泉

「すだちの魔王城」森下真

- 勇者が魔王を倒したあとの平和になった世界の後日譚。異世界ものの王道ですが、少年マンガらしく勢いがある、テンポよく読んでいけます。とっちらかりそうな設定やストーリーが一筋きれいにまとめられていて、ファンタジーの世界観の中に埋もれないキャラクター描写が丁寧です。過去からすると混じり合うことのなかった立場のキャラが、平和な世界だからこそ出会い一緒に暮らしていく。すでに各所で家族愛の物語と紹介されている本作ですが、派手ではないもののじわっと温まるエピソードが散りばめられており、6巻までの盛り上がりがあるものすごくよかったです。ファンタジーや異世界ものを普段読まない人にもおすすめしたい作品です。

公務員 / 宇田川結衣子

「ずっと青春ぽいですよ」矢寺圭太

- いわゆる青春群像劇というやつですが、なんか面白いです。なんで面白いのかは、まだ言葉にできない感じなのですが、これはきっと面白くなるぞ……と感じています。

1616屋 / 杉本善徳

「スティアの魔女」牧瀬初雲

- ゆらめく水面に小舟。魔法世界。可愛い「渡し守」。ゆったりとした時間を感じさせるアイコンの中で、ずっと背後にまとわりつく不穏な空気と謎。主人公のハルが背負うものは何か。この後どうやっていくのか、続きが気になる。表紙の雰囲気魅せられて購入すると、いい意味で期待を裏切ってくれる作品。

弁護士 / 田邊幸太郎

「砂の都」町田洋

- 二度と会えない人、叶わなかった思い、伝えられなかった言葉など、この世は悲しい夢のかけらでできている。このマンガを読むとそんな印象をうけます。でも、思い続けること、伝えることで叶うことも描いていて、あきらめず伝えることの大切さを同時に教えてくれるように感じます。忘れられない後悔を抱えて生きている。

Sler・会社員 / 廣瀬 公将

- 町田先生の作品は毎回読むたびに「この世界に行きてえ」と思わせてくれます。読後の爽やかさ、余韻も相変わらず良かったです。世界設定はファンタジーなのに話の軸は誰にもあるようなテーマを不意に突いてくるので、読む時の年齢によって感じ方が変わると思います。歳を重ねて読み返して新しい何かを改めて感じ取れるような作品です。

会社員 / ターシ

- たむらしげる作品を今風に仕上げたような独特のタッチが優しい中に少し不穏な雰囲気を漂わせています。何かあるようで、何も無いようにも見えます。作品の匂いが良くて、通してさらっと読めてしまう名作。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

- 極限まで情報量を絞った線画がジリジリ焼き付くような夏の日差しをよく表現出来ていて、これ以上ない描き方だと思いました。人の命と時間＝砂の儚さになぞらえた本作は、読んだ人それぞれの解釈ができるように余地を残してくれるような隙間があって、ほろほろとしていてノスタルジックな気分になる作品。

フリーランス / 金輪英恵

「スノウボールアース」辻次夕日郎

- 世界の救世主が、その世界を救えなかったら。その後の凍てついた地球で残された人々が生き残るための戦いを描く熱い、熱い作品。絶望の中で物語が始まり、希望を見出していく主人公たちの姿が眩しい。救世主とて完全無欠ではない。そんなところが魅力的。熱い展開に胸が熱くなり、心の中で歓声を上げる。そんな体験をさせてくれる作品。是非読んでほしい。

会社員 / 杉佳尚

「SPUNK - スパンク! -」新井英樹、鏡ゆみこ

- 享乐的なカンナと、押し殺した本当の自分を探す冬子。対照的な2人の新人女王様を軸に、「切実と滑稽」に彩られたSMの世界を描く。新井先生の作品はどれも劇薬なので気軽に人に薦めづらい場合もありますが、本作は「“好き”をナメるな」という、多くの人に共感しやすいテーマもあって読みやすく、はちゃめちゃに楽しい。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

「スマイリー」服部未定

- 「本物の狂気は真後ろにいる」感じがリアリティありすぎる。恐ろしいねえ気持ち悪いねえ。“間違えない”ためにも読むべきバイブルだと思い、いろんなところでおすすめして歩いています。これもいわゆる信仰、ですかね。

NIC リテールズ(株) / 池本 美和

「住みにごり」たかたけし

- ずっと不穏な空気を出しながら決定的な事が起きていなかったのですが、色んなことが明るみになり、とうとう最悪な展開になりそうで今後も目が離せない漫画です。そして相変わらず表情の描写が秀逸だと思います。どういう感情!?! というあの顔が頭にこびりつきます。

会社員 / ターシ

- 読めば読むほど不穏にしかならない展開に毎回良い意味でのため息が出ます。この家族の行く末をはらはらしながら見守っていきたいです。

デザイナー / 玉澤綾子

- 去年もだいぶ気にはなっていましたが、今年出た数冊で確信に変わりました。この漫画はやばい。読んだ人にとって誰が1番狂ってるのか話しながら読みたくなります。俺にはお兄ちゃんが1番まともに見えて、そこに人間の仄暗い闇を感じました。

OKAMOTO' S / オカモトショウ

- ずっと何かが起こりそうな不穏な空気が漂う漫画。そのスリルがとてつもなく面白いです。

吉本興業・芸人 / ムーディ勝山

「青春島 - 僕の命を青春に捧ぐ -」永山草司

- 誰でも一度は目にしたことのあるような青春的展開。でも、それは偶然起こるからこそ青春なのであって、狂おしいほどに求めると不気味な仕掛けに豹変する。誰もが一度は焦がれた「青春」を狂気に満ちた忌むべき対象として明確に取り扱った挑戦的作品。同じキャラクターでも、場面によって少年漫画的、少女漫画的、ギャグ漫画的な描き方に替えることで、状況の気持ち悪さが程よく引き立っているのも素晴らしい。

弁護士 / 田邊幸太郎

「青春リビドー山」位置原光 Z

- 作者の5年に渡る作品がコミックスにまとめられたショートギャグ集ですが、下ネタに関する独自の解釈、表現方法がとにかく素晴らしいセンスで頭空っぽにして爆笑できました。個性的で歪んだキャラクターたちがどれも魅力的で最高です。天才だと思いました。

会社員 / 三浦佑樹

「セーフセックス」岩浪れんじ、森もり子

- ふたりの出逢いは居酒屋での隣の席だったこと。そこからのホテルに行くと今どきな展開かと思いきや、いやこれ今どきなのかもだけど、一度きりの関係ではなくそこから生まれたのが恋なのかも。エロさは感じない、大人な、二人の微笑ましいラブコメ。この二人の関係ずっと続いて欲しい。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

- 飲み屋で意気投合してラブホでワンナイトラブの流れ…なのですが、イザというところで行儀よく丁寧に合意形成を重ねるところがタイトル通りで妙に現代的。何かとパターン化されがちな性愛表現を問い直す姿勢に好感を持ちました。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

「セシルの女王」こざき亜衣

- イングランド女王エリザベス1世 という誰もが知っている人物であるがどんな風に生まれ、どうやって女王になったのか知る人は少ないのではないだろうか。史実や作者の解釈を織り交ぜ紡がれていく物語に、息をつく暇もないほど惹き込まれます。エリザベス1世の視点ではなく、その忠臣の視点であることもまた「読ませる」ポイントです。本当に毎巻、鳥肌が立ちます。はやく続きを・・・

図案家 / 大橋寛子

「接客無双」鳩胸つるん

- 何も考えずに読んで、ツッコミ所が満載で、勢いよくツボにハマりました。読後もスッキリ、何も残らない。だがそれが良い！

教師 / 持丸宏司

「蝉は胎児に寄生する」Dr.Poro

- 帯にある「絶望渦巻くワールドエンドストーリー」という言葉はただの惹句ではない。きっと何か救いがあるのだろうと思ったら何もなかった。と同時にこのように救いを求める気持ちの中にかえって生を感じられる。妙な読書体験ができるオススメの一冊。コンディションがいいときに読んでください。

往来堂書店 / 三木雄太

「戦車椅子 - TANK CHAIR -」やしろう学

- 殺意を向けられた時だけ覚醒する最強の殺し屋、という設定だけですでに面白い。正しく少年マンガ的なエスカレーションにワクワクする。

マンガ読み / サイトウマサトク

「戦争は女の顔をしていない」小梅けいと、スヴェトラーナ・アレクシエーヴィチ、速水螺旋人

- そして戦争。まだ、そしていまも続く戦争にまつわる絵物語。なんでこの国では、これがマンガで読めてしまうだろうと本当に不思議に思う。語られる彼女らの戦争を巡るお話には、圧倒ですらなく、ただ茫洋としてしまう。あまり巨大な何事かの、ごくごく一断片でしかないはずのもの、それでも、ひとりの人間にとっては大きすぎるし不可解すぎる。書籍で読んだときはあまりに突拍子もなさすぎて Sudden Fiction なんじゃねえかと思わされたが…マンガで読んでもやっぱりその事態の突拍子もなさを受け止めるのは難しいと思う。女であることを隠して（表明せずに）士官として（！？）軍艦に乗りました、とかしれっと言われてもちょっと受け止めがたいです…。

ソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

「大怪獣ゲャーチマ」KENT

- 災害の原因であり、復興の象徴でもある大怪獣ゲャーチマと被災した主人公の関係を描く怪獣漫画。登場するのはいわゆる伝統的な「怪獣」であり、いずれも可愛げと懐かしさを感じさせるデザインが魅力的である一方で、迫力の筆致で描かれる戦闘シーンが目を引く。東日本大震災を想起させる設定が随所に見られ、主人公を中心に、被災した過去と復興した現在への向き合い方に踏み込む力作である。

弁護士 / 田邊幸太郎

- まだ序盤というところではありますが、ゲーチマがどう戦い周りを守ってくれるのかと期待があります。過去に出てきたゲーチマと現在のゲーチマの関係の話もこれからでてくるのかなと楽しみにしています。

デザイナー / 平沼寛史

「第三惑星用心棒」野村亮馬

- 野村亮馬が評価されない時間線にはいたくないので推します。なんとかテクノロジーと折り合いをつけて人類が存続している遠未来、はぐれロボットなどに対応する女性型用心棒ロボットの活躍を描いたフルカラーコミック。見てきたように未来を絵にしているのが好き。

ときどきライター / 縣丈弘

「大乱 関ヶ原」宮下英樹

- 「センゴク」の筆者が綴る関ヶ原合戦をめぐる歴史政治ドラマ。前作は、歴史が動く中、ときにコミカルに等身大の武将を描いたのに対し、本作は、合戦にいたるまでの歴史を、人間が、人間だからこそ作り上げていくのだという内容としております。一触即発の中の際どいやりとりの上に現代があると思うと、一つ一つが深いです。

弁護士 / 三葛敦志

「だったら俺に惚れてしまえ コレクターズエディション」おやぬ

- ティーンズラブというジャンルは、少女マンガの発展形でもあり得ると思う。本作はその良質な成功例だ。「好きだ」という気持ちに「行為」が伴う。そんな主人公たちの秘め事を愛でるような気持ちで読めることは幸せだ。佳き少女マンガの読後感と何ら変わらない。

コミティア実行委員会会長 / 中村公彦

「タテの国 reboot」田中空

- 縦読み漫画の面白さを教えてくれた漫画。上へも下へも永遠のように続くタテの国の真ん中に開いた穴に落ちていくところから始まります。縦読みを活かした演出が素晴らしく、下へスクロールしていると落ちていく臨場感が味わえます。他にも面白い演出が多く、漫画なのにアニメのようで驚きました。そして濃密なSF！私はライトなSF好きですが、かなりのSFマニアがしっかり楽しめるほどだと思えます。縦読みが素晴らしいのでジャンププラスやLINEマンガなどで読むことをおすすめします。田中空先生自ら横読みを描き直してAmazon限定で書籍化もされたので、気に入ったら単行本もぜひ。

声優 / 富岡美沙子

「墮天作戦」山本章一

- 山本章一が評価されない時間線にはいたくないので推します。遠未来を舞台にした戦記SFだが、過酷な現実や政治的な謀略と個々の人物がどう対峙するのかをロマンとユーモアをもって描いており、大変読みごたえがある。「地獄献上」といったワードセンスも素晴らしい。

ときどきライター / 縣丈弘

「多聞くん今どっち！？」師走ゆき

- 推しのハウスキーパーになるなんて…キラキラかと思いきや、真逆のジメジメキャラに逆に萌えてしまいます…自分の推しに投影するもよし、妄想するもよし。推しがいる人全員読むべし。ただし、推し活はルールを守って、清く正しく美しく楽しみましょう笑

元 SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

「だんだん」泰三子

- 幕末の歴史上の人物が出てくるが、とても読みやすい。日本の警察を創った川路利良さんの物語で、この漫画で川路さんの事を初めて知りました。とても興味が湧く人物像に描かれていて、続きを読むのが楽しみです。

主婦 / 岸本しのぶ

■ ハコヅメに続き、作者のセンスが最高

会社員 / 齋藤隼

■ 時代モノと思いきや、お話しのテンポがよく、ギャグも面白い。秦先生の気合いがのっている！

医師 / 岸本 倫太郎

■ 【日本警察の父】に惹かれて読み始めたものの、読み進めるうちに主君である島津斉彬に惹かれてしまってます。マンガキッカケから新たな魅力にハマリ中です。

株式会社エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部 大介

「断腸亭にちじょう」ガンブ

■ マンガではないけど、『わたしに会いたい』や『無人島のふたり』など、がんに関する素晴らしい作品が最近発表されている。『今朝の秋』や『紅梅』など、忘れられない作品は以前からたくさんあるけど、歳を重ねて病気を身近に感じるようになったからか、決して他人事だとは思えない。

鳥取県立図書館 / 野間勲

■ 大病になることであらわになる人間の心の動き、作者自身の日常が淡々と描かれています。重すぎずにくすりと笑える、お話なので、かわいくて柔らかい画風で重苦しい雰囲気絶妙に中和されて、心にしる漫画です。

会社員 / 佐藤優

「ダンピアのおいしい冒険」トマトスープ

■ 歴史を読み解いた上で自分の世界観に落とし込んで描き出す、その塩梅が大変上手いなと感じさせられました。ギャグパートも散りばめてあり、全体的に『天幕のジャードウガル』よりもゆるっとした作風ですが、そのおかげでよりあの時代の不条理さが引き立っているのではないのでしょうか。私掠船というニッチなテーマを描いた作品ですが、可愛い絵柄とシンプルな構成でとても読みやすいので、老若男女多くの人に触れてもらいたい作品です。

会社員 / 畑中 瀨路奈

「中高一貫!! 笹塚高校コスメ部!!」吉田貴司

■ 快作「やれたかも委員会」で、恋愛における男女間の深い溝と途方もない勘違い、あっけにとられる戦略ミスの数々を再現動画のような体裁でトリッキーに描いた作者による新作。「カワイイは勝利」を合い言葉に美容のレベルアップに日々邁進する「コスメ部」なる架空の部活を舞台に、男女交際のレベルアップを至上命題として「戦う」女子部員たちを活写する。ナンセンスなパロディーというなかれ。昨今のコンプラ時代においてこれはとんでもなく挑戦的な設定だ。「ただのマンガだよ〜ん」とうるさ方を煙に巻いておいて、マンガ以外では絶対に不可能なワザを惜しげなく繰り出しながら現代ニッポン社会を縦横無尽に斬りまくる。ほんとうに深い。当初は単話完結的だったが、第3集に入ってラスボス的な特級イケメン（ルックスに加え諸事ハイスベック）の登場に至り、倒すか倒されるかのスポーツマンガ、バトルマンガの体裁を借りて多弁なプロレス中継アナウンサーのようにテンション上げ上げに。男どもの知らない「カワイイ」の戦いに臨む女性たちの壮絶な努力と挫折感、達成感をいやみのないエンターテインメントに仕立てる知的な作劇から目が離せない。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

「追放されたチート付与魔術師は気ままなセカンドライフを謳歌する。～俺は武器だけじゃなく、あらゆるものに『強化ポイント』を付与できるし、俺の意思でいつでも効果を解除できるけど、残った人たち大丈夫?～」業務用餅、六志麻あさ、kisui

■ 月並みな形容ですが、ながいけんが異世界もの描いたんか? という風情の怪作。作画もゆるい描線がクセになる味わい。

ときどきライター / 縣丈弘

「月出づる街の人々」酢豚ゆうき

■ 異なる種族のモンスターたちが一緒に暮らしているのにとっても優しい世界が広がっている。全体的にスケッチのような画風がまたその柔らかい世界観と合っている。

元 SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

「作りたい女と食べたい女」ゆざきさかおみ

■今の物語だな、と思います。女性同士の恋愛のお話ですが、親や他者との関わり方は誰にでも当てはまるもの。「食べる」という普遍的な行為を通して、他者との関わり方を丁寧に描いた作品だと思います。

会社員 / 津田 圭

「土かぶりのエレナ姫」晴海ひつじ

■今流行りの異世界転生ものファンタジーではあるのですが、竜によって荒れ果てた砂漠の国の国でなんとか植物を根付かせようとする王子と箱入り娘のお話。大切な人を、植物を愛するとても心温かになるストーリーなので、ふわふわ、ほわっと感じる世界観が大好きです。

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

「冷たくて柔らか」ウオズミアミ

■熊本を舞台に、世代も性別も性的指向も違う3人の男女の共同生活を温かく描いた「三日月とネコ」(5月に実写映画が封切り予定)。その完結から1年。ウオズミアミの新作は、33歳の女性同士の恋愛に正面から向き合い、胸の鼓動が画面から聞こえるような繊細かつ華やかな雰囲気作品となった。主人公・糸崎宝とその友人(だった)夏目(旧姓・野々原)エマ。境遇も立場もまったく異なる2人は20年ぶりに偶然の再会を果たし、すぐに中学生時代と変わらない友情を育む。しかし、宝が忘れてしまっていた中学生のときの「ささいなできごと」を大事に受け止めて生きてきたエマと関わるうち、宝もそのできごとを思い出し……、という展開。作者は、若くもないけどそう年でもないという世代のリアルを描くのがうまい。とあるきっかけによってその「パンドラの箱」が開いてから、宝の感情が微細に揺れ、その揺れの共鳴によって少しずつ自身の恋愛感情に確信を得るようになるプロセスが、読者にはとてつもないドキドキをもたらす(私は50代男性ですがそういう年齢性別は関係なく)。20年前の「しなかったキス」をめぐる気持ちのやり取りをこんなにも可憐に、美しく、かつ身体の奥に火を点すようにエロティックに描く作品をほかに知らない。ときに潤み、ときに怜悧に輝くエマの瞳がいい。年齢相応に異性と交際を重ねてきた宝が、学生結婚に近い形で早くに伴侶を得たエマとの関係に、性的な感情を含めて初めて恋愛らしい恋愛(たったひとりの運命の相手)を見いだす。その過程には単なる恋愛ものとか、場合によっては百合系とかのカテゴリーズを越え、自分と誰かのコミュニケーションについて真剣に考えるまなざしがある。既刊2巻の先がどうなるか、2人の関係がどう展開するかは分からないけれど、目が離せない上質な作品になることは間違いない。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

「ツククサナツコの一生」益田ミリ

■主人公の32歳のマンガ家と彼女の描くマンガの世界の主人公、少し重なり少し違う2人の日常を呼応させ、ささやかな哀歓をすくい上げる。コロナ禍を織り込み、当たり前前の生活のはかなさと貴さも。さらりとした絵で淡々と進むが終盤は衝撃的。大切な人と大切な時を過ごしたい、そう思わずにはいられない。

朝日新聞記者 / 小原篤

「出会って4光年で合体」太ったおばさん

■とにかくすごい! すごすぎる! やばい! これランキングに入らなかったら世界がおかしい。入れてないマンガ読みは控えめに言って目が節穴なのでもうマンガ読まないでほしい。グレッグ・イーガンと植芝理一を悪魔合体させてコミックLOだけを与え続けたような傑作。

作家 / 海猫沢めろん

「ディアスポレイザー」温井雄鶏

■絵に癖があり台詞も多く読み易い漫画ではないのだが、読ませる迫力がある。展開の目まぐるしいロードムービーで、アメリカのB級SF映画テイストを感じる。

丸善ジュンク堂書店 営業本部 / 小磯洋

「定額制夫のこづかい万歳 月額2万千円の金欠ライフ」吉本浩二

■これは題材の勝利なのかもしれないが、現代のミニマリズムを描く作品として一つの到達点だと思う。卑近だけど、そこにはいわば「足るを知る」の豊かさがある。何度も読み返してしまう。

マンガ読み / サイトウマサトク

「出禁のモグラ」江口夏実

- この世とあの世の怖い話。霊の恐さと人間の怖さは違うと思っていたら、この世の延長線上にあったり、逆輸入されてたり。そういうわけで、フィジカルメンタル共に筋肉キャラの詩魚ちゃん最強。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

「デストロ 016」高橋慶太郎

- 『デストロ 246』の前日譚にして殺し屋・沙紀がまだ女子高生だった頃の殺し屋っぷりを描いてポップな中にハードなバイオレンスを見せてくれる傑作アクション。出てくる奴らが愛くるしいのに危なくて恐ろしくて近寄ったら死ぬのは確実なのに拝みたくなる。いつか誰かで実写で見たいが不可能なら是非にアニメ化を。『リコリス・リコイル』好きが見てあまりの血みどろっぷりに驚きつつもハマること請負だ。

書評家/ライター / タニグチリウイチ

「テレワック与太話」山田金鉄

- 作者言うところの「魔性のお姉さん（陽キャ）」と絵に描いたような陰キャ SE さんのなれそめ短編。今まで人並み以上には漫画を読んできたと思いますが、これほど主人公がうらやましいと思ったことがあっただろうか。いや無い（反語）。なんとというか、キャラ造形とか、距離感とかが卑怯なくらい絶妙なんですよ。マストバイ & マストリード。読んで（悶え）死ねって感じです。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

- テンポよくまとまっており、読みやすい

会社員 / 齋藤隼

- コロナ禍が舞台の、今だから生まれた漫画です。独特な語り口と魅力的なキャラクター。一卷完結ですが満足感の大きい一冊でした。

会社員 / 津田 圭

「東京入星管理局」窓口基

- 『メン・イン・ブラック』的な異星人取り締まり系美少女バディアクション SF、といったところから始まった本作ですが、ストレートに前に上にぶっ飛んでいくタイプのお話かと思いきや、巻を重ねるごとにより広く、より深く、東京に潜む様々な異星人の暮らしや陰謀、犯罪が描かれていくようになり、今や「現在進行形国産 SF」という括りで見ても、最先端を走っていると断言できる作品となりました。建造物型の宇宙人の恋の行方、人体改造で「運勢」を強化された少女、不可視のマッチョ美少女など、センス・オブ・ワンダーをぶん殴って揺さぶりかけるアイデアの宝庫。何度だって宣言しますが、あの日の我々にとっての『トライガン』『ヘルシング』のような、ある種の「必修科目」となり得る魅力をもったマンガです！

株式会社ムービック / 岡部 真矢

「東京カンナビス特区 大麻王と呼ばれた男」稲井雄人

- 大麻はよくニュースで見ると、実は何も知らないのだということを教えてください。基本は「いい人」である主人公には、最終的に破滅が待ち受けているかと思うとドキドキです。

サブカルライター / 河村鳴紘

- 普通のおじさんが大麻王になる物語はアメリカテレビドラマのようで、展開が面白かった

ツクリビト / 小野裕子

「東京ヒゴロ」松本大洋

- 松本大洋はもともとそうだけれども、この作品も失われていくものへの抒情を描いている。題材がマンガであるだけに、古くからのマンガ読みには響きます。

マンガ読み / サイトウマサトク

- いつもお疲れ様です。そしてありがとうございます。熱を入れて書いていたコメントの作品が2022年のものだと発覚し、急いで5作品を選び直し終えたところです。明日中にはまとめてお送りしますので、ひとまず一旦はタイトルと作者名のみお送りさせていただきます。ご迷惑をおかけし、大変申し訳ありません。何卒よろしくお願いたします。

音楽家・閃き堂店主 / 谷澤智文

- 漫画のマンガとして読み始めて読み終えましたが、ここに描かれていたものは、期待したり、諦めたり、去ったり、縫ったり、逃げたり、回顧したりといった、マンガ家でも編集者でもない僕らのすぐそばにもあるもので、それらとともに否応なく進む日々を過ごす僕やあなたやみんなのことで、それらすべてに幸あれと光を差し伸べてくれる、やっぱり祈りのような物語でした。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- この先、マンガがどんな姿に変わっても、想像つかないほど遠くへ行ってしまうても、この3冊があれば、マンガを嫌いにならずにいられる。そんな作品だと思います。

読売新聞文化部 / 石田 汗太

「図書館の大魔術師」泉光

- 緻密に凝った世界設定、たくさんの登場人物が登場する群像劇、不穏な謎を散りばめた伏線、そしてなによりしょっちゅう涙腺を緩ませてくるストーリーと、全方位魅力だらけな作品なのですが、それをここまでたった7冊で表現しているということに驚愕します。特に2023年末時点での最新7巻で描かれた、民族間の問題を背景にした作中作の規制に関する展開など、「図書館」という舞台をただの装置で終わらせてないところもすごい！

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- 今年で7巻。選考対象のうちに、なんとかノミネートを…そしてもっと読んでくれる人が増えることを願っている作品です。本への熱い情熱を持った人たち、仕事へのプライド、種族間の差別や本による扇動や情報統制についてなど、たくさんのテーマに真っ向から向き合っています。巻を終えるごとに惹きつけられる構成になっていて続刊が待ち遠しいけど、年1の発刊ペースなのでじりじり待っています。

WEB制作・ディレクター / デザイナー / 河本 智芳

- とにかく絵が綺麗で書き込んでるなと思う。が、それだけでは無く、図書館と魔法のファンタジーがよくできるストーリーで良い作品だと思います。

tetote 代表 / カ丸 真

- 漫画好き、本好きに読んでほしい漫画。夢があるけどリアルに作り込まれた設定や話が面白いのはもちろんのこと、絵がものすごく綺麗。ページをめくった瞬間現れた見開きを使った本棚に思わず「わぁ」と声が漏れた。漫画も小説もページをめくる楽しさであると思うのですが、この漫画は本当にわくわくする。そして4巻でとある真実に驚くはず。ぜひあなたの手で物語のページをめくってみてください。

声優 / 富岡美沙子

- 「本」が持つ力について真摯に向き合って作られたファンタジー作品です。最近のエピソードでは、本の与える悪い方向の影響と、それについて世界はどのように振る舞うべきなのか、という、いま現在のこの世界にもしっかりと重なるテーマが展開されます。現代社会とメディアに対しての一つの落としどころを提示しながらも、決してそれがベストなわけではない、という含みを持たせているバランスも優れていると感じます。もともと、一風変わった世界観を丁寧に積み上げてきて、その奥行が大きな一つの魅力でしたが、敵対勢力もその姿を本格的に表し、一つの大きな転換点を迎えて、スリリングに物語が加速していきます。画も物語も情報量特盛、国産ファンタジーのトップに駆けあがっているマンガです。

株式会社ムービック / 岡部 真矢

「となりの百怪見聞録」綿貫芳子

- 怪異に好まれる男・片桐甚八と、“オバケ先生”と呼ばれる好事家・原田織座の不思議な体験物語。読後にぞわぞわとした感覚が心の底から広がり、同時にふわふわとした不思議な気分にも包まれます。まるで私の近くにも怪異が

潜んでいるのではないかという不安な気持ちに襲われます。ただの怖い話ではなく、ほんのり温かさを感じる幻想的な物語です。

会社員 / 伊藤千恵

「虎鷄 とらつぐみ - TSUGUMI PROJECT -」ippatu

■ 荒廃した世界と人類の結末を描く物語。登場する人物の表情の豊かさ、人間ではない人間味。ちょっと不思議なお話、確かな画力ともに読む人を引き込む作品

デザイナー / 高永貞光

「ドラハチ」夏川勇人、あじな優

■ 最弱のプロ野球チームにドラフト 8 位で指名された補欠のキャッチャーが、分析と戦略、ビッグマウスと人心掌握を駆使してチーム優勝と MVP を目指すという脚本がとても新しい。目的を達成するためにはどんなリスクも恐れず、自分の能力以上の力を発揮する主人公が圧倒的に魅力的です。まだまだこれからどうなるかわからない展開が続きますが、野球やスポーツに興味が無い方でもヒューマンドラマとして楽しめるオススメの 1 冊です。

デザイナー / シンガーソングライター / 平松新

「ドラंक・インベダー」吉田優希、Rootport

■ 今の時代にあったお酒漫画。お酒好きなら見たことはあるラベルがライトにたくさん出てくるので、説得力がすごい。フォーマットとしては政治ものと異世界ものがあわさっていて、お酒が飲めない人も楽しく飲めるのでは。絵も大胆でキャラクターが生き生きしてよいです。4 巻で今年完結なので、さっくり読めるもの◎。

WEB 制作・ディレクター / デザイナー / 河本 智芳

「ドリフターズ」平野耕太

■ 前巻から 5 年近くあきましたが、変わらずの面白さ。平野耕太にしか描くことのできない説明不要のオンリーワナな世界観は健在です。

デザイナー / 高永貞光

■ 島津が主人公の時点でヤバイのに、ヒラコー版魔界転生で関ヶ原の戦いが始まって、しっちゃかめっちゃかだけ面白いです。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

「夏・ユートピアノ」ほそやゆきの

■ ひとつひとつの描写に思考が詰まっていて、手癖でなく手探りで表現を手繰り寄せていくマンガの在り方が、登場人物とシンクロする。読み応えのある作品。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

「鍋に弾丸を受けながら」森山慎、青木潤太郎

■ 読む前は、某ハイパーハードボイルドなやつみたいなのかな、と想像していたんですが、それとは良い意味で違っていた。自分も常日頃から食を知るには風土や土地ならではの文化を知ることが大事と言っているのでも、世界的にもそういうのがあって、しかも裏付けとともに知ることができて非常に知識欲が満たされて楽しい。

1616 屋 / 杉本善徳

■ 食べ物系のマンガは多々読んできましたが、危険な場所を二次元の解釈にしてほのぼの系のマンガとして読めるのは、コンセプトが面白いですね。二次元なら絶体絶命もなんなく乗り越えて行くのかなと思いつつ。あと、出てくる食べ物が興味深く楽しく読めます。

デザイナー / 平沼寛史

■ 治安の悪い場所の料理は 20 点か 100 点以上という理論に従って、釣り好きである著者が世界のアレな場所に立ち入った時に食べた食事の話をする旅モノとしても料理のレポートとしても秀逸な作品。無理に危険な所に行くという話ではなく、友人知人の縁で連れて行かれたその場所は……という形式なので迷惑系の何かを見るよう

な不快感もなく、ひたすらに友人がこの前に行った場所がさあ……という興味深い話を聞かせてくれる、そんな楽しさのある作品かと。

住職兼ライター / 蟬丸 P

- 語り手と関係者たちを美少女に変換し、危険地域を含む海外での飲食や交遊を描く異色ノンフィクション。鋭い視点とユニークな題材を伴う内容は、スリリングな文化論エッセイになり得ている。

書評家 / 福井健太

「ニキ。」 柴川遥

- ドゥニ・ビルヌーブ監督による映画『DUNE/ デューン 砂の惑星』に描かれる荒涼とした砂だけの世界を思わせる舞台上、尻尾が生えたドゥワタラとして生まれた少女が直面する困難を描いて、過酷な星での生活や異なる存在への恐れと差別を見せつつ、それらを跳ね返して生きようとする少女ニキの強さを感じさせてくれる SF コミック。舞台となっている世界がどうなっていくのか。ニキのようなドゥワタラはどうして生まれて何をなしえていくのか。そんな興味を引かれる。始まった壮大な物語が行き着く先を今はただ見てみたい。

書評家 / ライター / タニグチリウイチ

「日本三國」 松木いっか

- 現在構想中の新たな展開に期待

会社員 / 齋藤隼

- とりあえず今出ている 4 巻で第 1 部っぽい終わり方しているので読んだことない人にはちょうど良いタイミングです。近未来でありながら近代史のようなテイスト。文明が崩壊したことで、日本が三つの国に分かれ争っている中で、もともとなものでもない主人公がとあることをキッカケに、持ち前の頭脳と冷静さで押し上がっていく物語。主人公以外のキャラクターも魅力的で、絵柄も格好良く美しいです。物語にご都合が存在しない、言い換えれば命が軽い世界なので、どんなキャラでもいつでも消える可能性があり、（これ間違ったら主人公も途中で死んじゃうんじゃないか…？）とずっとドキドキして読んでいます。

バーテンダー / 村井真也

- 近未来の日本を 3 つに分けて下剋上から這い上がる戦国絵巻のようで、手に汗握るストーリー展開。ほんとにこの後どうなるのか、と毎回ドキドキしながら読んでます。

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

- ストーリーと今後の展開が今一番気になるマンガ。1 話 1 話の展開も気持ち良く裏切られていく感じも心地よい。

ロングランプランニング / 小森和博

「猫奥」 山村東

- ちょっとブサイクな猫ちゃんや、その猫ちゃんに達メロメロにされる猫好きさん達の姿もリアルで大変和まされます！大奥や江戸の風俗もきちんと丁寧に描かれていますし、猫好きだけではなく江戸好きにも読んでもらいたい作品です。

会社員 / 畑中 瀬路奈

「猫が 4 匹いる暮らし～今日も大騒ぎな猫たちに届け！飼い主の想い～」 カワサキカオリ

- 猫飼いな作者の日常を描いたエッセイ。楽しいことだけじゃない部分もあるけど猫って良いなあと思わせる作品。

書店員 / 渋谷 孝

「猫と紳士のティールーム」 モリコロス

- 街にひっそり佇む紅茶専門店を描いた物語。疲れた体や心を癒やしてくれます。

書店員 / 渋谷 孝

「ねこに転生したおじさん」やじま

- 今年 1 番衝撃的だった設定。生まれ変わったら猫になりたいって思ったことある人はいるんだろうけど、本当に転生するところなるのなあって想像して楽しい。猫もおじさんも可愛いけど、五回に一回おじさんなんかちょっと気持ち悪いな。となるおじさんの解像度の高さもいい。

鳥取県立高校教師 / 佐川ゆかり

- 2023 年を振り返って、SNS でよく見た漫画はなんだろうと考えた時、既に社会現象化してるちいさいアレとか、やけどするアレとか、話題は沢山ありますが、会話にのぼる率が高かったのはコレではないかと。やっぱり誰もが皆猫になりたいんですよ。

中央書店 / 井出麻悠美

「眠れぬ夜はケーキを焼いて」午後

- なんだか眠れない夜。日々の不安や心配事に悩まされる中、そんな日々の過ごし方を提案してくれる素敵な一冊です。読後、心がほっとするような気持ちになったり、少し夜更かしもいいなって自分を肯定することができます。なんだか寄り添ってもらえたようなあったかい気持ちになります。あと、おやつ作りたくなります。

会社員 / 伊藤千恵

「の、ような」麻生海

- 毎回おすすめしているけど、ホントいい子たちばかりで泣けます！大変なことは人それぞれ、たくさんあるのだけど、身近な人に優しくしたいと思えるお話なんです。ハルと冬真の兄弟がいい子過ぎて可愛すぎます。ストーリーの随所に涙が溢れるツボがあって、なんだかんだ毎巻泣いてしまうんです。ほんとに良作なので、たくさんの人に読んでもらいたいオススメ作品です。

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

「脳梁ドッグファイト」常盤魚

- 理性の左脳と感情の右脳が繰り広げる決して答えが出ないドタバタ劇。高校生だろうと、大学生だろうと、社会人だろうと、そして結婚しようが、左脳と右脳のドッグファイトは終わらない。

鳥取県立図書館 / 野間勲

- 右脳と左脳のバトル、というありそうな設定をしっかり登場人物ひとりひとりの人生のターニングポイントで活かしきった。このふたりのことが大好きになっちゃいますよね。

往来堂書店 / 三木雄太

「ノーマルガール」家守真言

- 地方から東京に行く、東京での文化の違いにとまどう感じが非常に良いですね。東京に来た時のことを思い出します。最初の家電を買う時の感じや、電車での文化の違いに戸惑ったのを覚えています。そんな当時を思い出させてくれて、そうだったなあと感じながら今後の都会に慣れていく感じも見ていけたらと思います。

デザイナー / 平沼寛史

「バーサス」あずま京太郎、ONE、bose

- 初見、中世ファンタジーものかと思いきや、SF、オカルト？、熱血格闘？など思いつく全てをありったけぶち込みまくったとんでもない漫画でした笑。世界観設定の時点で十分面白く、ワンパンマンでお馴染み ONE 先生のファンであれば間違いなく刺さる作品です。いたって真面目にバトルしてるのですが、やや斜め上をいく展開なのでなぜか少し笑ってしまうのも健在です。

会社員 / 佐藤優

- いわゆる異世界転生モノの展開と思いきや、そう感じる読者を見透かしていたかのように進んでいく物語が面白い。異世界転生が生じたのに敵が倒せないというのも新しい設定だろう。古典的ファンタジーや SF、社会風刺が入り混じった広い世界観で、それを垣間見ていくだけでも面白く読めてしまうが、多彩なキャラがどう絡み合い、収束していくか楽しみである。

弁護士・三村小松法律事務所 / 三村量一

「ハイパーインフレーション」住吉九

■ 奴隷として売られた姉を奪還すべく、身体から贖札を生み出せる少年が国家相手の頭脳戦を繰り広げる。思惑が絡まり合うプロットを紡ぎ、逆説めいたトリックを仕込んだ経済バトル漫画の傑作。全六巻で鮮やかに完結した今こそ推したい。

書評家 / 福井健太

■ タイトルどおり面白さがひたすらインフレを続けるなか、最高潮のテンションのまま完結するという信じられない奇跡をありがとう。マンガ史に刻まれる頭脳戦とシュールギャグを1話のうちに何回やればこの作者は気が済むのかと空恐ろしかったです。

会社員 / 末永龍介

■ いやー、濃かった！！こんな特濃のマンガ、まず見たことない！！一応説明すると、贖札を身体から出せる超能力を得た迫害民が、その能力を活かして世界を出し抜いて自由を得るまでの冒険譚で、基本、頭脳バトルで展開していきます。この、頭脳バトルの密度とスピードがとんでもない！普通の週刊連載、いや月刊連載だったとしても、1話分に充分なるアイデアが、濁流のように押し寄せる！主人公サイドが「おお！！」と思わずなるアイデアをわずか2ページで繰り出したと思ったら、めくると次の2ページでそれを相手サイドがひっくり返すアイデアを持ってくる！もうこの超展開にヘンな脳汁が強制的にドバドバ出る！またこのストーリー展開のために、出てくるキャラクターたちが本当に多面的で、信じられないけどいいヤツ、みたいな不思議な感じになっている。またキャラクターデザインにかなり怪しい性癖みたいなものも充満していて、完結までのわずか6巻で、ふらっふらになるマンガハイを味わえます。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

「Bye-Bye アタシのお兄ちゃん」竹内佐千子

■ 竹内先生が描くすこし不思議な物語。何度も読み返しました。

書店員 / 渋谷 孝

「胚培養士ミズイロ～不妊治療のスペシャリスト～」おかざき真里

■ 不妊治療の現場をこうして漫画という媒体で判りやすく説明されているのが何より素晴らしい。あまりにも知らないことが多すぎるし安易な考えを持ってしまったり誤解することも多数存在しているからだ。この漫画の大きなポイントは物語として「主人公の秘密」があるものの、それを除いても、素晴らしい構成で出来上がっていることにある。女性男性関係なく読んで欲しい。

October Beast 代表・デザイナー / 北山友之

■ 間が独特なのですが、嫌いじゃないです。いや、どちらかと言うと好きです。やはり、2人の掛け合いが良い。

教師 / 持丸宏司

「8月31日のロングサマー」伊藤一角

■ 高校2年の夏休み最後の1日を、記憶を失わないまま永遠にループすることになったらー。そんな設定のラブコメ。海辺の街に住む男子校生・鈴木くんは、8月31日を何度も繰り返すタイムループにはまっている。抜け出そうと試行錯誤する中で、同じ境遇で同い年のかわいい女子高生・高木さんと知り合い、協力するうちに次第に親しくなっていく(まだ序盤だけ)。1章につき1日の顛末が描かれ、日付が変わる深夜0時に環境はいったんリセットされる。次章は同じ8月31日の同じ時間から「やり直し」となるのだが、前回の行動に伴う記憶だけは引き継がれ、それを2人とも理解している点がミソ。その記憶を足がかりにして、少しずつではあるが、フラグの分岐をたどるように8月31日の日常を変化させていく。ーなどとくどくど書いたものの、本作は脱出行そのものの過程を追う冒険譚などではもちろんない。ループからの脱出は作劇上の「しかけ」であり「背景」だ。読みどころはむしろ、男子校育ちで女子に免疫がなく、その反応に内心いちいちキョドリまくりな鈴木くんと、彼氏と別れたばかりで今どきの女子高生らしく大人びたところはあるが根は素直な高木さんが、お互いを理解したり、ときにハレーションを起こしたりしながら少しずつ心を通わせていく、ゆっくりとした時間の流れにある。強い太陽の光と、アイスが似合う濃い青の空の下、何度でも1日をやり直しながら次第に、互いにとってかけがえのない相手になっていく。そのドキドキはなんとというか、願っても絶対に実現されない10代の理想郷。まさしくエンドレスサマー。どんな着地になるか、この先も楽しみ。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

「ぱちん娘。」若林稔弥

- 主人公がどんどん駄目になっていくのにこんなに面白いなんて不思議な漫画です。私はパチンコ・スロットは全くやらないのですが、それでも面白いです。

会社員 / 林礼春

「初恋ディストピア」シギサワカヤ

- シギサワせんせの、ふりまわしたりふりまわされたり恋愛話が大好きで仕方が無いのです。今作は思春期の幼馴染モノということで甘酸っぱさドン！さらに倍！拙僧は残念ながら学生時代何もなかったので永遠に手に掴めない憧れのようなものもありますね。未体験の人にはぜひ一度浴びてみて欲しいなあと思います。はい。そういえば、珍しく(?)裸眼ヒロインですが、メガネ分はサブキャラで補給させていただきました。ありがとうございます。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

「花四段といっしょ」増村十七

- 昨年二巻と三巻が発売になり、登場人物も増え、ますます楽しくなっています。主人公の花四段だけでなく、妹弟子の朝顔の活躍が見られてとてもうれしい。そして“非”本格派将棋コメディでゆるくおかしくありつつも、社会が抱える矛盾や問題を無視しない雰囲気を感じられます。所々で垣間見える、花四段の過去についても描かれる日が来るのでしょうか。それを知るのが怖いような、でも読みたいような。将棋が好きな人にも全然わからない人にも、たくさんの人に読んでほしいです。

主婦 / 堀江千秋

「花は咲く、修羅の如く」むっしゅ、武田綾乃

- 『響け! ユーフォニアム』の武田綾乃が原作を手がけた作品は、高校の吹奏楽部ならめ放送部が全国を目指して競い合い鍛え合って高め合うストーリーを描いて青春に何かをかける大切さを教えてくれる。朗読もあればニュースの原稿読みもあって放送部がいったい何をしているのかが分かり、そこで何を競い合っているのかといった機微が伺えて知見を得られる。声が響いてこそその放送部による活動なり大会を、漫画によって文字とそれからキャラクターの表情、そしてシチュエーションによって感じさせようとする試みも評価したいが、やはりいつかアニメになって誰かの声で朗読を聞いてみたくなる。そんな可能性を感じさせてくれる作品だ。

書評家/ライター/タニグチリウイチ

「ハネチンとブッキーのお子さま診療録」佐原ミズ、北岡寛己

- 最初に登場した奇抜な格好をした男性がまさかの小児科医だった……。やはり見た目で判断しちゃいけないよね。佐原先生の優しいタッチで描かれる小児診療と、その医院に通う事になる親子とのやり取りや築かれていく信頼関係を読んでいてとても優しい気持ちになれます。そして今後の為にも勉強になる……。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

「薔薇村へようこそ」柴門ふみ

- 改めてこんなにすごいホームドラマ作家ってほかにいないんじゃないだろうか。「あーあー、あるあるこんなこと、あー、そういう人、いるー!!」と思わずにはいられないリアリティある素材が毎ページ積み上がって、それを各シリーズ最後までまとめて読むと、あるあるを遙かに超えた「!!!」と驚きしかないとんでもないストーリーが、いつの間にか組み上げられている! また登場人物たちの隙がめっちゃくちゃリアルで、彼らの行く末が心配になって怒濤のようにページをめくって行くことになってしまうので、ラストの気持ちよさがすごいのです。2023年にインタビューさせていただいて、「枠線を引くのがマンガを各作業で一番面倒くさい、でも1ミリ違っただけでぜんぜん面白くなっちゃうから、人に任せられない」と柴門先生から直接おうかがいしたのですが、この、一気に読めちゃう面白さには、そんなマンガの技もあるのです。ストーリーだけ言うと、別荘地にUターン・Iターンするいろいろある人たちの話、になっちゃうんですけど、その地味さの向こうには、驚愕の物語があります。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

「パラレルリープ・シンドローム」タカハシノブユキ

- なぜあの時想いを伝えられなかったのだろうか。出来ることならあの時に戻って…なんてそんな想いを抱えている人は少なくないだろう。そんな人に是非この作品を読んでみてほしい。パラレルワールドに飛び自らの思いを遂げようと奔放する主人公の姿や、登場人物たちもとても魅力的で愛らしい。個人的には絵柄も世界観も大好きで、読後に笑いが込み上げてくるほどツボの作品。これから先の物語も楽しみだ。

会社員 / 杉佳尚

- すごく新しいのになんだか懐かしい気がする抜群にステキな絵の SF 恋愛マンガ。先が読めないなんでもありな展開にもワクワクしていましたが、魅力的なヒロインの活躍で物語が進み始めて、あとは夢路浪くん、キミのいいところを楽しみにしています！

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

「貼りまわれ！こいぬ」うかうか

- シール貼りの仕事ってなんなんだろう？シールの不思議な力とは？？様々な謎がありつつ、絶対に回収されないだろうでも、それを凌ぐ子犬のかわいさと、ちょっとしたアメリカみたいな何かの行動でいや犬が変わっていくのが読後のホッコリにつながる。ちょっとしたリリック拘ってるのも良い。

鳥取県立高校教師 / 佐川ゆかり

「バンオウ - 盤王 -」春夏冬画楽、綿引智也

- 主人公・月山の魅力が最高。ただひたすらに研鑽を積んだ凡人が挑む、天才たちが集まる将棋の世界。いろいろなマンガで描かれた棋士の中でも一、二を争う最高のキャラクター。これが新時代の将棋マンガ。

会社員 / 野口忠義

「万能会社員 菅田くん」山田しいた

- さまざまな時代と設定で活躍する万能会社員菅田くんの話なんだけど、この無理を通して道理が引っ込む感じ、マンガのよい悪ぶざけの力を感じる。むちゃくちゃな設定のむちゃくちゃなマンガを爆笑しながら読むの、楽しいですよ。

マンガ読み / サイトウマサトク

「BL ドラマの主演になりました」すずり街

- 重すぎて異常な愛のかたちを外側から見れて面白いです。

アニメイト / 鈴木寛子

- 絵柄と話の内容にギャップがある作品です。休憩時間にパッと読むような内容じゃなかったのが驚きました。絵本のような絵柄なのが逆に登場人物達の味わった絶望、悲しみ、恐怖を効果的に伝えてきます。ただ、暗いストーリーではなく救いがあるお話なので年齢関係なくオススメできる作品だと思います。続編というかシリーズ化してほしいですね。

会社員 / ターシ

「光の箱」衿沢世衣子

- 生死を彷徨う人間が訪れるコンビニを舞台に様々な人間模様が描かれています、と書くとなんか重そうですが、笑いや(独特)とファンタジーの塩梅が絶妙でサクサクと読めます。キャラクターも本当に魅力的！

会社員 / 小野塚博之

「光が死んだ夏」モクモクれん

- 郷愁× BL ×ホラーという独特のテイストのマンガ。ゆるいシーンと緊張のシーンとが混ざり合いつつ、「夏の田舎」を思わせる世界観は、青春ホラーという感じがしてとてもいい。映画になったら見たい感じがある。また、以前も推薦時に書いたが、擬音語の表現が背景に溶け込む描き方もマッチしていて、すごく好きだ。

クラスター広報 / 西尾美里

■ ストーリー展開が面白い

ツクリビト / 小野裕子

■ 「人にあらずる者」の描写がすごい。自身が自身を「何者」かも認識できないのに、その隠された「存在」を懸命に探ろうとする主人公たちに引き込まれる。名作「寄生獣」を思い出す。

コミティア実行委員会会長 / 中村公彦

■ 相変わらずの世界観で引き込まれます。効果音の使い方で村の感じやその後の不穏な感じが伝わってきます。これから核心に迫っていくにつれてどうなっていくのか楽しみにしています。

デザイナー / 玉澤綾子

「秘密のお姉さん養成ノート」トフ子

■ 近所の子に立派なお姉さんと言われたい主人公を描いた四コマ。立派なお姉さんになる為の定義が様々出てきますがどれもちょっとズレているのが最高です。

書店員 / 渋谷 孝

「ファッション!!」はるな檸檬

■ 最終的に何が起こるのか、という張り詰めた不穏な空気のまま巻が進んでいくので、ずっと目が離せない作品。ストーリーに散りばめられたファッション業界の不条理な慣習など、華やかな世界のダークサイドも興味深い。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

「フルナイト」安田佳澄

■ 人を植物へと変える転花制度が作られた世界。貧困に苦しむ主人公は転花に付随する多額の報奨金を目当てに、さらに大きな流れに巻き込まれていく。転花制度とそれがもたらす社会情勢、各登場人物の思惑が絡み合う複雑で先が読めない展開についてページをめくる手が止まらない。生きている意味について、もしくは人生の意義を求めて足掻くシーンとダークな世界観が素晴らしくマッチしていて印象的だった。今私が「誰か」に勧めたい作品として強く推したい作品。

会社員 / 杉佳尚

「不死身のパイセン 業」田口翔太郎

■ 謎の怪異に襲われるようになってしまった先輩=パイセンのショートホラーコメディな内容なのですが、第1シーズンが凄く綺麗に終わったのに、まさかの第2シーズン開始。しかも面白い。しかも第3シーズンもいきそうな終わり方だったので、なお Good!! 実写化希望!! ここ最近暇があれば何度も読み返している漫画です。

会社員 / ターシ

「ぷにるはかわいいスライム」まえだくん

■ 性別がなにか、人間かどうか、そんなことは関係ないのであって、確実にいまこの時代において描かれるべき希望と生き方、倫理と哲学がここに 있습니다。かわいい、それは救い。

会社員 / 末永龍介

「ブランチャイン」池辺葵

■ 読んでいるとこの漫画の中にゆっくりと流れる時間を共有しているような気持ちになります。じんわりと暖かい

バイオリニスト / 佐藤帆乃佳

「ブレス」園山ゆきの

■ あまり興味のなかった「メイクアップアーティスト」だが、この漫画をきっかけに興味を持つようになった。手に取ったのはふとしたきっかけだったが、読めば読むほどハマる中毒性。漫画だけに言えることではないのだが「読んでみないとその面白さは分からない」を痛切に感じた作品。

あゆみ BOOKS 仙台一番町店 店長 / 土屋修一

「へたくそなのに泣くほど笑える！ カッコフルなエツブリデイ」むめい

- twitter でマンガを連載している時から読んでいました。タイトルの通り泣くほど笑えます。絵と内容のバランスが絶妙。登場人物が皆アキが強すぎて最高で、こんな人たちに囲まれた世界を面白おかしくアウトプットできる作者さんの力量が素晴らしいです。

デザイナー / 玉澤綾子

「ヘブンの天秤」浄土るる

- 天使という一般的に正義とされる者の価値観が、我々人間の道徳の心とはズレている世界。正しいことは何なのか、救いとは何なのか、考えさせられた。主人公の天使・メロだけが救いの矛盾に抗う。可愛い絵とダークな物語のギャップに引き込まれた。

スターダストプロモーション・アイドル / 秋本帆華

「偏愛ハートビート」飯野俊祐

- 片方だけがクレイジーなのではなく、双方にクレイジー。狂気じみた愛を押し付ける彼女と究極のスリルを感じた彼氏。側から見たら異常なカップルだが、双方の合意がありお互いに需要と供給が成り立てばこういった恋愛の形もありなのかと。予測不能な愛の形にヒヤヒヤしながらもキュンとしている自分がある。

スターダストプロモーション・アイドル / 秋本帆華

「ペンと手錠と事実婚」ガス山タンク、榎木伸一

- おじさん警察官と訳ありな可愛い女子高生のパディ推理漫画です！推理物で死体も出てくるような話でありながら、ラブコメもはさまれているので殺伐とし過ぎないのが良いですね。これから明かされるであろう女子高生の過去が気になります。

主婦 / 岸本しのぶ

「放課後ひみつクラブ」福島鉄平

- 1話目からずっと変わらずに毎回ギャグの切れ良しテンポ良し。学園の秘密を探るという基本同じようなパターンで始まるのに毎回予想外の展開を見せて飽きさせない。キャラクターも回を進めるごとに深堀されて魅力が増し、ますます夢中になっていく。

丸善ジュンク堂書店 営業本部 / 小磯洋

- やっっっつとこの作品に投票できる…ッ！！「待”ってたぜ!! この”瞬間”をよォ!!」(注釈：1巻発売が2023年だったので昨年の選考対象外だった。ちなみに昨年フライングで投票してしまったおそろしく速い選考員を俺は見逃さなかった)好きなところは沢山あるんだけど、どこが好き？どこがオススメ？って聞かれると難しい…。隠れ邪悪かな？全く読めない展開は大きな魅力だよね。本当に作者が好きなのを描いてるんだってのがビシビシ伝わってくるし、いやいやそうはならんやろwって展開しかなくて並々ならぬセンスを感じる。猫田くんのワードセンスもキレッキレだし蟻ヶ崎さんの永続的な美しさは至高。作者の掌の上で踊るダンスはたまらねえぜ。でもそうやって読者を鍋に入れてごった煮ころがしにするのだったって話の構成力や画の説得力が必要なんだよね。頭の良い人のコメントによると「視線誘導が秀逸」らしいよ。そんなの気にせず誘導されるがままの視線で愚かな読者は踊るぜ！みんなも踊ってる？まだ？踊れ！オラァ！踊れェ！！

会社員 / 布施直人

「僕の妻は感情がない」杉浦次郎

- SF 枠。ロボット、もし我々の社会に、我々が作り出した非人類知性がいたらどうなんだろうね、ってことをしれっと描いて見せるド SF になった。いつの間にか。最初はコメディ色が強かったように思うんだけど、段々とコメディとキャラクターが必要とする周辺領域を、丁寧に（でもちょっと挑発的に）埋めていったら、いつの間にか本格 SF になっていた感じだ。最初からそれを主題にしようとしていたのではなくて、結果的にそうなった感じがする。「じゃあどうなるんだ？」っていう思考の匂いがする。消費家電として買えるロボットを、自分の妻として両親に紹介するあたりとか、その受け入れられ方の空気とか、そういうニーズがあるならちゃんとロボットの権利的なものも、ちゃんとサポートしようというメーカーと社会であるとか、「今ここにはないけど、仮にそうなったらそうなるだろうし、そうなったほうが健全であろうな」という事柄を、そのコンフリクト含めてきまじめ？に描いてるのが面白い。一気に読むなら今かな。2024年に「二セモノの錬金術師」も単行本になるし、非常に楽しみではある。

ソフトウェアエンジニア / 第式齋藤

「ホタルの嫁入り」橋オレコ

■ 死と隣り合わせな殺し屋と病弱な令嬢。ふたりの緊迫感のある駆け引きにまず引き込まれてしまった。とにかくキャラの表情が素晴らしい。

元 SHIBUYA TSUTAYA コミック担当 / 実松由夏

■ 目が離せなくなる殺し屋と令嬢の契約婚。はじめは電子でちょっとずつ読んでいたのですがどうしても一気に読みたくなくて久しぶりに本で購入して座して読みました。

会社員 / 伊藤千恵

■ とにかく美しいキャラデザインに目をまず惹かれますが愛の重いヤンデレ男子と箱入りのお嬢様のラブサスペンス。「愛」を知らない二人が対照的に描かれています。身体的な弱さと強さ、心の在り方の強さと弱さ相手を理解しようとする事で惹かれあっていく様子。取り巻く環境と複雑な関係性から目が離せません。

図案家 / 大橋寛子

「ぼっち死の館」齋藤なずな

■ この賞には合わないだろうなあ……と思いつつ、やはり一票を入れたい。一見「古い」をテーマにしたドキュメンタリー風だが、この作者が描くのは徹底的な虚構でありファンタジー。そこがまたすごい。猫を食わせるためにも、まだまだ描いていただきたい。

読売新聞文化部 / 石田 汗太

「ホテル・インヒューマンズ」田島青

■ 殺し屋であるお客様をもてなすホテルのコンシェルジュの物語です。お客様それぞれの短編を読むようなペースで進んでいきます。物語はスリリングかつ独特な雰囲気が進み、お客様たちの背後に潜む謎やドラマが興味深く描かれています。

会社員 / 伊藤千恵

「ホテル・メツァペウラへようこそ」福田星良

■ 行ったことがないけれど、私がフィンランドにいるような気持ちになりつつ、人を愛しく思う気持ちになります。あたたかい気持ちになります。ジュンさんの一生懸命さが好ましい。素敵な大人に出会えて、良かったね…と、嬉しくなります。

書店員 / 桶谷佳代

■ 徐々に明かされる登場人物たちの過去、主人公のジュンを取り巻く人々の優しさに胸を打たれます。

販売員 / 八重田幸子

「贗 まがいもの」黒川裕美

■ 帝展に入選するほどの腕間を持ちながらも師匠に従うことをよしとせず、落ちぶれて転がり込んだ家の2階で幽霊がばかり描いている馨。面倒を見る形となった姉妹は旅の一座の母親がなかなか戻らない中を食べるものにも困る生活をしていた。家まで追い出されそうになって馨も発起し絵を画商に持ち込むものの、売れたのは師匠の模写だけ。昔の知人にも小馬鹿にされたことから馨を姉妹は師匠の贗作を仕立てて売りつけ難局を乗り切るが、そんな馨の身に以上が起こる。才能があっても作風が求められない者の怨嗟が聞こえてくるような物語。オリジナルが認められる世界をこそ望みたいが、そうもいかない状況で戦う馨の決死を応援したい。

書評家/ライター / タニグチリウイチ

「マタギガンナー」Juan Albarran、藤本正二

■ このパターンの組み合わせって純粋に面白いです。山野さん（主人公）のセンスもサイコーですが、これまでの経験値からのスキルが素敵過ぎます。

株式会社エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部 大介

「魔法のリノベ」星崎真紀

■ もう、すでにドラマ化しましたが、漫画で読むと全然違うので、ちゃんと漫画で読んで欲しいと思ってノミネート
主人公のホスピタリティ感のある営業やカウンセリングは見習いたいですね。

tetote 代表 / カ丸 真

「まめで四角でやわらかで」ウルバノヴィチ香苗

■ 舞台は江戸。柔らかで流麗なタッチで、豆腐や月見団子など食べ物にまつわるエピソードを連ね、季節感豊かな庶
民の暮らしをいとおしむ。大雪の夜、土手の屋台で焼きたての田楽をほおばり、熱々のそばをすする場面は絶品だ。
ああハラが鳴る！

朝日新聞記者 / 小原篤

「マリッジトキシシン」依田瑞稀、静脈

■ 出てくるキャラといい、散りばめられたパワーワードといい、クセの強さが病みつきです。

教師 / 持丸宏司

「マロニエ王国の七人の騎士」岩本ナオ

■ 相変わらずとても細かい描写の綺麗な絵です。お話も面白く、泣けるところもあります！キャラクターが生き生き
しています。

バイオリニスト / 佐藤帆乃佳

「マンガ ぼけ日和」矢部太郎、長谷川嘉哉

■ 認知症専門医のエッセーのマンガ化。進む症状をおおらかに受け止め、介護の苦勞にやさしく寄り添う。シンプル
な線であればこそ、絵のうまさ際立つ。画風と題材がベストマッチ。ほのぼのしてユーモラスでちょっと泣けて、
心が軽くなる。いま読まれるべき1冊。

朝日新聞記者 / 小原篤

「みいちゃんと山田さん：みいちゃんが死ぬまでの12ヶ月の話」ダイアナ

■ Xで投稿されているマンガ。実体験ベースということでかなりリアルな感じがある。作者自身を投影しているだろ
う主人公はマンガ家を目指していて、きっと紆余曲折あっただろうけど今ではXでこうやってマンガを描いて人
に届けているということが、時代の変化と夢を叶える方法の進化を感じた。マンガ自体すでにファンがついていて、
楽しみにしているひとたちがいる。毒親や知的障害、社会インフラ、夜の仕事など実際の社会にある課題について
掘り下げている。この漫画を読まなければ、この業界の人たちの生っぽい声などを知ることがなかった身としては、
やはり読んでよかったと思った作品なので一票を入れた。

クラスター広報 / 西尾美里

「みっしょん！！」入江喜和

■ 本作の主人公も、ポルシェに乗る謎の女性に触発されて、MT車の免許をとることになった主人公。中年女性が初
めて免許をとる、という行動の背景には「自由への渴望」があることが多いように思う。それだけに、ドラマ性は
約束されたようなもの。入江作品ならではの人間ドラマにも期待大。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

「見るからに怪しい二人」鬼澤馬勇

■ 見た目が悪すぎる二人はとっても優しい。優しい行いを日々するも見た目が悪過ぎて警察沙汰。読むとなんだか癒
されます

カメラマン / 平沼久奈

「ミワさんなりすます」青木U平

- これから、どうなるのでしょうか。毎回話が終わる度にソワソワします。ハッピーエンド希望ですが、どうなるのかしら。最近、ミワさんのはっちゃけたところが出てこなくて、少しさびしく思っています。はっちゃけっぷりのファンなので…。

書店員 / 桶谷佳代

「MUJINA INTO THE DEEP」浅野いにお

- 社会制度やダイバーシティの本質を問う、風刺たっぷりのストーリー展開が最大の魅力。個人を守り・自由にするはずの人権を手放した“ムジナ”たち。彼女達が、誰よりも（人権を持っている人達よりも）強く・自由に生きようとする姿に強い憧れを抱く。アンリアルエンジンを駆使した超迫力のアクションシーン（特にカメラアングル!）は、漫画制作におけるエポックメイキングな作品になること間違いなし。

弁護士・三村小松法律事務所 / 三村量一

- 全てにおいて完成度が高すぎる。とにかくカッコイイ漫画。

PENICILLIN / HAKUEI

- これから始まる物語の奥深さを感じつつ、今はこのアクションのカッコよさを心ゆくまで楽しんでいたい。

医師 / 岸本 倫太郎

「娘がいじめをしていました」しろやぎ秋吾

- もしも自分の娘がいじめの加害者だったら…漫画的表現では性格の悪い子供には性格の悪い親がセットになりがちですが、これは至って普通の善良な母親がいじめをしていた娘に悩み苦しむ話。自分の娘が信じられなくなって気持ち悪いとすら感じるようになってしまう母親が描かれていて新しかったし、もっと読んでみたいと思ったテーマ

bar 図書館 / 岡部愛

「宗像教授世界篇」星野之宣

- いわずと知れた大作の続編。個人的に大好きなので……。未読の若い方々も、この機会にぜひ!

本と文具ツモリ 西部店 / 津守晋祐

「女神の疵痕」シギサワカヤ

- 憧れの作家に惹かれ文芸出版社の営業になり平穏な日々を送っていた女性編集者が、何の因果か担当編集に抜擢されるも、憧れていた作家本人が相当アレな人物で……という、これぞシギサワワールドといわんばかりに振り回されつつも、ほの暗い事情も垣間見えという心の機微や、はっきりと表現できない感情の「あわい」を細やかに描いている最新作。

住職兼ライター / 蟬丸 P

「め組の大吾 救国のオレンジ」曾田正人、富山玖呂

- 懐かしい。昔夢中で読んでいため組の大吾の続編が! 特別救助隊員になって蘇りました ^_^

カメラマン / 平沼久奈

「めくり、めぐる」中陸なか

- 思春期の親に対する素直になれない感情の揺れが、これでもかと描写されていて、その頑なさがほどけていく過程をしっかり時間をつかって見せてくれます。それだけで終わるかと思ったら、その先の展開まできれいに、上下巻で美しくまとまった構成がすばらしい。短編集や、少ない巻数できれいに終わり、それでいて豊かな読後感を与えてくれる作品に出会ったときの感動は特別です。他にも候補になった短編漫画と迷いましたが、瑞々しい感動をくれたことへの感謝と、今後の期待を込めて。

WEB制作・ディレクター / デザイナー / 河本 智芳

「♀ガキとおじさん」サラマンダ

■ 何かか憑いている、そんな部屋に巣くっていたの少女の形をした「餓鬼」だった！という仏教でいうところの幽霊的なモノである♀ガキとロリコンだが世間体を死ぬほど気にするサイコパスおじさんという世界観の構築に笑いつつも、丁寧に餓鬼のあれこれを描いているので中々に現代の説話文学ギャグ漫画として秀逸な作品。

住職兼ライター / 蟬丸P

「もぐら(仮)」やましたれお

■ どれ今月の新刊は……、1巻目、コロコロか、どんなだろう？って何気なく読んだら驚いた若干19歳のデビュー作。天才か！！不思議な「山田もぐら」を中心に巻き起こるSF(すげえふしぎ)ワールド。コロコロレジェンドへのリスペクト満載な出だしから始まり、広がるもぐら世界。コロコロは大人になって読んでも侮れない！

COMIC ZIN 商業誌担当 / 塚本浩司

「やまさん～山小屋三姉妹～」坂盛

■ 山小屋を営む三姉妹とアルバイト学生を中心としたお仕事コメディ。専門家が見れば疑問点も出そうだが、魅力的なキャラクターと蘊蓄を活かしたストーリーが楽しく、誠実な作りも好ましい。良作とはこういうものだ。

書評家 / 福井健太

「ややこしい蜜柑たち」雁須磨子

■ や・ややこしい～けど妙に面白く、みんながみんな可哀想なのだけで一生懸命生きていて続きが気になります。

バイオリニスト / 佐藤帆乃佳

「ヤンキー君と科学ごはん」岡叶

■ 料理は科学だとは言うけれど、本当に化学の補習で調理実習をやろうとは。ヤンキー君が真面目に補習を受ける理由が、妹弟に美味しいご飯を食べさせるためなの、また可愛らしいです。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店 / 山本さとみ

「夢なし先生の進路指導」笠原真樹

■ 夢なし先生だからこそ出来る進路指導。生徒たちをどんな風に指導するのか、と思いきや先生自体も何かしら秘密をかかえている様子で、、先生の秘密や、様々な夢を持って卒業する生徒たちの続きが気になる作品。

主婦 / 碓氷麻里子

「羊角のマジョロミ」阿部洋一

■ 可愛らしさと不気味さとフェチズムが渾然一体となった唯一無二の世界観が最高！ほぼ2人しか登場人物が出てこないのにも関わらず、常に予想の斜め上に行く展開の数々に読みながらワクワクが止まりません！

会社員 / 小野塚博之

「ようこそ！FACT(東京S区第二支部)へ」魚豊

■ ち！の作者の最新作。先日地震の時「地震兵器というものは存在しません」と気象庁がわざわざ発表したほど、世界中で数を増やしている所謂“陰謀論者”の、その側に立ってどういうふうそこにのめり込むかをウシジマくんのようなリアルな視点から描いている今作は凄まじいドキュメント性を感じて好きでした。

OKAMOTO'S / オカモトショウ

■ 蔓延するフェイクニュースやSNS……情報(過多)社会で何を信じていいのかわからなくなった現代の闇を秀逸に表現している一作。他方でシリアスな話になりすぎず、ラブコメ要素も抱き合わせて話を転がす離れ業も必見。主人公がディープステイトと闘う覚悟を決めて行動する姿は、何故か応援？(いつか幸せになってほしい……)してしまう。俯瞰してこの作品(22話まで)を見返してみると、小さな街のなかでびっくりするくらい何も起こっていないことに驚愕する。その虚無感すらも、また一興。

弁護士・三村小松法律事務所 / 三村量一

「幼稚園 WARS」千葉侑生

- 1話目からアニメ化が想像できるほど、誰が読んでも楽しめる作品。ほっこり(幼稚園)と激しさ(WARS)が読者を飽きさせない。元殺し屋である主人公リタの奔放な性格と圧倒的な強さは読んでいて気持ちがいい。殺し合いをしているはずなのに基本どのページをめくっても明るい気持ちになれるのがまた良い。

スターダストプロモーション・アイドル / 秋本帆華

「40までにしたい10のこと」マミタ

- 漫画上手いな〜というのが率直な感想。ちょっとだけ変わりたい自分、イケメンからの溺愛、可愛いマスコットアイテム等、少女漫画の Teppan を踏み抜く勢いで王道なのに、すぐにでも実写化出来そうなトレンド感…BL というジャンルの勢いを特に感じる1冊でした。

中央書店 / 井出麻悠美

「来世は他人がいい」小西明日翔

- ヒリヒリします…！最新刊では何故ここまで吉乃に執着するのかがわかる幼少期の話も出てきて、益々面白く、危険になってきました。笑える部分と危ない部分が隣り合わせで、すごいスピードで進んでいき、続きが気になります。

バイオリニスト / 佐藤帆乃佳

「雷雷雷」ヨシアキ

- 借金のため宇宙害蟲駆除会社で働く18歳の少女がUFOにさらわれ、宇宙害獣との戦いに巻き込まれるSFアクションコメディ。絶妙な緩急の描写や丁寧なストーリー構成が光り、一話ごとの読了感や終盤の山場での緊張感も抜群です。描かれた害獣のデザインやスプラッタシーンも個性的で魅力的でした。

会社員 / 三浦佑樹

- 好みドンピシャ!! ドンピシャすぎて選ばないということができなかった。緊張と抜きのバランスといい、確かな描写力にささえられた毒の入り方といい最高です。この調子でいてください。続き楽しみにしてます!!

WEB制作・ディレクター / デザイナー / 河本 智芳

- 起きてその姿になってたらやだなと思う姿。女の子が怪獣だと愛嬌もあってよいです。

デザイナー / 平沼寛史

「ラストカルテ - 法獣医学者 当麻健匠の記憶 -」浅山わかび

- 目の前をアライグマの集団に横切られたり、近所でニホンジカの日撃情報が相次いだり、首都圏に住んでますが、最近では生態系が壊れてきているのを身近に感じています。今年はクマ出没のニュースも多かったですし。この作品が、問題を知り、考えるきっかけを与えてくれました。いま読むべき作品です。

会社員 / 野口忠義

「落花生」折田洋次郎

- 現代においてなかなかない泥臭い漫画を描かれる作家さん。しんどくやるせない話の中に、リアルにありそうな救いを最後に描いてくれているから読後感が辛い。

bar 図書室 / 岡部愛

「龍子 RYUKO」エルド吉水

- 一コマ一コマがスタイリッシュで正にアート。暴力につぐ暴力！美女と日本刀！海外の人もそら好きでしょうよ。こーゆー漫画が安価に手に入るのが素晴らしい！

中央書店 / 井出麻悠美

「龍とカメレオン」石山諒

- クズな売れない漫画家と逆境にもえる売れっ子漫画家の中身が入れ替わってしまう。どんなときでも前向きな売れっ子漫画家臥龍のきもちに引っ張られるマンガです

カメラマン / 平沼久奈

- 2023年に単行本で始まったシリーズではこれが随一だった。マンガを書くこと、読むこと、出版すること、マンガを取り巻く周辺状況そのものを異能バトルとしてエンタメに昇華。シンプルに強くて面白い。主題的にも、いかにも書店や出版業界にたむろしていそうな方々が一番好きなやつで、話題にしやすくてかつ売りやすそう。はいはい確かに大好物ですよ、うめえうめえとか言いようがない。

ソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

- いわゆる体の「入れ替わり」ネタですが、人気マンガ家が人気作を没収される視点が、底辺から再度スタートという着眼点が実に面白い。王道の少年マンガは、やはり良いものですね。

サブカルライター / 河村鳴紘

「令和元年のえずくろしい」大山海、上梨裕奨

- 社会から外れた人間たちの集まるシェアハウスのどろどろ。人間の愚かさをデフォルトとした世界観に降参しました。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

「令和のダラさん」ともつか治臣

- 山の崇り神と山守の家に生まれた子共達との交流ギャグ漫画という「そういう角度で来たか！」と唸った作品。ともかくにも緩急の付け方が非常に秀逸で、前半は怪奇・伝奇作品として崇り神がいかに生まれたかという歴史を遡るパートで作者の好みを反映したやや劇画調で描かれる凄惨な話を描きつつも、現代パートに移るや、その落差を利用したギャグが読者を緊張と緩和の世界にブチ込むというジェットコースター的な展開と読後の余韻の良さを両立させている良作。まあ本職的には「お神さん事は洒落にならんで気安く接する事ができるのは子供のみ」と付け足しておきたいはあります。

住職兼ライター / 蟬丸P

- 昔から妖怪をさらに創作して物語が語られることはあるが、ネットから生まれた怪異がさらに創作をされて、時々ホラーなハートフルコメディになっちゃった！何言ってるだ？と思われるでしょうが、日本人の想像力と創造力ですげえんだなと思いながら読んでます。

鳥取県県立高校教師 / 佐川ゆかり

- 山の奥に封じられている古いタタリ神、屋跨斑（やまたぎまだら）。上半身が女性、下半身が大蛇という。数百年もの間、山を守り、穢す者を死に追い込んでいた。なのに、なぜか三十木谷きょうだいには振り回されっぱなし。そして登場人物がほぼオタクばかりというw。ホラータッチの絵柄のギャグマンガというギャップがすごいです。

弁護士 / 三葛敦志

- 昔、ニコニコ動画でとんでもねえ熱量でとんでもないクオリティのTRPGリプレイ動画【汚っさんの備忘録】をやった方の連載。洒落怖都市伝説のキャラクターをうまい感じに落とし込んで物語紡いでいて、そのハッタリの効かせ方とか理屈の付け方とか超好み。万が一にでも流行らねえかなあということで推します。

ソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

「ローズ ローズィ ローズフルバッド」いくえみ綾

- 感情移入がすごくて、周りにお薦めしまくった作品です。0から生み出されるマンガと、それを生み出したすべての漫画家、スタッフに心からの敬意を。

マネージャー / 樋口健

「路傍のフジイ」鍋倉夫

- これは現代における救いの漫画です。主人公は、承認欲求ゼロ。世間の目など気にもせず、SNS など無縁の世界。ただただ”個人的に幸せであることを楽しみ、そしてそれを望み続けています。世界を救うとか、実は影ながら実力者で〜とか、努力と根性でのしあがる〜とか、そういうテンプレートのサクセスストーリーとは真逆をいくからこそ生まれる”リアルな幸せ”が描かれている日常系の漫画です。

会社員 / 佐藤優

- 面白いです。なんでもない人が主役の漫画です。ドラマで言えば「通行人 K」ぐらいの存在感の無さの主人公。ただ、周りの登場人物はそんな凡人に心を動かされたりする。鍋倉夫先生の前作「リボンの棋士」という将棋漫画が大好きな漫画なのですが、そこでもサブキャラだと思っていた土屋という人物が心を動かすシーンがあります。サブキャラを主役並みに輝かせることができるのが、鍋倉夫先生の得意で好きな部分なのかもしれません。とても大好きな作品です。

吉本興業・芸人 / ムーディ勝山

「ワイルドストロベリー」米元いれ

- 植物が人間を支配する世界での兄妹の話。絵と世界観がとても綺麗。場所に合った存在感のある敵キャラが良い味を出している。ギャグ要素も程よい匙加減で散らばっているのでシリアスになり過ぎず楽しく読める。

スターダストプロモーション・アイドル / 秋本帆華

「訳アリ心霊マンション」ネブクロ

- 画力が高く、霊の登場は本当に怖いです。怖いですが…マンションの大家さんである主人公の性格と特殊能力(?)なのかその落差が安心するし面白いです。ホラーが苦手でも最怖と安堵感を一度に味わえる珍しい作品。テンポが非常によく、勢いと一話完結スタイルで途中でも楽しめると思います。

図案家 / 大橋寛子

「わたしたちは無痛恋愛がしたい ~鍵垢女子と星屑男子とフェミおじさん~」瀧波ユカリ

- 全女性が共感できるポイントが必ずあるし、女心がわからない男性はこれを見ればいい!! 全人類に勧めたい漫画。勧めて読んでくれた人はみんなハマっています。ほんとに全員に読んで欲しいです! 主人公のモヤっとしたことや、違和感を言語化できる才能が私にも欲しいっ!

ヘアメイク / 北原由梨

「私のアルバイト放浪記」鶴崎いづみ

- 1982 年生まれの美大卒の著者が新卒後 2 年半編プロで勤めたあとに転々としたバイト生活の「観察と編集」(という発行元なのである)。目次をそのままあげれば、リペアスタッフ、学習塾講師、測量会社従業員、頭部モデル、イラストレーター、梅調査員、工場作業員、宅配便受付、お掃除、水道検針員、引越梱包、工場 DTP、中国人予備校 DTP、青果部というアルバイトの観察記録である。82 年というと氷河期世代後期か、わたしが 2000 年に大学を卒業した氷河期ど真ん中なので、アルバイトを転々としたような 20 代というのは勝手にシンパシーを感じたりするわけです。エッセイ漫画と言ってしまってもいいのかもしれないけど戸惑われる、絵日記、絵物語みたいな(言葉変えただけですね)、ふしぎな空気感。観察対象は社会であり、自分であるのですが、自分探しというには、その観察眼の被写界深度が浅いわけではなくて、この著者をこれからもよく観察したいという気持ちにすぐなりました。

教員 / 戸田穂

「わたしはツマミをあきらめない!」小原ヨシツグ

- 女子大生が採集した食材を調理して友人たちと呑むだけの話から、かくも心地良い空間を作る演出が素晴らしい。全三巻という腹八分目のボリュームも妥当。

書評家 / 福井健太